

発掘調査報告第20集

駒ヶ根東部土地改良区東部地区県営ほ場整備事業(昭和60年度分)
埋蔵文化財緊急発掘調査

青木北遺跡

——縄文時代後期環状配石址群——

1986. 3

南信土地改良事務所

駒ヶ根市教育委員会

発掘調査報告第20集

駒ヶ根東部土地改良区東部地区県営ほ場整備事業(昭和60年度分)
埋蔵文化財緊急発掘調査

青木北遺跡

——縄文時代後期環状配石址群——

1986. 3

南信土地改良事務所

駒ヶ根市教育委員会



青木北遺跡 環状配石址群 (西より)

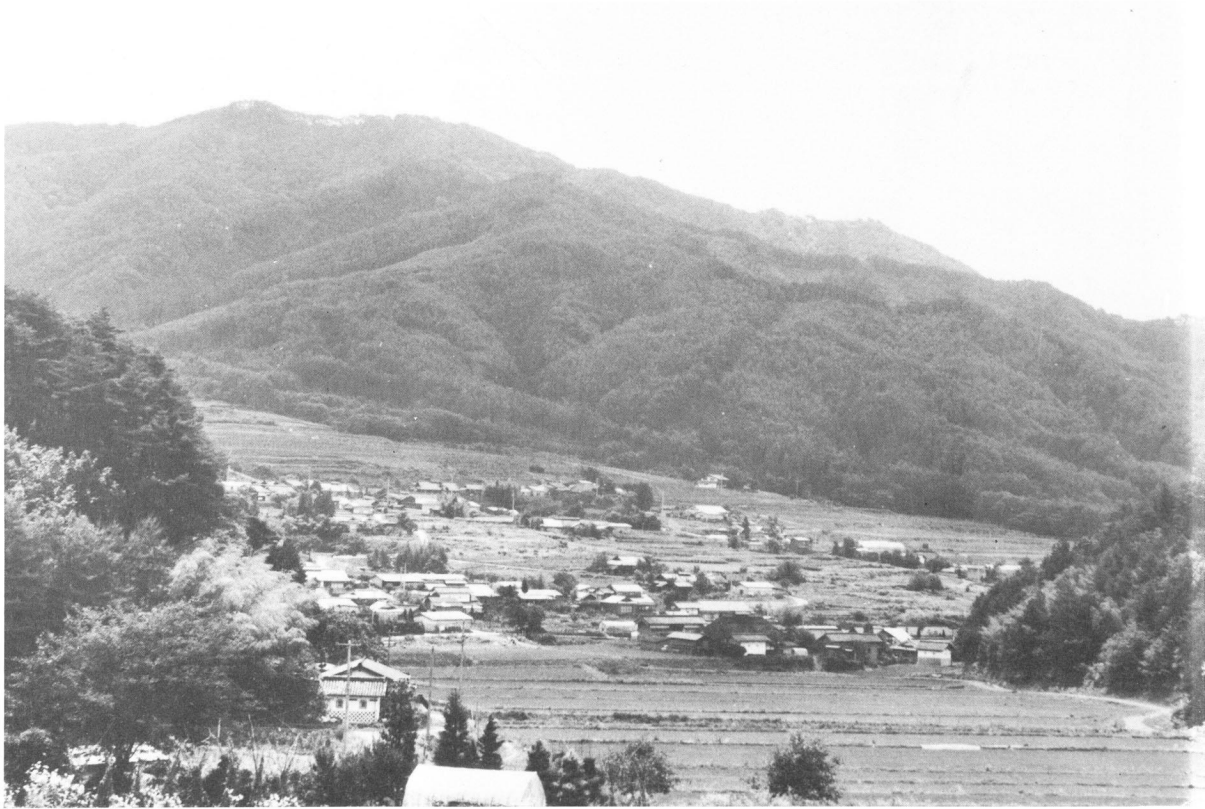


青木北遺跡 配石址群立石復原状態 (西より)

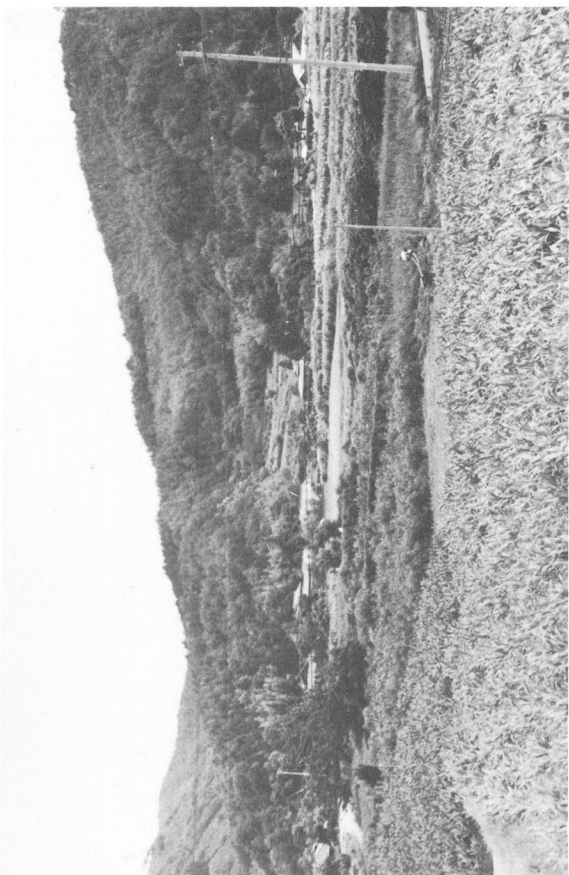
1 青木北遺跡遠景（北より）—中央の休耕畑地帯—



2 同上、遠景（西より）



1 青木北遺跡近景 (南より)



2 青木北遺跡近景 (南東より)



青木北遺跡近景 (東より)



4 青木北遺跡近景 (北東より)



序 文

今回ここに、刊行の運びとなりました報告書は、駒ヶ根市東部土地改良区駒ヶ根東部地区の県営ほ場整備事業に伴い、昭和60年度に実施された青木北遺跡の緊急発掘調査報告書であります。

発掘調査を行いました青木北遺跡は、駒ヶ根市東伊那火山新井地籍に所在し、伊那山脈の一角であります高鳥谷山及び火山峠に源を発する塩田川の左岸段丘上に位置しており、扇状地の中央部から先端部にかけてのやや高い舌状台地上に立地しております。

当遺跡の周辺の遺跡調査としてましては、南側の青木遺跡（昭和58年度）、南西側の青木城遺跡（昭和59年度）がそれぞれ調査され、戦国時代末期の天正年間初めに、青木城に居館を構えたと伝えられる牛山道賢の動向及び歴史的な位置付けの一端を解明するという成果が挙がりました。

本年度におきましては、文化庁及び長野県教育委員会の御指導と御高配を得、さらには、南信土地改良事務所の御協力を得て、日本考古学協会会員林茂樹氏を団長とする青木北遺跡発掘調査団を編成し、発掘調査を実施することができました。調査の結果、縄文時代後期の環状配石址群をはじめ、配石址13ヶ所、土壙23ヶ所、焼土址2ヶ所、柱穴群、弥生時代中期末から後期にかけての竪穴住居址1ヶ所の遺構と、縄文時代後期初頭から中葉にかけての土器・石器、弥生時代の土器・石器、平安時代以降の土師器、灰釉陶磁器等の遺物が多数検出されました。

特に、縄文時代後期の土壙とピットを外帯にもつ環状配石址群は、東日本の西限域の発見として、県下はもとより全国的にも、今後、貴重な資料として注目されるものであります。

発掘調査期間中におきまして、遠路を問わず御指導と御助言を賜わるべく来訪されました慶応義塾大学名誉教授江坂輝弥先生には、心から感謝の意をここに記して申し上げます。

また、長期間にわたる発掘調査の中で、調査を御指導下さった林茂樹団長を始め、快く発掘作業に参加していただいた地元の方々、事業に深いご理解をいただき、遺構（環状配石址群）の埋没保存に御協力をいただいた南信土地改良事務所、駒ヶ根市東部土地改良区、地主、工事負請者の方々等、多くの皆様の御協力とご厚意によりまして所期の目的を達成することができました。

ここに、関係者の皆様方に心から感謝の意を申し上げますとともに、この報告書が地域史研究のお役に立つことを念願する次第であります。

昭和61年3月20日

駒ヶ根市教育長 木 下 衛

例 言

本報告書は、昭和60年度駒ヶ根東部地区県営ほ場整備事業に伴い、青木北遺跡が破壊される状況となった為、南信土地改良事務所の委託を受け、国庫・県費補助金を得て実施した青木北遺跡緊急発掘調査報告書である。

1、青木北遺跡発掘調査の構成

- 1) 遺 跡 名 青木北遺跡
- 2) 所 在 地 長野県駒ヶ根市東伊那火山3674、3686、3691
- 3) 調 査 原 因 駒ヶ根東部地区（東伊那）県営ほ場整備事業に伴い、当該遺跡が破壊される現状を招いた為、事業に先立ち発掘調査を実施し記録保存を図る。
- 4) 調査委託者 南信土地改良事務所 所長 関島喜徳郎
- 5) 調査受託者 駒ヶ根市 市長 竹村健一
- 6) 調 査 主 体 駒ヶ根市教育委員会及び教育委員会が組織する駒ヶ根市埋蔵文化財発掘調査会
- 7) 調 査 期 間 発掘調査 昭和60年7月1日～昭和60年11月23日
整 理 昭和60年8月6日～昭和61年3月20日
- 8) 調 査 方 法 4 m × 4 m のグリット設定による平面発掘
- 9) 調 査 面 積 2840㎡

2、調査整理及び報告書作成業務内容

- 1) 遺構の実測は、小原晃一、北澤武志、桐山清一、中村文夫が行なった。
- 2) 写真撮影は、発掘調査・整理ともに、林茂樹、小原晃一が行なった。
- 3) 遺物の洗浄は、小町谷春子、小町谷元幸、小町谷杉穂が、注記作業及び拓本は、小林さな恵、峯田美智子が行なった。
- 4) 遺物の実測は、小原晃一、北澤武志、桜井弘人が、遺物及び遺構図のトレースは、小原・北澤・小林・峯田が、図版作成は、小原が行なった。
- 5) 報告書の執筆は、林茂樹・小原晃一が担当した。
- 6) 発掘調査の中で、環状配石址群等の遺構の分析については、慶応義塾大学名誉教授江坂輝弥先生に御指導と御助言を賜った。
- 7) 本遺跡の出土品及び諸記録・図面は、市立駒ヶ根博物館が保管している。

3、本報告書の内容

- 1) 遺構・遺物関係の図面の縮尺については、その都度明示してある。
- 2) 遺物を表示した記号及び遺構等の断面層位は、その都度明示してある。
- 3) 遺物実測図に掲載されているもので、写真に掲載されていない遺物もあることを謝す。
- 4) 本書は、調査による遺構・遺物の図示に重点をおき、文章記述は簡便とした。
- 5) 遺構の中で、当初「集石址」として把握したものを、数々の御教示により本書では、「配石址」として把握するので、写真・図版等の無修正を御了承いただきたい。

目 次

序 文 例 言 目 次

第Ⅰ章 発掘調査に至るまでの経緯	1
第1節 保護措置の経過	1
第2節 調査会組織（駒ヶ根市埋蔵文化財発掘調査会）	1・2
第3節 発掘作業経過（発掘調査日誌）	2～6
第Ⅱ章 遺跡の環境	7
第1節 位置及び地形・地質	7
第2節 歴史的環境	7
第Ⅲ章 発掘調査	9
第1節 調査概要	9
• 試掘調査報告	9
• 発掘調査報告	14
第2節 第Ⅱ調査区南部分遺構及び遺物	16
〈遺構〉	16～34
〈遺構に伴う遺物〉	35～62
〈遺構外出土出要遺物〉	63
第3節 第Ⅱ調査区南部分まとめ	66
第4節 第Ⅱ調査区北部分遺構及び遺物	69
〈遺構〉	69～86
〈遺物〉	87～114
第5節 土器底部の網代圧痕について	115～118
第Ⅳ章 総 括	119・120

挿図目次

- 第1図 青木北遺跡位置図及び周辺遺跡分布図
- 第2図 県営ほ場整備事業駒ヶ根東部地区計画平面図
- 第3図 青木北遺跡地形図
- 第4図 青木北遺跡調査範囲図
- 第5図 試掘第Ⅱ調査区グリット土層図
- 第6図 第Ⅱ調査区グリット設定図
- 第7図 第Ⅱ調査区南部分遺構分布図
- 第8図 配石址1・10号実測図
- 第9図 配石址2・3号実測図
- 第10図 配石址4・5・6・7号実測図
- 第11図 配石址8・9号実測図
- 第12図 配石址11号実測図
- 第13図 配石址12号実測図
- 第14図 配石址13号及び溝址・焼土址実測図
- 第15図 土壙1・2・3・4号実測図
- 第16図 第1号住居跡実測図
- 第17図 第Ⅰ群土器拓影図
- 第18図 縄文時代後期第Ⅳ群第1・2・3類土器拓影図
- 第19図 縄文時代後期第Ⅳ群第4・5・6・7類土器拓影図
- 第20図 縄文時代後期土器底部実測図
- 第21図 縄文時代後期注口土器及び土製円版実測図
- 第22図 出土石鏃実測図
- 第23図 石錐・スクレイパー・円刃搔器・ピエスエスキュー実測図
- 第24図 出土石器実測図（打製石斧・磨製石器・石剣・敲打器・磨り石）
- 第25図 出土石器実測図（石錘・凹み石）
- 第26図 石棒実測図
- 第27図 弥生時代土器（第Ⅴ群）・石器実測図
- 第28図 平安時代土師器・須恵器（第Ⅵ群）・中世陶器・近世陶磁器（第Ⅶ群）実測図
- 第29図 鉄鈴（上段）、キセル（下段）実測図
- 第30図 第Ⅱ調査区南部分主要遺物分布図及び遺構配置図
- 第31図 第Ⅱ調査区北部分環状配石址群及び土壙・柱穴・小竪穴分布図
- 第32図 第Ⅱ調査区北部分遺構及び土偶・注口土器分布図
- 第33図 土壙5～11、小竪穴2、ピット群実測図
- 第34図 土壙12・13・23・24、柱穴址1、配石址14～16、ピット群実測図
- 第35図 土壙14・15、小竪穴1、配石址18～20・22・24・26実測図
- 第36図 土壙16～21、P41～44、配石址25・27～32・34実測図
- 第37図 土壙22、P40、配石址33・35・37～40、48・49実測図
- 第38図 配石址21・23・42～47・50実測図
- 第39図 12～17-G-Kグリット遺物出土状態実測図
- 第40図 第Ⅱ・Ⅲ群土器拓影図〈縄文前期・中期〉
- 第41図 第Ⅳ群第1類土器〈称名寺〉拓影図
- 第42図 第Ⅳ群第2・3類A種土器〈堀之内〉拓影図
- 第43図 第Ⅳ群第2・3類B種土器〈堀之内〉拓影図
- 第44図 第Ⅳ群第2・3類A・B類種土器〈堀之内〉拓影図
- 第45図 第Ⅳ群第2・3・7類A・B・C・D種土器拓影図
- 第46図 第Ⅳ群第6類、第2・3類（縄文）土器拓影図
- 第47図 第Ⅳ群第4・5類A種土器〈加曾利B〉拓影図
- 第48図 第Ⅳ群第4・5類B・C・D土器〈加曾利B〉拓影図
- 第49図 第Ⅳ群第4・5類D・E種、土偶拓影図
- 第50図 第Ⅳ群第7類A種土器拓影図
- 第51図 第Ⅳ群第7類A・B種土器拓影図
- 第52図 出土土器底部〈第Ⅳ群第1・2・3類〉実測図
- 第53図 出土土器底部〈第Ⅳ群第4・5類〉実測図
- 第54図 出土土製円版拓影図
- 第55図 出土打製石斧〈小・中形〉実測図
- 第56図 出土打製石斧〈大形〉実測図
- 第57図 出土石錘〈小・中形〉実測図
- 第58図 出土石錘〈大形〉実測図
- 第59図 出土石錘〈大形・切目〉実測図
- 第60図 出土石鏃ピエスエスキュー実測図
- 第61図 出土土器底部網代圧痕文の種類
- 第62図 出土土器底部網代圧痕文拓影図

図版目次

図版1 青木北遺跡遠景

図版2 青木北遺跡近景

写真目次

写真I 第II調査区グリット土層
写真II 第II調査区南部分遺構全景及び配石址1・10号
写真III 配石址2・3号
写真IV 配石址4・5・6・7号
写真V 配石址8・9号
写真VI 配石址11号
写真VII 配石址12号
写真VIII 配石址13号及び溝址・焼土址
写真IX 土壙1・2・3・4号
写真X 第1号住居跡及び遺物出土状態
写真XI 縄文時代後期第IV群第1・2・3類土器
写真XII 縄文時代後期第IV群第4・5・6・7類土器
写真XIII 縄文時代後期土器底部
写真XIV 縄文時代後期注口土器及び土製円版
写真XV 出土石鏃
写真XVI 石錐・スクレイパー・円刃搔器・ピエスエスキュー・使用痕のある剝片
写真XVII 打製石斧・磨製石器・石剣・敲打器・磨り石
写真XVIII 石錘及び凹み石
写真XIX 弥生時代土器(第V群)・石器
写真XX 弥生時代土器及び平安時代土師器・須恵器(第VI群)中世陶器・近世陶磁器(第VII群)

写真XXI 環状配石址群
写真XXII 土壙及び小竪穴
写真XXIII 配石址
写真XXIV 配石址
写真XXV 配石址
写真XXVI 配石址
写真XXVII 配石址及び立石復原状態
写真XXVIII 遺物出土状態、1・2—Tr、権現の泉、外
写真XXIX 第IV群第1・2・3類土器(称名寺・堀之内)
写真XXX 第IV群第2・3・6・7類土器
写真XXXI 第IV群第4・5類A・B・C種土器(加曾利B)
写真XXXII 第IV群第2・3・4・5類D・E種土器及び土偶、土製品、石製品
写真XXXIII 第II・III群、第IV群第7類、第VI・VII群土器
写真XXXIV 出土打製石斧及び磨製石器・石製品
写真XXXV 出土石錘
写真XXXVI 出土石鏃、スクレイパー、ピエスエスキュー、石槍、チャート片、黒耀石片

第Ⅰ章 発掘調査に至るまでの経緯

第1節 保護措置の経過

昭和60年度に南信土地改良事務所が実施する県営ほ場整備事業駒ヶ根東部地区（第3換地区区対象面積180,000㎡）施工区内に、青木北遺跡があり影響が及ぶため、昭和59年9月18日に、南信土地改良事務所岩崎主任、専門家林茂樹氏、市教育委員会原主任、小原出席のもとに事前保護協議を行った。遺跡地は舌状台地の中央部から先端部にかけて立地し、傾斜地であり、耕土が浅いことなどから、畑換地の施工区はできるだけ土盛工法を実施して保存を図るが、水田換地の施工区は事前に発掘調査を実施し記録保存を行うこととなった。以後、県教委、南信土地改良事務所と事業実施について連絡協議を行う中で、調査費用600万円（南信土地改良事務所負担435万円、国庫補助金82.5万円、県費補助金24.7万円、市負担金57.8万円）、調査面積895㎡以上という事業計画を策定した。

事務手続きは、昭和60年1月4日付一文化財関係補助事業計画書提出、4月5日付一文化財関係国庫補助事業の内定通知、4月24日付一国宝重要文化財等保存整備費補助金交付申請書提出、5月10日付一文化財保護事業県費補助金の内示通知、5月25日付一文化財保護事業補助金交付申請書提出、5月30日付一埋蔵文化財包蔵地青木北遺跡発掘調査の通知、6月11日付一南信土地改良事務所長と駒ヶ根市長との間で、「埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約書」を締結、7月1日付一駒ヶ根市長と駒ヶ根市埋蔵文化財発掘調査会長との間で、「埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約書」の再契約締結、6月17日付一国宝重要文化財等保存整備費補助金交付決定、8月1日付一文化財保護事業補助金交付決定通知を受けた。

調査は、駒ヶ根市埋蔵文化財発掘調査会が行うこととなり、青木北遺跡発掘調査団を編成し、団長には林茂樹氏をお願いして、昭和60年7月1日から調査に入った。（小原晃一）

第2節 調査会の組織（駒ヶ根市埋蔵文化財発掘調査会）

顧問	鈴木 義昭（駒ヶ根市教育委員長）	理事	下村 幸雄（市立駒ヶ根博物館長）
会長	木下 衛（駒ヶ根市教育長）	監事	宮下 恒男（駒ヶ根市収入役）
理事	小池 金義（駒ヶ根市教育次長）	〃	北澤 晋六（駒ヶ根郷土研究会会長）
〃	友野 良一（駒ヶ根市文化財審議会会長）	幹事	北沢 吉三（市教委社会教育係長）
〃	松村 義也（〃 〃 副会長）	〃	原 茂（〃 社会教育主任）
〃	林 赳（〃 〃 委員）	〃	野々村はるゑ（市立駒ヶ根博物館）
〃	竹村 進（〃 〃 ）	〃	斉藤 香代（市立駒ヶ根博物館）
〃	中山 敬及（〃 〃 ）	〃	石澤 真一（〃 〃 ）

●青木北遺跡発掘調査団（事務所 駒ヶ根市上穂南2番15号 市立駒ヶ根博物館内）

団 長 林 茂樹（日本考古学協会々員）＜発掘担当者＞

調査主任 小原 晃一（長野県考古学会々員）＜ 〃 ＞

調査員 小町谷 元（上伊那考古学会々員）

指導者 江坂 輝弥（慶応義塾大学名誉教授）

発掘作業員 渋谷吉子、佐藤秋子、渋谷光子、赤羽笑子、宮沢かつゑ、大沼宗吉、久保田房子、
下島清一、小林正信、小林満寿子、白川仁重、佐藤慶子、久保田清衛、吉瀬久司、
林吉十、中村文夫、北澤武志、桐山清一、福沢修一郎、北沢一浩、宮下昌宏、馬場
俊光、石沢昭治、山本利男、西村勝司、市村結美子、福沢俊陽、下平チカエ、北原
和枝

整理作業員 小町谷春子、小町谷杉穂、小町谷元幸、小林さな恵、峯田美智子、北澤武志、桜井
弘人

協力者 北原靖、気賀沢進、田中清文、赤穂公民館青年学級

見学者 東伊那火山地区民、赤羽義洋、赤坂文隆、三村兼清、竹内公彦、南信土地改良事務
所、倉田文和、県教委小林孚・芦部公一両指導主事、信州大学生2名、市教委関係
者（村上和由、小林俊彦、河口芳美）、宮澤美智子、白沢由美、小松原由里、小池
幸夫、読売・信濃毎日・伊那毎日・南信日々・中日・朝日新聞、市企財課、三沢好
一、羽柴利明、駒ヶ根市東部土地改良区、火山換地役員（順不同、敬称略）

第3節 発掘作業経過（発掘作業日誌）

7月1日(月) 発掘調査器材整理、運搬準備。

7月5日(金) 器材運搬、現場草刈り、遺跡遠景写真撮影、地形測量（ $S = \frac{1}{200}$ ）

7月8日(月) テント設営、器材整理、草刈り、地形測量。

7月9日(火) 土手・道草刈り、試掘第Ⅱ調査区4m×4mグリッド設定、1～3・6・7G掘り。

7月10日(水) BM設定（ $L=708.600$ ）、第Ⅱ調査区4・5・8～12G掘り、G（グリッド）断面写真撮影。

7月12日(金) 第Ⅱ調査区5～11G掘り下げ。1～4・6・8・10G断面実測、写真撮影。

7月15日(月) 第Ⅱ調査区12G断面実測。第Ⅰ調査区1～11G掘り下げ、写真撮影。第Ⅲ調査区1
～3・5～8・12G掘り下げ。第Ⅰ・Ⅱ区掘り下げグリッド平板測量（ $S = \frac{1}{200}$ ）

7月16日(火) 第Ⅲ調査区4・9～11G掘り下げ。1～12G写真撮影。第Ⅳ調査区1～6G掘り下
げ。草刈り。BMⅡ設定（ $L=708.700$ ）。第Ⅱ調査区表土ブルドーザーで排土。

7月17日(水) 第Ⅱ調査区4m×4mの主グリッド設定。ブル排土残土排除。縄文時代後期土器・
打製石斧・土師器出土。

- 7月18日(木) 第Ⅱ調査区ブル排土残土排除作業。縄文後期浅鉢土器出土。第Ⅲ・Ⅳ調査区グリッド出土遺物取り上げ。作業風景写真撮影。第Ⅳ調査区周辺平板測量 ($S = \frac{1}{200}$)。
- 7月19日(金) 第Ⅱ調査区 (以下、第Ⅱ区と称す) 1・2-A~G、3-E~Gグリッド掘り下げ。
- 7月20日(土) 第Ⅱ区2~4-A~Gグリッド掘り下げ。5~7-C~Gグリッド掘り下げ。
- 7月22日(月) 第Ⅱ区3~6-A~G出土遺物平板測量・写真撮影。6・7-A~E、8~10-E~G掘り下げ。石鏃・石錘・灰釉陶器・天目茶碗片出土。5-Cより鉄鈴?出土。
- 7月23日(火) 第Ⅱ区8~10-A~C・D~E掘り下げ。5~8-A~G出土遺物平板測量。
- 7月24日(水) 第Ⅱ区1~3-C~G掘り下げ。9~12-A~G出土遺物平板測量・レベル実測・取り上げ。1・2-E~G内に配石址4ヶ所を検出する。2-Eより注口土器出土。
- 7月25日(木) 第Ⅱ区1~4-A~D掘り下げ、仮清掃。2-Bよりキセル吸口出土。
- 7月26日(金) 第Ⅱ区4-C~G・5・6-E~G掘り下げ。仮清掃。5-Fより赤色チャート出土。
- 7月27日(土) 第Ⅱ区1・2-A~G水まき、写真撮影。3~6-A~D掘り下げ。遺物測量・撮影。
- 7月29日(月) 第Ⅱ区1・2-D-G遺物平板測量。7・8-A~G掘り下げ。仮清掃。水まき。
- 7月30日(火) 第Ⅱ区7-A、8・9-A~C掘り下げ。1・2-C~G配石址7基上層平板測量。
- 7月31日(水) 第Ⅱ区12-B~D掘り下げ。10~12-B~G掘り下げ仮清掃。1・2-A~C配石址2基平板測量。出土遺物・礫平板測量、レベル実測。
- 8月1日(木) 第Ⅱ区1・2-F・G、5~7-A~G仮清掃。1~4-A~G出土遺物平板測量。
- 8月2日(金) 第Ⅱ区配石址1~4号清掃。1・2-C~F仮清掃。3~6-A~G遺物平板測量。7・8-D・E内に住居跡状落ち込みあり。ベルトを設定し掘り下げ。弥生土器出土。
- 8月3日(土) 第Ⅱ区配石址1~9号清掃。写真撮影。配石址1・2・4号上層礫排除。土壌1号(3-E)½カット。第1号住居跡掘り下げ。弥生土器・石包丁・石鏃等出土。
- 8月4日(日) 第Ⅱ区等1号住水まき写真撮影。出土遺物平板測量。9・10-A~G遺物・礫実測。
- 8月5日(月) 第Ⅱ区配石址1~11号掘り下げ、清掃。土壌1~3号½カット。第1号住遺物実測。
- 8月6日(火) 第Ⅱ区配石址1~3・10号平板測量。断面実測。11・12-D~G掘り下げ。撮影。
- 8月7日(水) 第Ⅱ区第1号住ベルト層位分析。配石址1~7・10号、土壌1~3号断面実測。
- 8月8日(木) 第Ⅱ区第1号住ベルト除去。柱穴掘り下げ、清掃。配石址3~11号掘り。8・9号プラン実測。土壌4号½カット。断面撮影、実測。配石址1~3・10号平板測量。
- 8月9日(金) 第Ⅱ区配石址4~9・11、土壌4号 $S = \frac{1}{100}$ 測量。第1号住柱穴掘り下げ。撮影。
- 8月10日(土) 第Ⅱ区第1号住平板測量 ($S = \frac{10}{20}$)。テント移動。12・13-B~G礫・基盤実測。
- 8月12日(日) 第Ⅱ区第1号住プランレベル実測。11-D~F礫・基盤レベル実測。器材再整理。
- 8月13日(火) 第Ⅱ区第1号住、配石址13号・溝址 $S = \frac{1}{100}$ 測量。
- 8月14~16日 盆休み。
- 8月17日(土) 第Ⅱ区14-C~G、15-F・G掘り下げ。16・17-E~G出土遺物平板測量、レベル実測、取り上げ。15-Fより縄文後期土偶足部出土。
- 8月18日(日) 第Ⅱ区北東域4×4mグリッド設定。15~18-B~E掘り下げ。遺物多し。

- 8月19日(月) 第Ⅱ区16-B~D、17~19-B~G掘り下げ。14・15-D~G、18・19-D~G出土遺物レベル実測・写真撮影・取り上げ。17-Dより深鉢加曾利B式出土。
- 8月20日(火) 第Ⅱ区14・15-C~G掘り下げ。14・15-B~D、16・17-B~G出土遺物平板測量・レベル実測・写真撮影・取り上げ。14-Dより石棒、15-Dより注口部出土。
- 8月21日(水) 第Ⅱ区14・15-B掘り下げ。配石址2ヶ所遺存か。15-H・I掘り下げ。15-Iより石棒頭部出土。16~19-B~F・G出土遺物平板測量、レベル実測・取り上げ。
- 8月22日(木) 第Ⅱ区16・17-C~G、18・19-H・I掘り下げ。16-Dより偏平な磨製石器出土。14・15-D~G出土遺物平板測量。17-E・Fより配石状の礫群検出。
- 8月23日(金) 第Ⅱ区16・17-B掘り下げ。14・15-B~G出土遺物平板測量・レベル実測。撮影。
- 8月26日(月) 第Ⅱ区15-T掘り下げ。14・15-B~G掘り下げ。14・15-F・Gより出土遺物多し。16・17-D~G出土遺物平板測量。14・15-D~Fよりピット状落ち込みあり。
- 8月27日(火) 第Ⅱ区15・16-T~L掘り下げ。16-H~N幅1mのトレンチを入れる。16-K~N掘り下げ。16・17-B~D、18・19-B~G遺物平板測量。レベル実測、写真撮影。16-Bより縄文時代後期土偶手部出土。17~19-B~Gにかけて配石址群検出。環状をなす状態である。18-Eより土製円版2点出土。
- 8月28日(水) 第Ⅱ区16~18-C~G掘り下げ、仮清掃。配石址14~16号平板測量。14・15-B~D出土遺物平板測量。16-Eより注口土器釣手部、16-Fより土製円版出土。
- 8月29日(木) 第Ⅱ区16~18-B、19-B~G掘り下げ。仮清掃、水まき、写真撮影。小竪穴1号(17-Fを中心として)・柱穴群掘り下げ。配石址14~16号断面実測。遺物測量。
- 8月30日(金) 第Ⅱ区土壙5~8号、柱穴掘り下げ。16・17-E~G、配石址19~26号出土遺物平板測量。16~19-B~G出土遺物ナンバーリング。
- 8月31日(土) 第Ⅱ区土壙9~13号掘り下げ。柱穴群掘り下げ。14・15-B・C内のピットは5m四方のやや方形に配列されている状態である。
- 9月2日(月) 第Ⅱ区14・15-B・C、16・17-B~E内柱穴群掘り下げ。配石址14~16号上層礫除去(下層は黒褐色土が堆積)。土壙5~8号断面清掃。5・7号断面撮影・実測。
- 9月3日(火) 第Ⅱ区土壙8~13号断面清掃、写真撮影、実測。土壙14~21号断面清掃、写真撮影。16~18-T~K、16・17-L~N掘り下げ。土壙群及び柱穴群は北側の配石址群を環状に取り囲む状態である。
- 9月4日(水) 第Ⅱ区土壙14~21号スライド撮影。土壙14~18号断面実測。15-L~N、18・19-L~N掘り下げ。
- 9月5日(木) 第Ⅱ区土壙19~21号断面実測。小竪穴1号断面清掃、写真撮影、実測。18・19-B~G出土遺物平板測量、レベル実測、取り上げ。18-Nより小型注口器出土。
- 9月6日(金) 第Ⅱ区12・13-G~J、15-M・N掘り下げ。配石址34~40号及び礫平板測量。
- 9月7日(土) 第Ⅱ区13・14-M・N掘り下げ、周辺清掃。16-B~Gベルト除去。
- 9月8日(日) 第Ⅱ区土壙5・8・12号、小竪穴2号掘り下げ。14・15-E~G土壙群・柱穴群

平板測量。配石址36～46号ナンバーリング。

- 9月9日(月) 第Ⅱ区土壙5～8号、小竪穴2号掘り下げ終了。土壙11号中途。小竪穴2号、土壙5～13号出土遺物平板測量、写真撮影、取り上げ。15-C・D遺物、土壙群測量。
- 9月10日(火) 第Ⅱ区土壙9・11～21号掘り下げ終了。14・15-B・C内土壙、柱穴群平板測量、レベル実測、取り上げ。遺構平面レベル実測。
- 9月12日(木) 第Ⅱ区17・18-B・C内柱穴掘り下げ。18・19-F内配石址45・46号及び礫群平板測量。第Ⅱ区北部分全景、配石址群、柱穴群、土壙5～13号写真撮影。
- 9月13日(金) テント移動一設営一溝掘り。14～18-G～H掘り下げ。配石址21・42～46号及び礫平板測量。
- 9月14日(土) 第Ⅱ区16～19-G・H掘り下げ。18-Gより乳棒状石斧出土。配石址41号平板測量。16・17-C・D、18・19-D～G内配石址及び礫レベル実測。
- 9月17日(火) 第Ⅱ区14・15-G・H掘り下げ。黒褐色土層より出土遺物多し。土壙22号掘り下げ。黒褐色土層中より粗製深鉢土器約1個体分出土。小竪穴1号礫及び遺物平板測量。
- 9月18日(水) 第Ⅱ区16-G掘り下げ。縄文時代後期土偶右手部出土。小竪穴1・2号仮清掃。土壙15・17～21号平板測量、遺物レベル実測、取り上げ。
- 9月19日(木) 第Ⅱ区16～18-G掘り下げ。16・17-B配石址・礫平板測量。慶応義塾大学名誉教授江坂輝弥先生来訪。配石址群は「環状配石址群」と名付けることが適切であるとの御教示を賜る。全体の約 $\frac{1}{2}$ の発掘であるが、確認調査を今後実施し、ほぼ環状にめぐることが判明すれば、「国史跡指定」を受けられる可能性もあると述べられる。
- 9月20日(金) 第Ⅱ区14・15-D～G土壙・柱穴群清掃。18・19-G・H掘り下げ。小竪穴1号内礫平板測量。土壙16～21号、配石址32・34号レベル実測。土壙14・15号内礫レベル実測。
- 9月21日(土) 第Ⅱ区14・15-B・C清掃、写真撮影。配石址18～24・26号、小竪穴1号レベル実測。土壙・柱穴群レベル実測。第Ⅱ調査区北東部にトレンチ(2×6m)2本設定し掘り下げる。南側(W-E1Tr)トレンチ中央より配石址状礫群検出。
- 9月22日(日) 第Ⅱ区北東部、北側(W-E2Tr)トレンチ掘り下げ。14・15-B・C内土壙群・柱穴群レベル実測。
- 9月23日(月) 第Ⅱ区14・15-B～F土壙群・柱穴群再清掃。W-E1Tr・2Tr清掃。14・15・17・18-B内柱穴群、配石址群レベル実測。配石址18～50号写真撮影。配石址24・25・28号立石復元、写真撮影。
- 9月27日(金) 第Ⅱ区16・17-B～F、18・19-F再清掃。13～15-G～J内出土遺物、礫平板測量。14～16-G・Hにかけて獣骨と考えられる幅5mm×長さ1.5cm平均の骨片が黒褐色土層に数多く検出される。
- 9月28日(土) 第Ⅱ区18・19-B～E配石址群清掃。13～16-G～J出土遺物レベル実測。
- 9月30日(月) 第Ⅱ区配石址24・25・28号再清掃。立石穴写真撮影。配石址25号に根詰め石遺存。

- 17～19-G～J 出土遺物平板測量、レベル実測、取り上げ。器材整理。テント撤収。
- 10月1日(火) 第Ⅱ区13～19-G～N 出土遺物取り上げ。主グイ抜き作業。全景写真撮影。山砂盛土保存準備の為、竹花工業(株)より11t車で24台分=168㎡の山砂を運搬してもらい、小型ブルで、一ヶ所に山積みする。
- 10月22日(火) 第Ⅱ区北部分、土壙5・6号、配石址17・18号埋めもどし。
- 10月23日(木) 土壙7・8号、配石址14号埋めもどし。
- 10月24日(木) 土壙9・10号、配石址15・16号埋めもどし。
- 10月25日(金) 土壙11・12号、小竪穴2号埋めもどし。
- 10月26日(土) 土壙13・14号、小竪穴1号埋めもどし。
- 10月28日(月) 土壙15・16・17・18・19号埋めもどし。
- 10月29日(火) 土壙20・21号埋めもどし。
- 11月2日(土) 配石址19・20号埋めもどし。
- 11月4日(月) 配石址21号埋めもどし。
- 11月5日(火) 配石址22・23・24号埋めもどし。
- 11月8日(金) 配石址44・45・46・47・48・49・50号埋めもどし。
- 11月9日(土) 配石址25・26・27号埋めもどし。
- 11月11日(月) 配石址28・29号埋めもどし。復元した立石は、再び横にして保存する。
- 11月13日(火) 配石址42・43号埋めもどし。西側にかけて除々に深くなる為、作業に手間取る。
- 11月14日(木) 配石址30・31号埋めもどし。
- 11月15日(金) 配石址40・41号埋めもどし。
- 11月18日(月) 配石址32・33号埋めもどし。
- 11月19日(火) 配石址34・35号埋めもどし。
- 11月20日(水) 配石址36・37号埋めもどし。
- 11月21日(木) 配石址38・39号埋めもどし。
- 11月22日(金) 土壙5～21号、配石址14～50号、小竪穴1・2号埋めもどし面、ならし作業。
- 11月23日(土) 器材片付け作業。本日にて、環状配石址群及び土壙群・柱穴群を山砂による埋め戻し保存作業を終了し、発掘作業を完了する。

5ヶ月間という長きに亘る発掘調査期間中、梅雨に打たれ、真夏の炎天下に堪え、晩秋から初冬にかけての寒さの中で、発掘作業に従事していただいた地元の皆様方の心身から成る御理解と御協力により、調査が順調にできましたことに対しまして心から感謝の意を申し上げます。

また、遠路はるばる東京からおいでいただき敬愛なる貴重な御指導と御助言を賜りました慶応義塾大学名誉教授江坂輝弥先生、さらには、無報酬でお手伝いをしていただきました赤穂公民館青年学級の皆様に対しまして重ねて感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

(小原 晃一)

第Ⅱ章 遺跡の環境

第1節 位置及び地形・地質

1. 位置及び地形（第1・2図）

当遺跡は、駒ヶ根市東伊那火山3674、3686、3691番地を中心に東西約300m、南北約200mの規模をもって所在する。国鉄飯田線太田切駅より北東へ約4km、主要地方道伊那・生田・飯田線の東側台地上に立地し、標高は695m～720mを測る。

駒ヶ根市は、三地区から成り、諏訪湖から太平洋遠州灘へと流れ続く天竜川をはさんで西側に赤穂地区、東側南部に中沢地区、東側北部に東伊那地区があり、その東伊那地区の北域中央部に当遺跡は位置することとなる。

伊那谷は、天竜川とその支流である各々の田切川により開析され、西方に木曾山脈（中央アルプス）、東方に赤石山脈（南アルプス）があり、中央構造線をはさんで戸倉山、高鳥谷山を初めとする前山の伊那山地が両山脈と並行して走る。この伊那山脈の一角をなす高鳥谷山及び火山峠に源を発する塩田川が造り出した扇状地の東域やや高い舌状台地先端部に立地し、塩田川の左岸に当る。塩田川との比高差は、約30m前後を測る。

2. 地質

遺跡の層位は、基本的には、Ⅰ層〈耕作土―暗灰褐色土壌〉―Ⅰ'層〈茶褐色土壌〉―Ⅱ層〈暗茶褐色土壌〉―Ⅲ層〈黒褐色土壌〉―Ⅳ層〈明褐色土壌〉―Ⅴ層〈砂礫を含む黄褐色土壌〉からなるが、第Ⅱ調査区南部分においては、Ⅳ層がやや小丘をなす為に、浸蝕を受け、Ⅲ層の堆積が薄く、反対に、北部分は按部状でありⅢ層の堆積が厚い。

地質基盤は、山麓性崖錐面の堆積物〈泥・砂・礫（火山灰）〉―テフラ（赤土）のまじる崖錐性～斜面性堆積物からなり、高鳥谷山塊の崩落が繰り返されて形成されたものであろう。

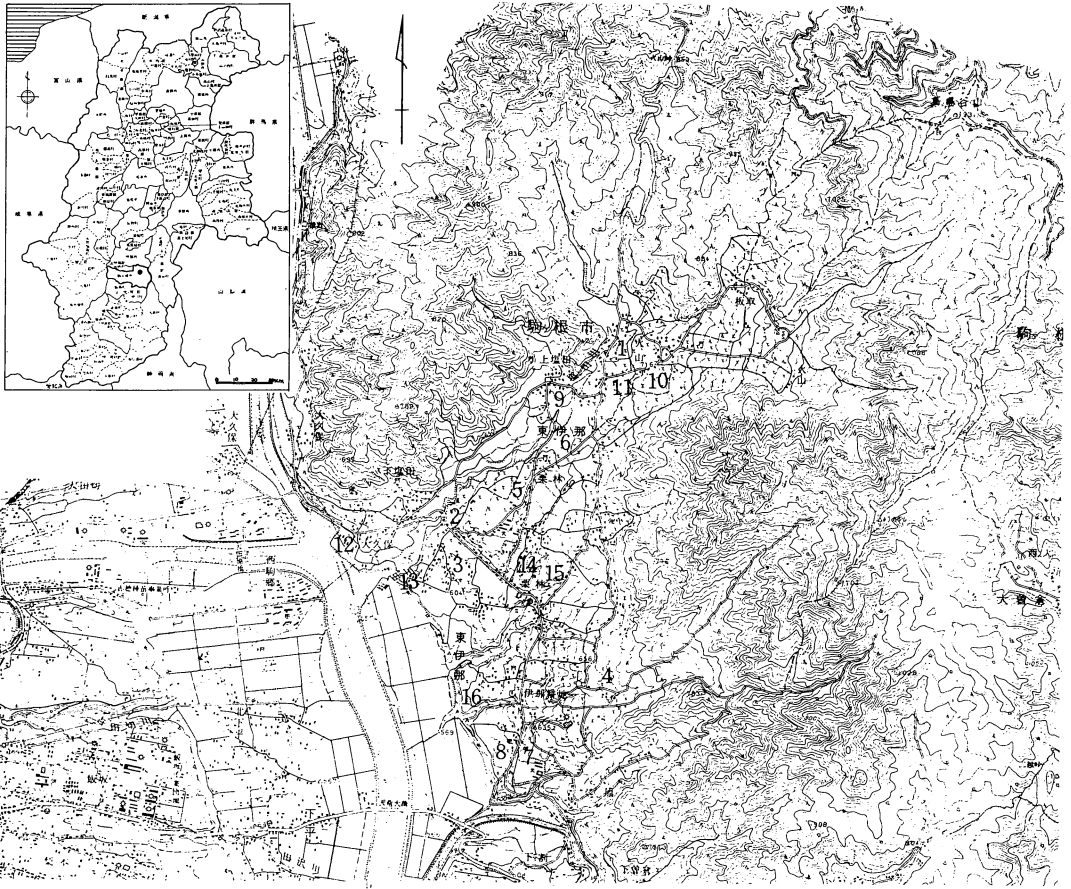
第2節 歴史的環境（第2図）

東伊那地区は、遺跡の宝庫として知られ、「先史及び原始時代の上伊那」での掲載記述を初め、昭和23～26年に実施された「伊那村遺跡」発掘調査に、その真意を伺えるのであります。

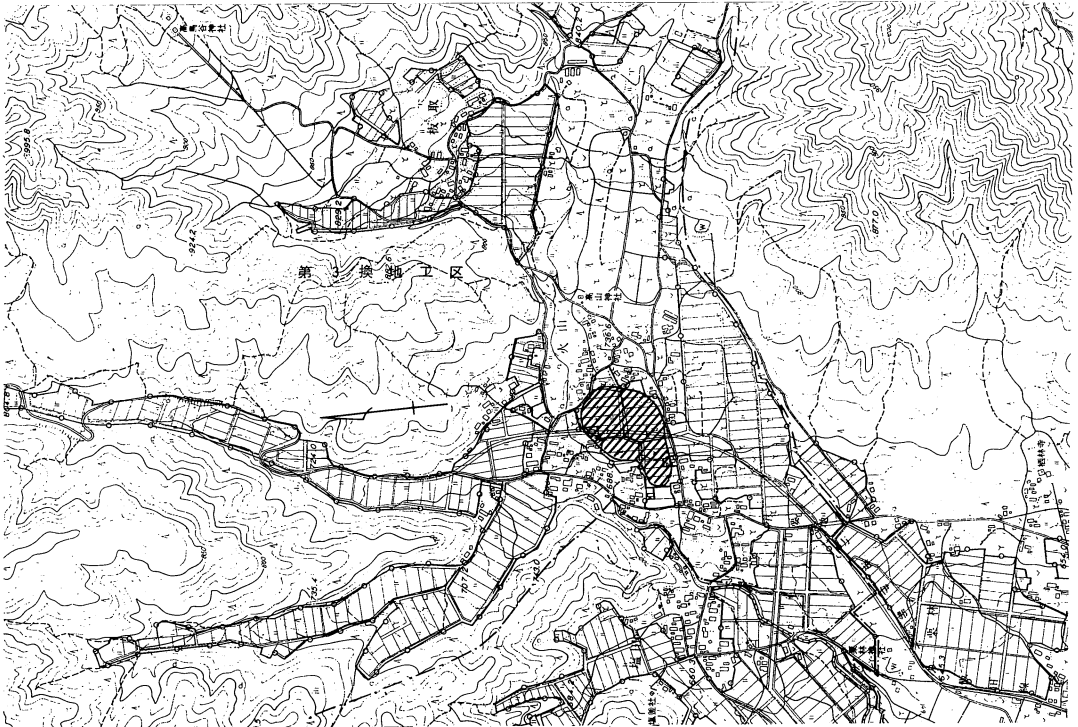
第2図中1―青木北、2―垣外上（弥生）、3―反目・4―山田（縄文）、5―善込、6―栗林神社東（弥生後期）、7―原城（中世）、8―殿村（平安）、9―上塩田（縄文・平安・中世）、10―青木・11―青木城（縄文、平安、中世～近世）、12―大久保・13―高田・14―城村・15―小城（中世）である。

当青木北遺跡は、上記の遺跡の中にあつて、縄文時代後期の「祭祀領域」―環状配石址群―として位置付けられ、一種独特の異相をもつ。周辺地区内での「生活・生産領域」の把握を初め、東伊那地区から伊那谷地域へと時・空間的位相と領域を再検討させる性格をもつ遺跡である。

（小原晃一）



第1図 青木北遺跡位置図及び周辺遺跡分布図 (S=1/50,000)



第2図 県営ほ場整備事業駒ヶ根東部地区計画平面図 (S=1/20,000)

第Ⅲ章 発掘調査

第1節 調査概要

● 試掘調査報告（第4図参照）

＜第Ⅰ調査区＞ 調査区内の西部分約600㎡を対象とした。1.5×1.5mのグリットを10ヶ所設定し掘り下げた。現況は休耕畑であるが、以前は桑畑であり、表土下20～50cmで砂礫ローム層となり攪乱を著しく受けている。2～4・6Gからは出土遺物はなく、1G—黒耀石剥片、5G—硬砂岩剥片、7G（3×3mに拡張）—スクレイパー2点、縄文前期・後期土器片、磨り石1点、敲打器1点、8G—黒耀石剥片4点、土師器片、常滑系陶器1点、9G—黒耀石剥片、縄文後期土器片、10G—硬砂岩剥片、土師器片が各々出土している。

＜第Ⅱ調査区＞ 調査区内の中央部分約900㎡を対象とした。1.5×1.5mのグリットを12ヶ所設定し掘り下げた。現況は休耕畑であり牧草が作られている（第5図参照）。2・3・6・7・10・11Gの基盤は浅く、1—5—9G、4—8—12Gは深くなり、さらに東から西へかけて約10%の傾斜を持つ。耕作土は15～30cmで、小礫を含む。基盤は砂礫を含むローム層で、これより上層は崩落浸蝕を受けたと考えられる。8Gでは暗茶褐色土の落ち込みを確認する。1・2—4G—縄文後期土器片、黒耀石剥片、3G—縄文後期土器片、土師器片、5G—青磁片、6G—後期土器片、凹み石、7G—後期土器片多量、8G—石錘、9G—後期土器底部、打製石斧、10G—硬砂岩剥片、11G—土製石錘、12G—石棒破壊片が各々出土している。

＜第Ⅲ調査区＞ 調査区内の南西部分約800㎡を対象とした。1.5×1.5mのグリットを12ヶ所掘り下げた。現況は休耕田で、牧草が作られている。1・2Gは開田時に基盤が破壊され、3・4Gは表土が残い。8・12Gは表土下20～30cmで礫層となり、5～7Gは50～90cmと表土～基盤までノーマルに堆積し、9～11Gは40cm前後である。1G—黒耀石剥片、2G—雲母片岩、3G—近世陶器、4G—中・近世陶器、8G—黒耀石小塊が各々出土している。

＜第Ⅳ調査区＞ 調査区内の東部分約380㎡を対象とした。現在は、休耕田で、1.5×1.5mのグリット6ヶ所を掘り下げた。基盤は礫層で平坦。各グリットから縄文後期土器片、黒耀石剥片が10数点出土。

（小原晃一）



第Ⅰ調査区



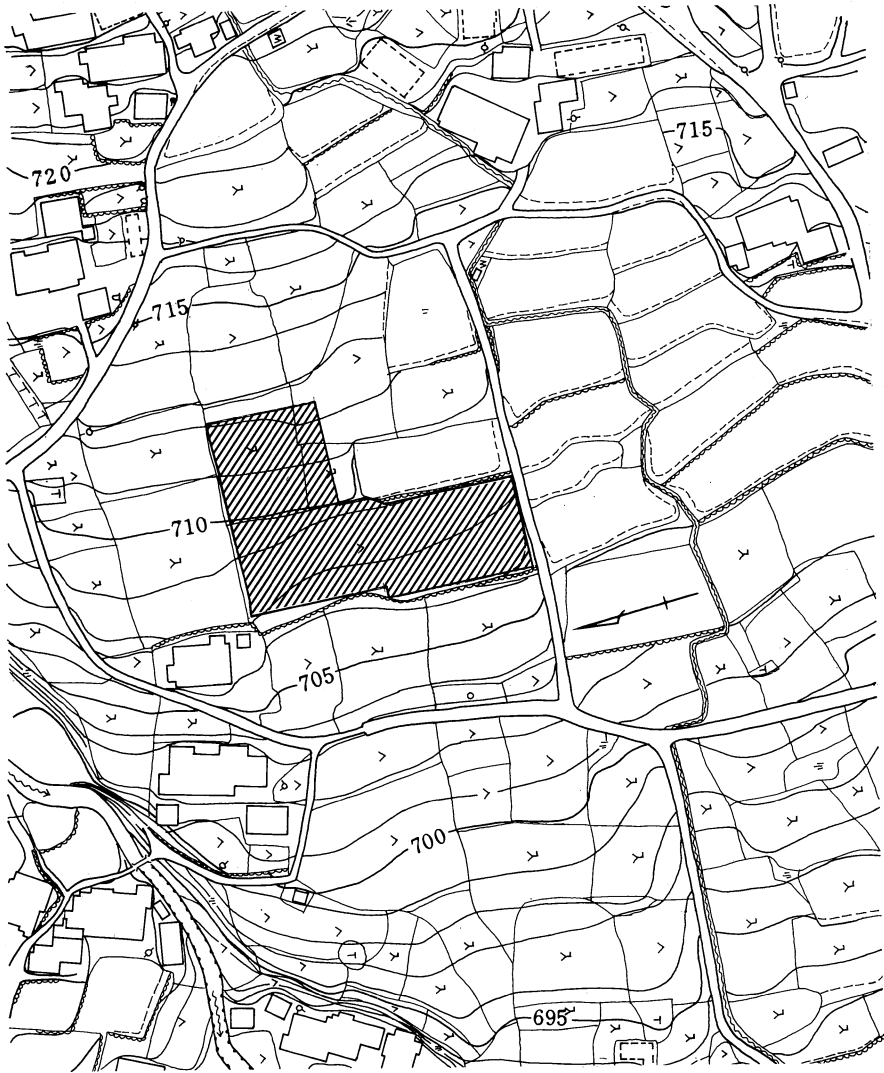
第Ⅱ調査区



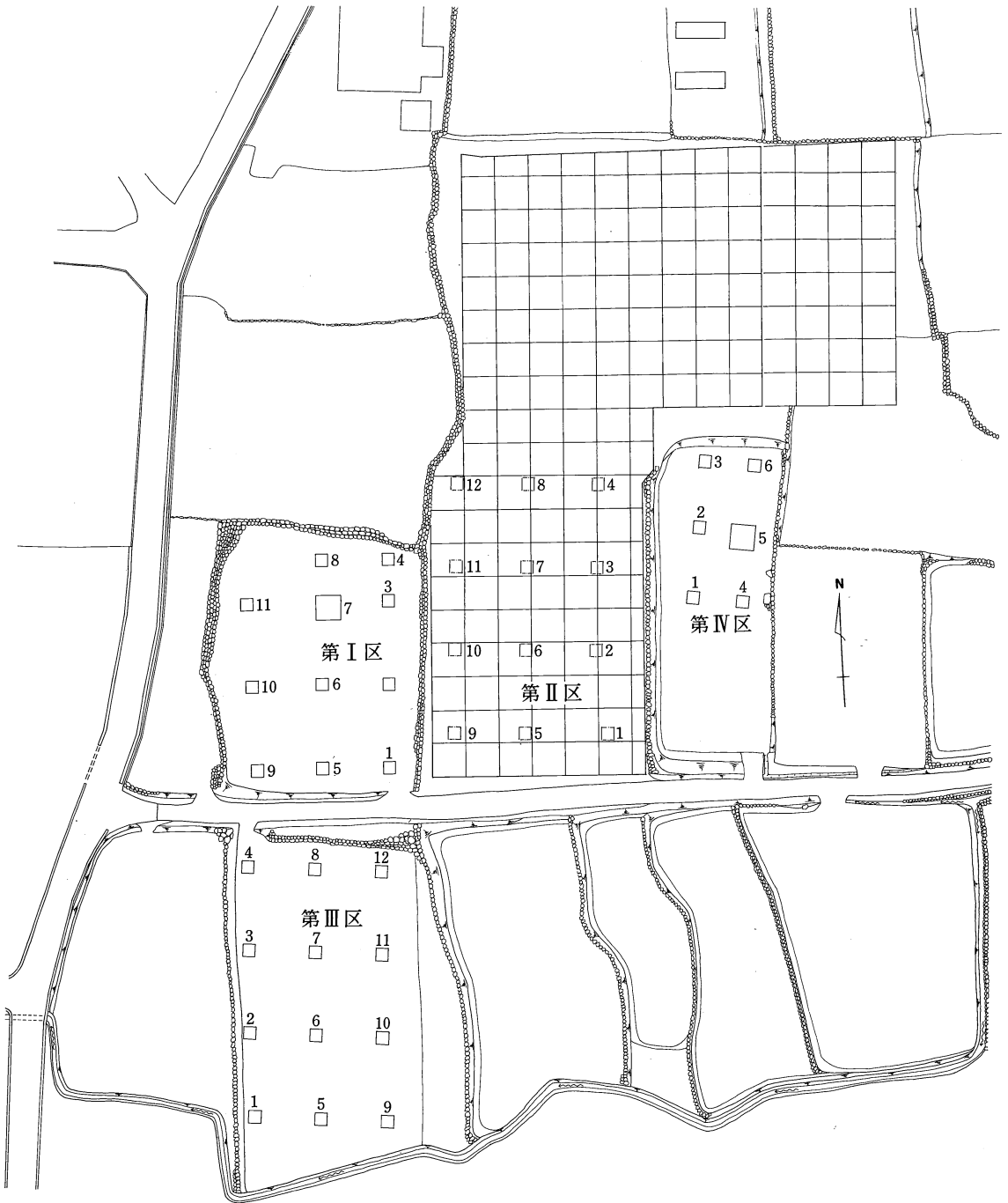
第Ⅲ調査区



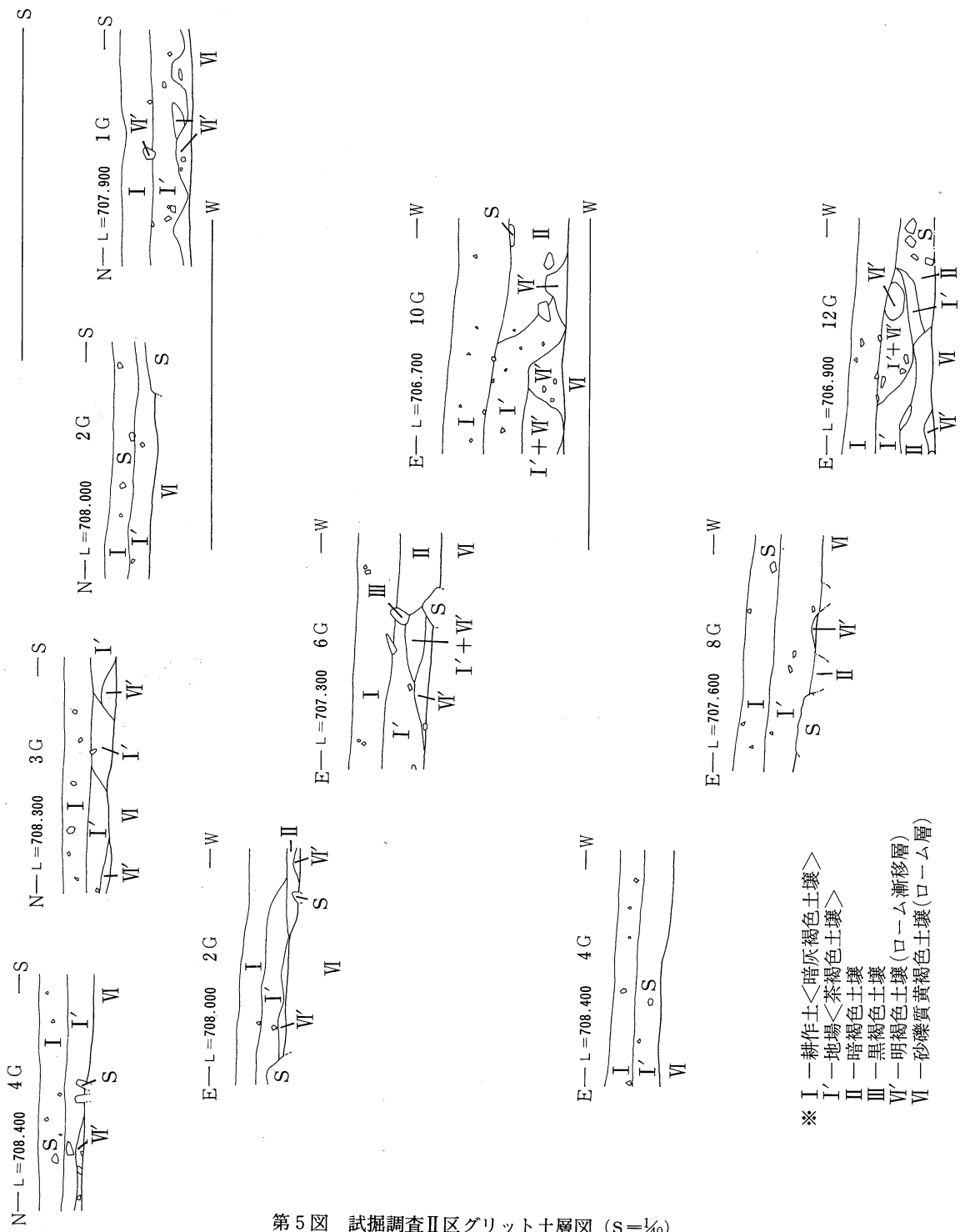
第Ⅳ調査区



第3図 青木北遺跡地形図 (S=1/2,000)



第4図 青木北遺跡調査範囲図 (S=1/800)



第5図 試掘調査Ⅱ区グリット土層図 (S=1/40)

1G-S~N



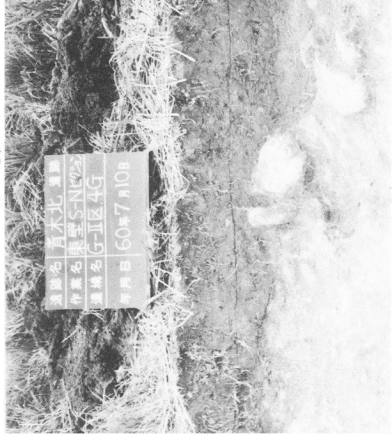
2G-S~N



3G-S~N



4G-S~N



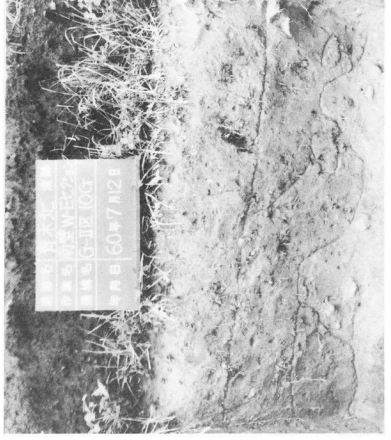
2G-W~E



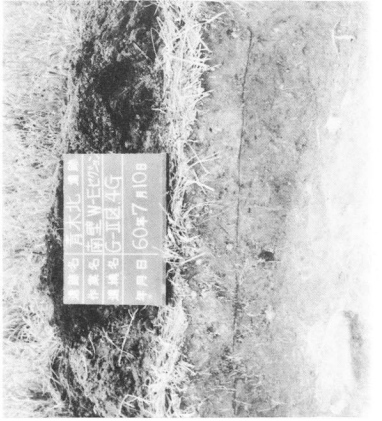
6G-W~E



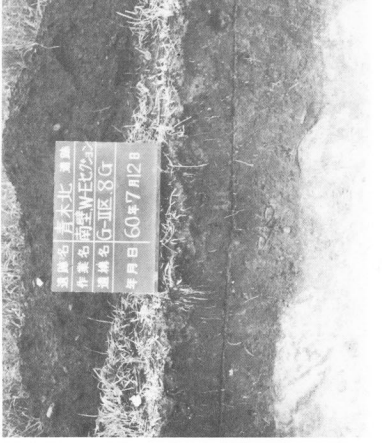
10G-W~E



4G-W~E



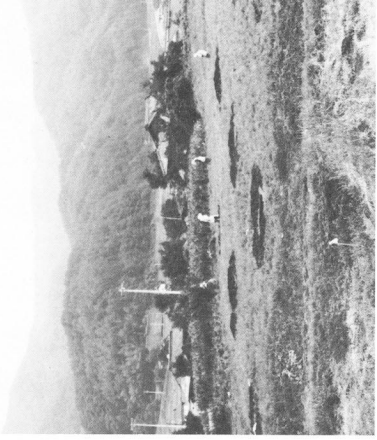
8G-W~E



12G-W~E



第Ⅱ調査区グリット (南より)



●発掘調査報告（第6・7・27図参照）

5日間に及ぶ試掘調査一第Ⅰ～Ⅳ調査区一の結果、土層が比較的ノーマルで、現在の地形から判断して攪乱が基盤まで及ばず、出土遺物が磨耗せず割合多い第Ⅱ調査区を面的に拡張して発掘調査を行うこととなった。

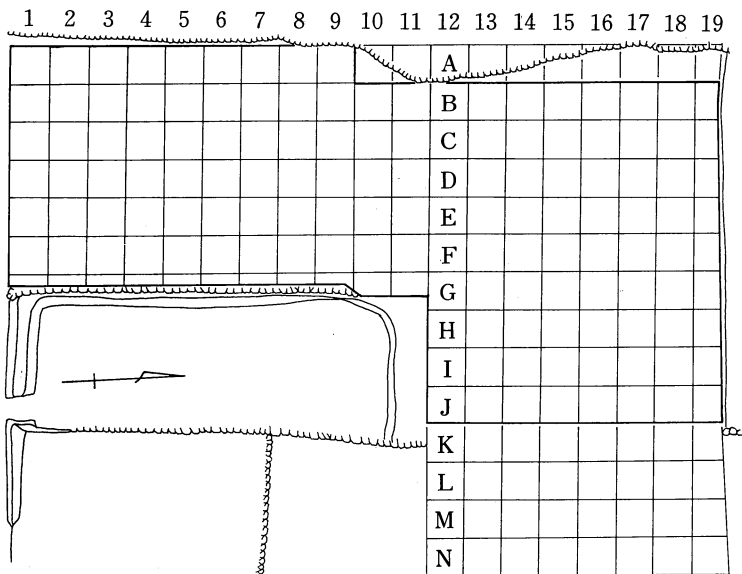
第Ⅱ調査区でのグリッドからの遺物の出土状態は、表土下層から砂礫を含むローム層（以下、砂礫質黄褐色土と称す）直上より検出され、さらには、南から北にかけて、基盤が波状をなすと判断されたが、調査の手順と時間的な制約等から、表土を20～40cmにわたって重機（ブルドーザー）により排土してから手作業に移行した。

第Ⅱ調査区は、北西に隅をもつ「ㄇ」状をなし、南北約75m、東西25～52mで、調査面積は、約2760㎡である。調査区南西隅を基点として、4×4mグリッドを東西軸にA・B・C～Nまで、南北軸に1・2・3～19まで設定した。1～12-A～Gを南部分、13～19-B～Nを北部分とした。

出土遺物は、ブルドーザー排土後の残土排除中のものは、グリッド一括とし、それより下層のものは、全点ドットを行い平板測量・レベル実測を行い取り上げた。ドット数は約5200点である。

写真撮影は、全景、調査風景、遺構、ベルトの断面、出土遺物・遺構について実施した。

発掘調査の結果、「南部分」では、1・2-B～Gグリッド内から孤状を描く配石址10ヶ所と土壙3基、5・6-D・Gグリッド内からやや大型の配石址12号をはさんで南に配石址11号、北に土壙4号が検出された。さらに、7・8-Dグリッドを中心として東西軸約4m、南北軸約8mの長楕円形をした弥生時代中期末から後期にかけての半竪穴式住居跡1軒が検出され、11・12-B～Dグリッドにかけて、小砂利で充満した溝址と、配石址13号が検出された。12-Bグリッドには焼土址も検出された。

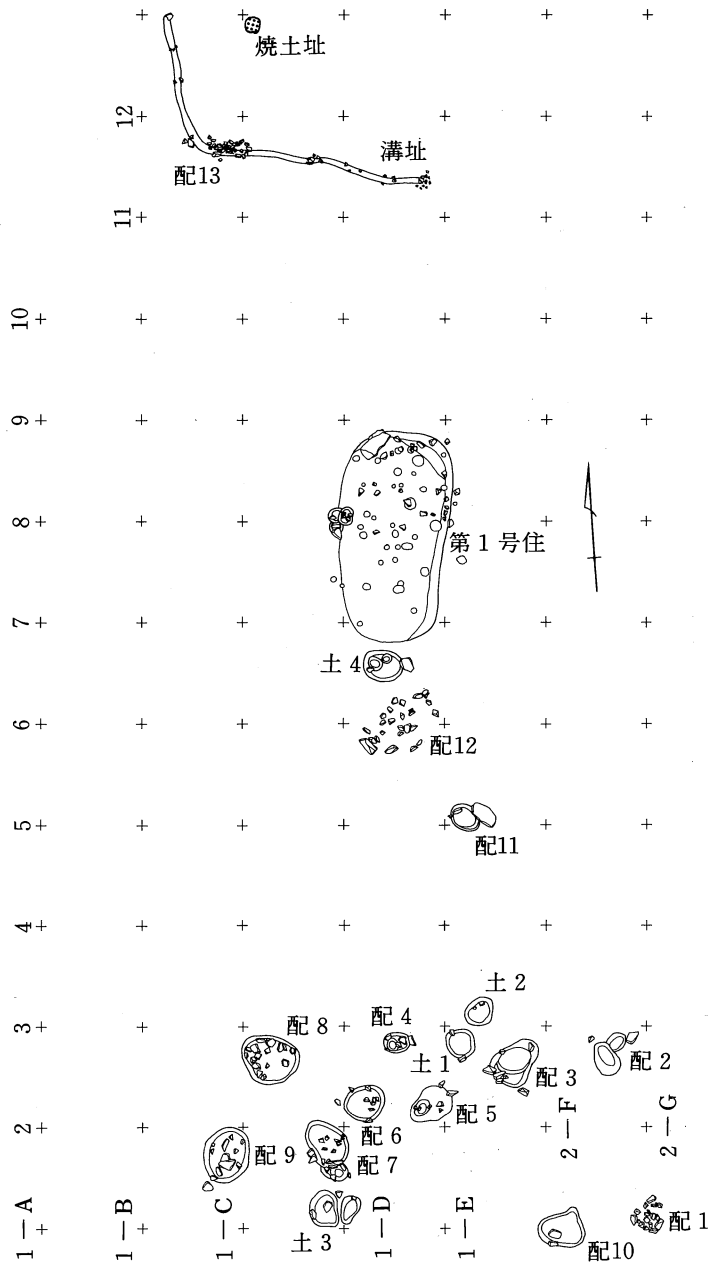


第6図 第Ⅱ調査区グリッド設定図

また、「北部分」では、17～19-B～Gグリッドにかけて、環状配石址群（配石址18～50号）が検出され、その外帯として14・15-B～Gグリッドにかけて同心円状に柱穴群と土壙群が検出されセットとして把握できる様想を示していた。

出土遺物により「南部分」・「北部分」の配石址、環状配石址群、柱穴群、土壙群は、縄文時代後期に属するものである。

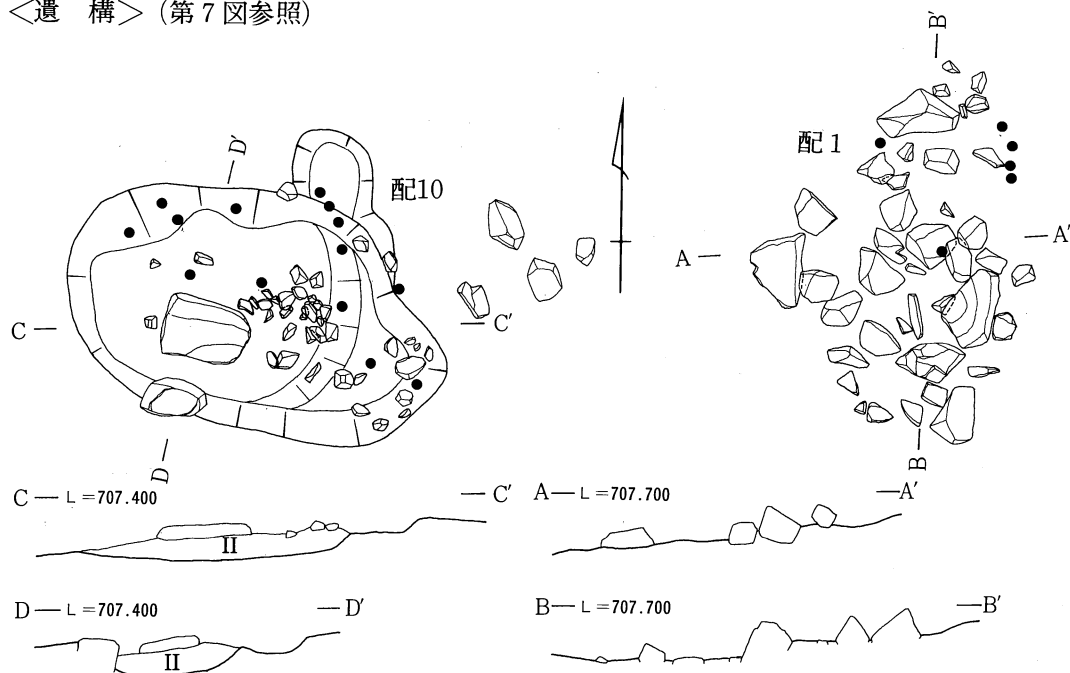
（小原晃一）



第7图 调查第II区南部分遺構分布图 (S=1/300)

第2節 第Ⅱ調査区南部分遺構と遺物

〈遺構〉(第7図参照)



第9図 配石址1・10号実測図 (S=1/40)

配石址1号 1-F・Gより検出され、長軸2m、短軸1.5mの楕円形状にやや角がとれた20~45cmの礫を砂礫黄褐色土中から直上にかけて配石している。
(註)3

礫は東伊那火山周辺の山塊に産出する堇青石帯の一部の縞状両雲母片麻岩であり、部分的には礫が重なり合っている。礫の中で、使用痕のあるものや火を受けたものはない。
(註)4

基盤は、東から西へやや傾斜するものの、南北軸ではやや凹みをもつ。

配石の様相は、比較的平面的で、やや大きめの礫を中心に小礫が取り囲む形態を示している。

出土遺物は、配石の北域に、基盤から直上にかけて縄文時代後期の土器片が出土している。

配石址10号 1-E・Fより検出され、長軸2m 5cm、短軸1m 25cmの不整楕円形に掘り込まれ、深さ10cm前後を測り、断面形は皿状をなす。掘り込みは、東壁寄りに8cm高い段をもち、さらに、北東壁に直径40cm、深さ8cm前後の小穴を伴う。

覆土は、Ⅱ層〈暗茶褐色土壌〉で埋まり、直上に長さ45cm、幅30cm、厚さ6cm前後の盤状の雲母片麻岩が配石されている。その他の礫は、覆土中に、10~15cmの小礫が多く、中央部より東壁にかけて集中している。配石址1号同様に、礫は、使用痕のあるものや火を受けたものはない。

基盤は、東から西へ、北から南へ傾斜し、周辺には地山である礫が少ない。

配石の様相は、浅い掘り込みに、盤状石と小礫のセットとしての形態を示している。

出土遺物は、配石の北域に、覆土上層から基底部直上にかけて縄文時代後期の土器・石器が出土。



1 調査第Ⅱ区南部分遺構全景（南より）

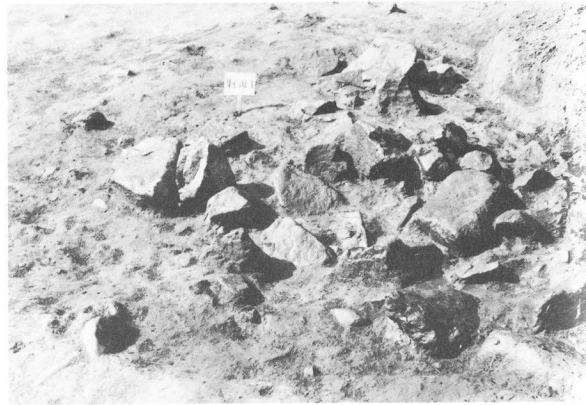
2 配石址10号（調査途中）



3 配石址10号（調査後）



4 配石址1号（調査前）



5 配石址1号（調査後）



1 配石址 3号 (調査途中)



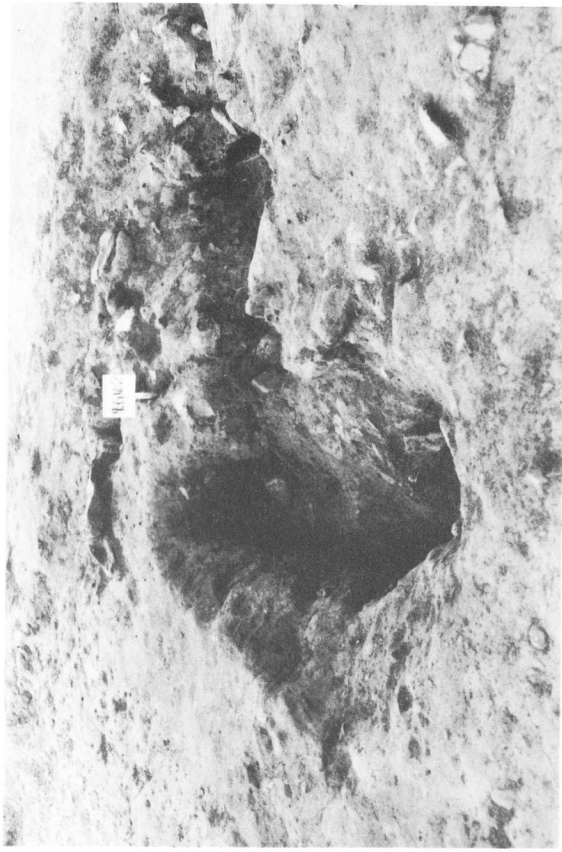
3 配石址 2号 (調査途中)

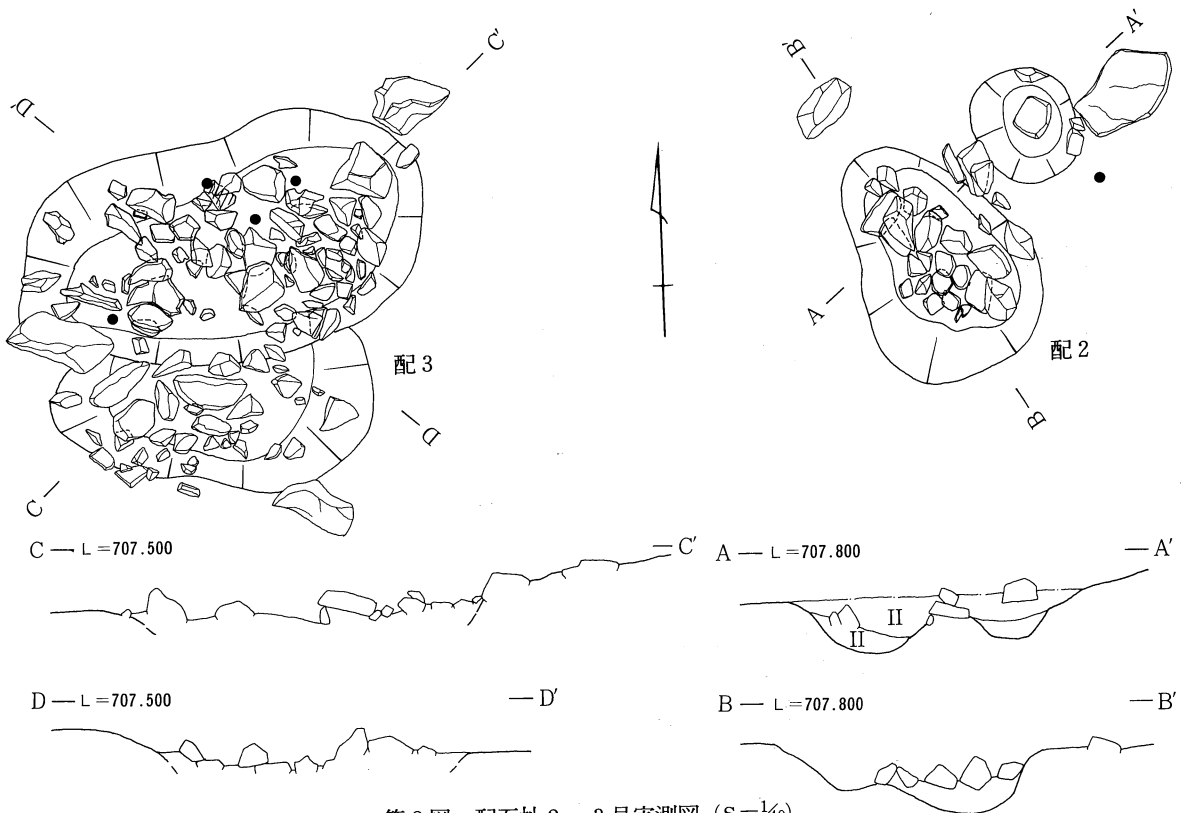


2 配石址 3号 (調査後)



4 配石址 2号 (調査後)





第8図 配石址2・3号実測図 (S=1/40)

配石址2号 2-Fより検出され、長軸1m 32cm、短軸85cm前後の不整楕円形に掘り込まれ、深さは30~35cmを測り、北側でやや浅い。断面形は、南壁寄りに段をもつ鍋状をなす。壁の掘り込みは、やや丸味をもち、東壁外に3段に重なった礫をはさんで17cm離れて、覆土直上に礫をもつ、50×60cmの不整円形(深さ22cm)のピットを伴う。

覆土は、II層で埋まり、直径15~25cmのやや角がとれた礫を3層に重ねて詰めている。礫は、雲母片麻岩が主で、使用痕や火を受けたものはない。なお、上部には小礫が覆っていた。

配石の様相は、土壌に礫を詰め込んだ形態で、北側と、ピットをはさんで東側に中・大礫がある。基盤は、東から西にやや傾斜し、南から北への傾斜がやや強い。

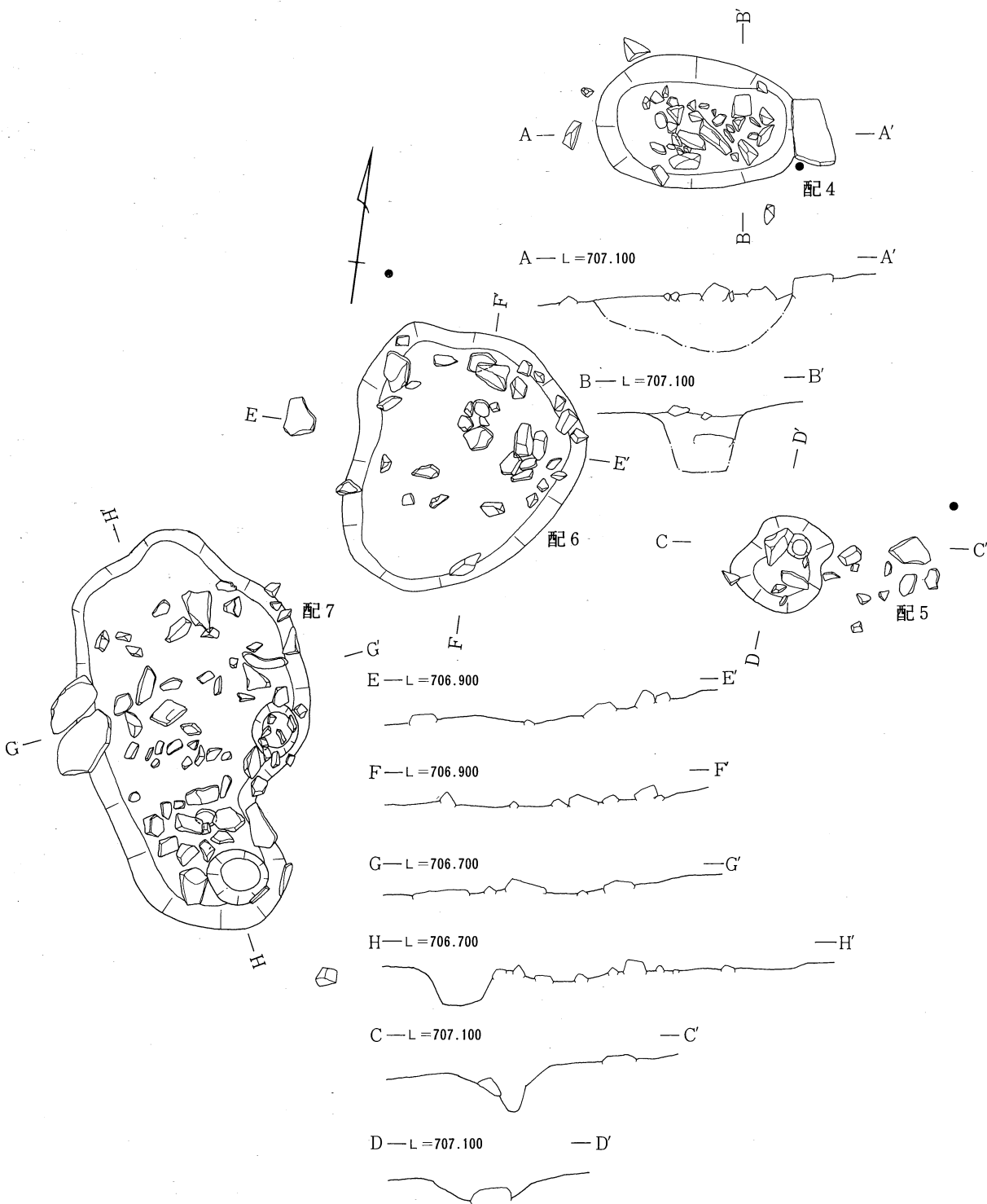
出土遺物は、基底部より黒曜石剥片1点と周辺より縄文後期土器片が出土している。

配石址3号 2-Eより検出され、長軸2m 10cm、短軸1m 20cmの不整楕円形で、深さは図示していないが、20~25cmを測る。断面形は凹凸をもつ舟底形である。礫は、10~30cmの角礫(人為的に割った礫)を2~3重に詰め込んでいる。礫質は雲母片麻岩が主であるが、中に花崗片麻岩と変輝緑岩(やや磨ってある)を含む。覆土はII層で埋まる。

南壁に接して長軸1m 66cm、短軸約85cm、深さ15cm前後で、不整円形をなす配石を伴う。

配石の様相は、浅い掘り込みに角礫を伴う形態を示している。

出土遺物は、覆土下層から基底部にかけて縄文後期土器片と硬砂岩剥片、磨り石が出土。



第10图 配石址 4 · 5 · 6 · 7 号实测图 (S=1/40)

1 配石址 6号 (調査前)



2 配石址 6号 (調査後)



3 配石址 7号 (調査途中)



4 配石址 7号 (調査後)



5 配石址 4号 (調査前)



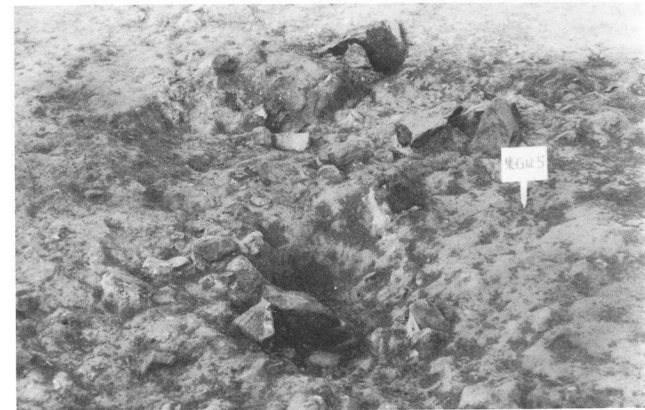
6 配石址 4号 (調査後)



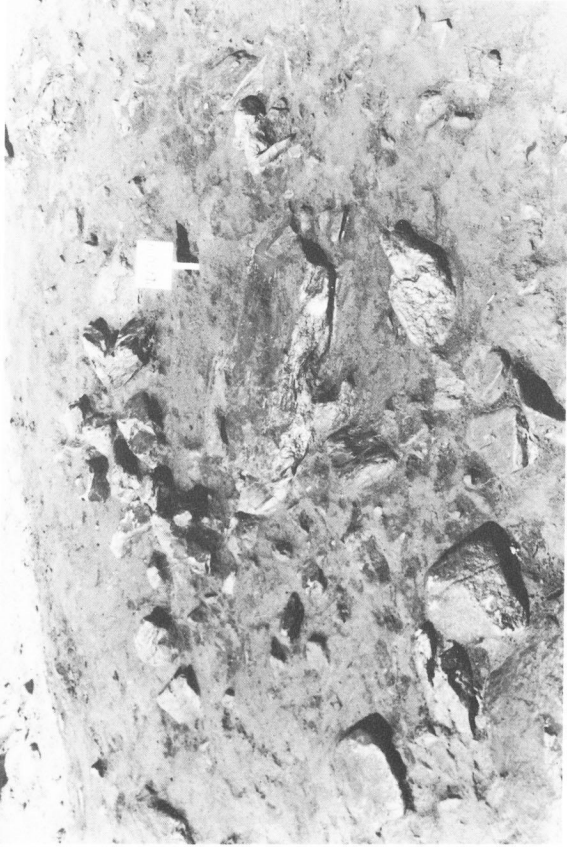
7 配石址 5号 (調査前)



8 配石址 5号 (調査後)



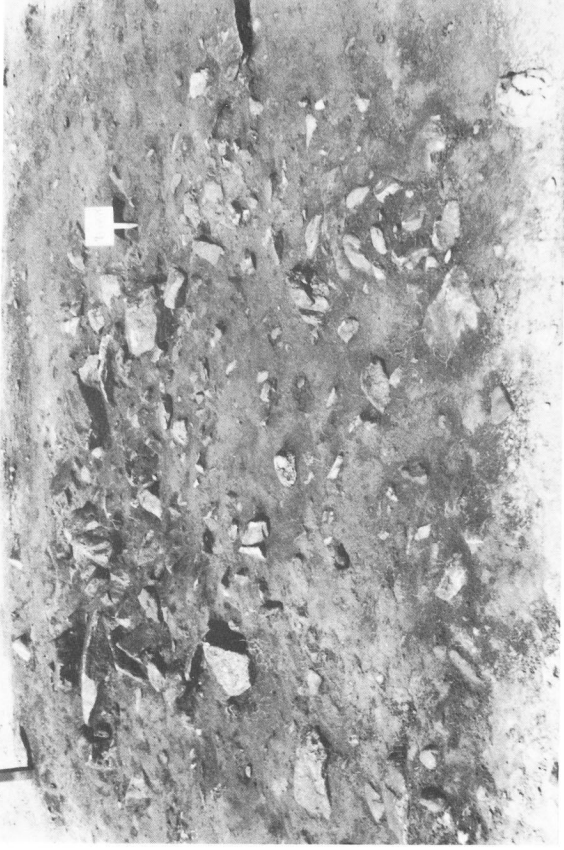
1 配石址 9号 (調査前)



2 配石址 9号 (調査後)

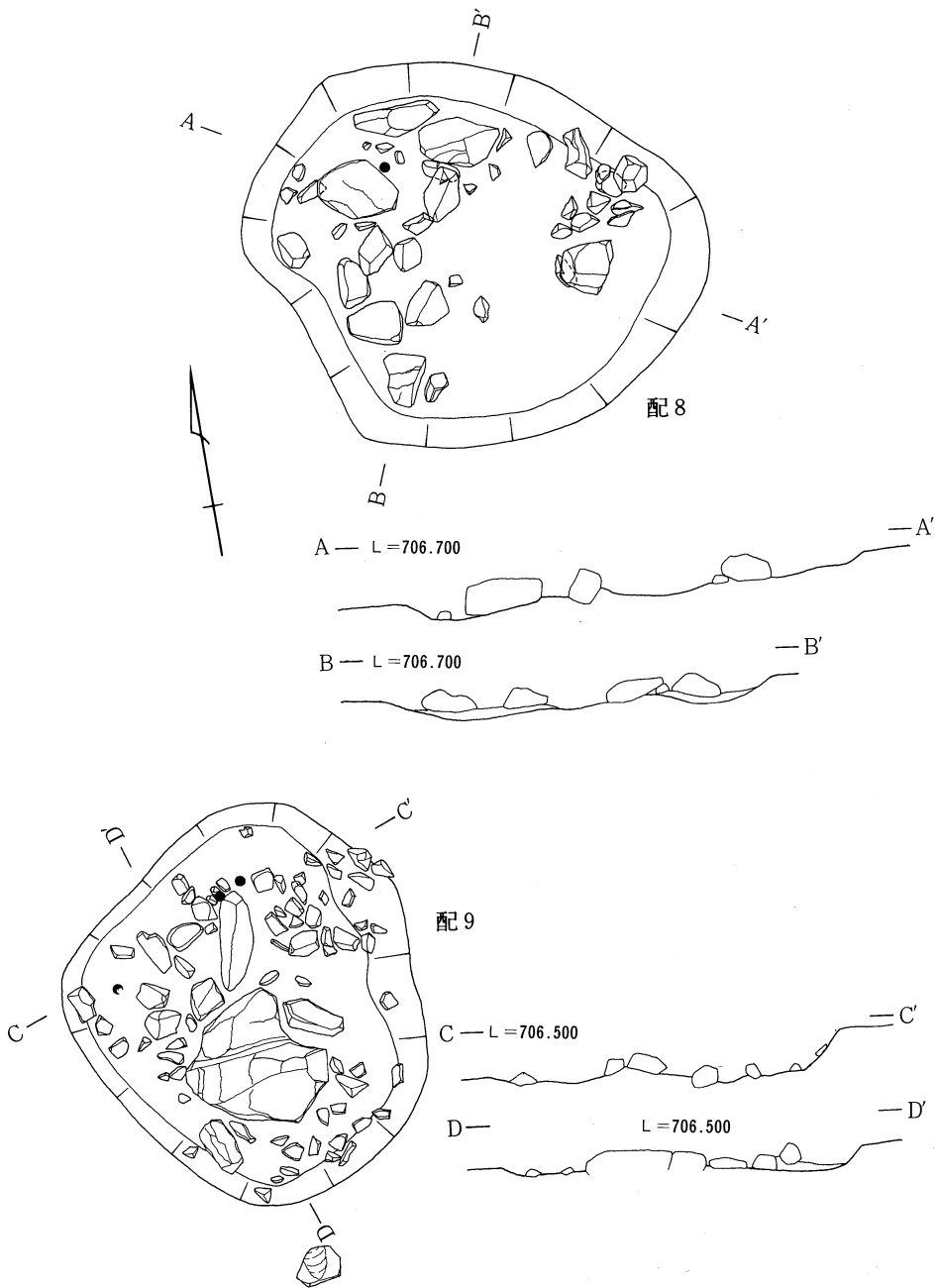


3 配石址 8号 (調査前)



4 配石址 8号 (調査後)





第11图 配石址8·9号实测图 (S=1/40)

配石址 4号 2-Dより検出され、長軸1 m 30cm、短軸85cmの楕円形に掘り込まれ、深さは22～40cmを測り、東側で深い。断面形は、西側に段をもつ鍋状をなす。壁の掘り込みは、丸味を帯びる。

覆土は、II層で埋まり、直径10～30cmのやや角がとれた礫が2層に重ねて詰めている。礫は、雲母片麻岩が主で、使用痕や火を受けたものはない。なお、上層には小礫が若干覆っていた。

配石の様相は、土壌に礫を詰め込んだ形態で、東壁に44×25cm、厚さ12cmの盤状の片麻岩を配している。

出土遺物は、配石址外周辺より縄文後期土器片、黒耀石片、トチの実状の炭化物（配石址6号との中間）が出土している。

配石址 5号 2-Dより検出され、長軸62cm、短軸55cmの不整円形に掘り込まれ、深さは14cmを測り、断面は、舟底形をなし、周辺は凹凸をもつ皿状にくぼんでいる。北東壁に直径15cm、深さ18cmの円形の小穴をもつ。

覆土は、II層で埋まり、直径20～30cmのやや角がとれた礫2個と小礫3個が遺存する。配石はさらに、東側に及び10cm前後の小礫と15～20cmの中・大礫が配されている。礫はいずれも雲母片麻岩であり、使用痕や火を受けたものはなく、基盤の礫も露頭しており、判別は困難であった。

配石の様相は、小穴を伴う小形の土壌及び周辺に礫を配した形態である。

出土遺物は、周辺より縄文後期土器片と黒耀石片が出土している。

配石址 6号 2-Dより検出され、長軸1 m 78cm、短軸1 m 52cmの不整円形で、5 cm前後の凹凸をもちやや凹んでいる。

覆土は、II層が若干堆積していたにすぎず、直径10～25cmのやや角のとれた礫が平面的に配されるが、一部で重なる礫もある。礫は、雲母片麻岩が主で、使用痕のあるものや火を受けたものはない。北東壁に礫は集中している。

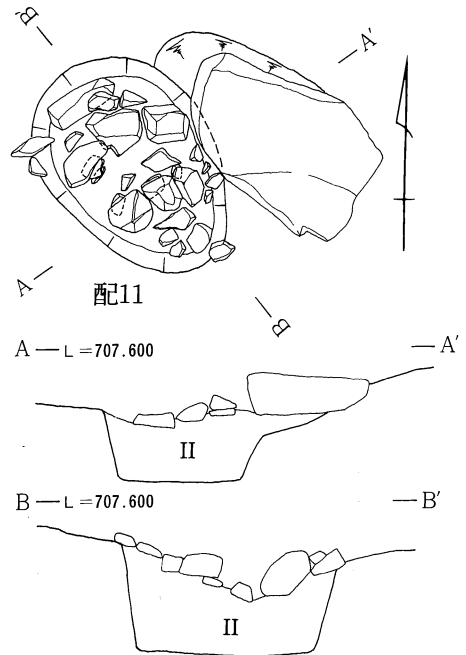
配石の様相は、比較的平面的で、小・中礫をまばらにやや円形状をなして配す形態である。

出土遺物は、周辺より縄文後期の土器片が若干出土している。

配石址 7号 1-C・Dより検出され、長軸2 m 60cm、短軸1 m 50cmの不整楕円形で、6 cm前後の凹凸をもち、やや凹んでいる。

覆土は、II層が若干堆積し、直径10～30cmの角張った礫を平面的に配すが、重なっている礫も一部で見られる。

礫は雲母片麻岩が主で、使用痕のあるものや



第12図 配石址11号実測図 (S=1/40)

火を受けたものはないが、基底部中心に、東西軸に沿って、直径10cm前後の小礫をほぼ1列に並べている。また、南壁寄りでは、20×10cmの中礫を中心にして、20cm前後の中礫を10個円形に配している。

南壁には、直径36cm、深さ25cmの円形の穴と、東壁には、34×30cm、深さ15cmの楕円形の穴を伴う。さらに、西壁には、48×28cm、38×20cmの盤状の長方形に近い片麻岩を2個配す。

配石の様相は、比較的平面的に小・中礫を配し、小穴を伴う形態である。

出土遺物はなく、北壁外より石錘が1点出土している。

配石址 8号 2-Cより検出され、長軸2m 48cm、短軸2m 6cmの不整形円で、やや角がとれた直径10～45cmの礫を北壁寄りに楕円形状に配している。礫は、花崗岩と雲母片麻岩が半々である。礫は使用痕のあるものや火を受けたものはない。礫は一部で2重となっている。覆土はⅡ層が堆積している。深さは10～12cmで凹凸をもち、断面形は皿状をなす。

配石の様相は、浅い掘り込みに大礫を比較的平面的に配す形態である。

出土遺物は、基底部より縄文後期の土器片が出土している。

配石址 9号 1-Bより検出され、長軸1m 96cm、短軸1m 84cmの不整形円で、角張った10～35cmの礫を、75×65cmの大礫を中心に配している。礫は、雲母片麻岩が主であるが、変輝緑岩・花崗片麻岩が若干含まれる。礫は使用痕のあるものや火を受けたものはない。大礫の北には、52×17cmの柱状の礫が遺存する。覆土は、Ⅱ層が堆積し、深さは東壁で22cmで、西壁で5cmである。

配石の様相は、東側に壁をもつ掘り込みに、大礫を中心として小・中礫を配す形態である。

出土遺物は、北西壁寄り基底部より硬砂岩片と黒耀石剥片が出土している。

配石址11号 5-Eより検出され、長軸1m 25cm、短軸88cmの楕円形で、やや角のとれた20～30cmの礫を深さ58cmの土壌の覆土上層から中層にかけて3重に詰め込んでいる。礫は雲母片麻岩が主で、使用痕のあるものや火を受けたものはない。掘り込みは急な傾きをもち、断面形は深めのトライ状をなす。北壁には40×15cmの枕状の礫が遺存し、東壁には1m 15cm×70cmの大礫が遺存する。

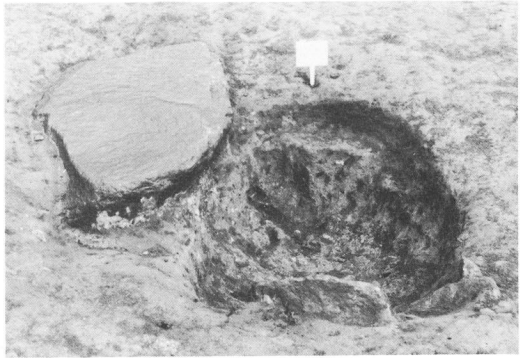
配石の様相は、土壌に礫を詰め込んだ形態で、枕状の礫と盤状の大礫を伴う。

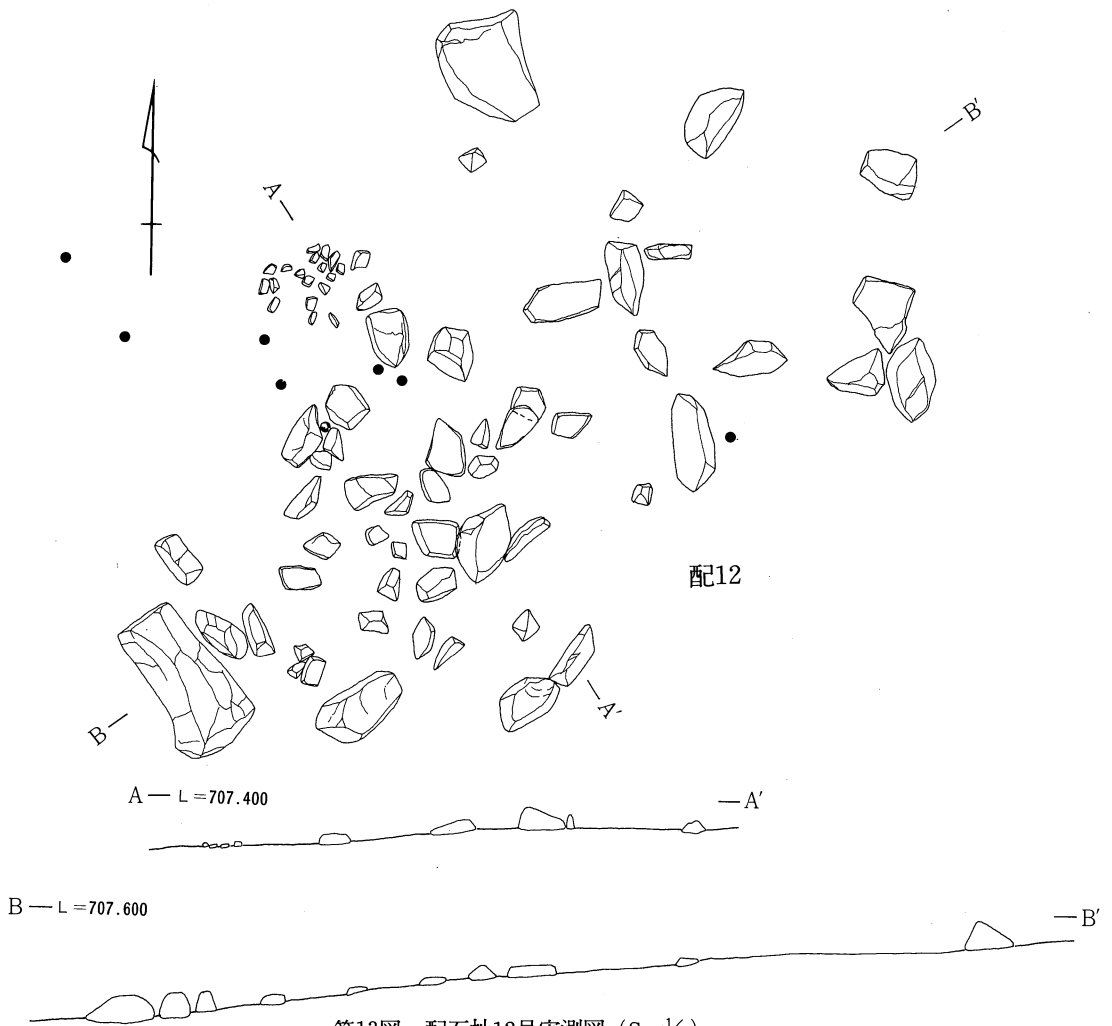
出土遺物は、周辺より縄文後期の土器片が出土している。

配石址11号（調査途中）



配石址12号（調査後）





第13図 配石址12号実測図 (S=1/40)

配石址12号 5・6-Dより検出され、長軸4m90cm、短軸3m20cmの範囲で、不整楕円形に15cm～60cmのやや角のとれた礫を砂礫黄褐色土直上に配している。

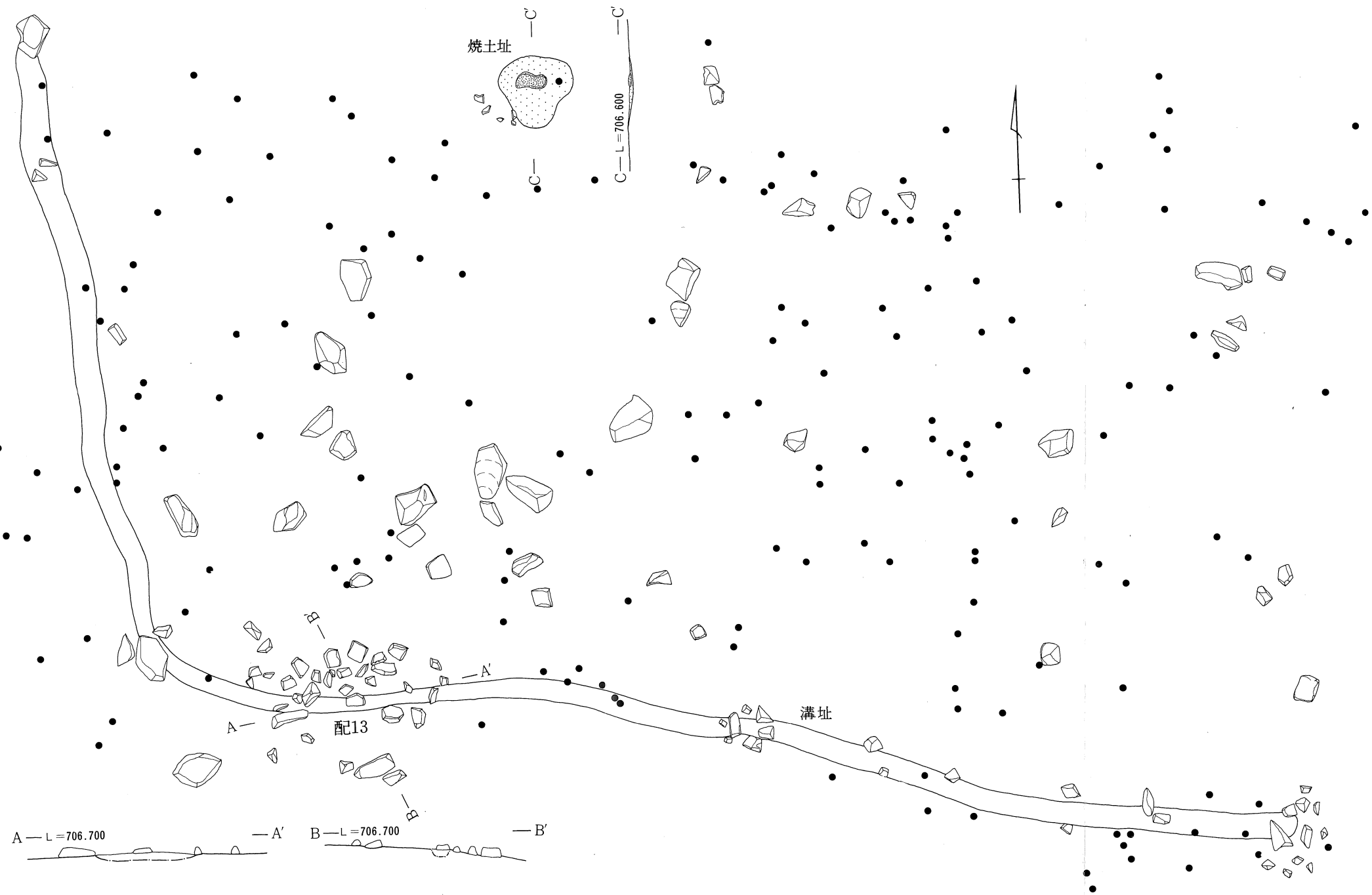
礫は、雲母片麻岩が主で、部分的には礫が重なっている。礫は使用痕のあるものや火を受けたものはない。

基盤は、東から西へかけてやや傾斜が強く、南北は割合傾斜が弱い。

配石は、3群から構成される。南西端の85×45cmの大礫に接して、20～35の中礫が直径2m20cmの円形状に配されるもの、北東域に40～50cmの中～大礫を直径2m10cmの円形状にまばらに配するもの、北西域に5～10cmの小礫を直径50cmの円形に配したもので構成される。

配石の様相は、以上のことから、大礫を伴う密度の濃い円形状の配石址、密度の薄い円形状の配石址、小礫を集中させた配石址のセット化としての形態を示している。

出土遺物は、小礫を配した周辺に集中し、縄文後期の土器片が出土している。



第14図 配石址13号及び溝址・焼土址実測図 (S=1/40)

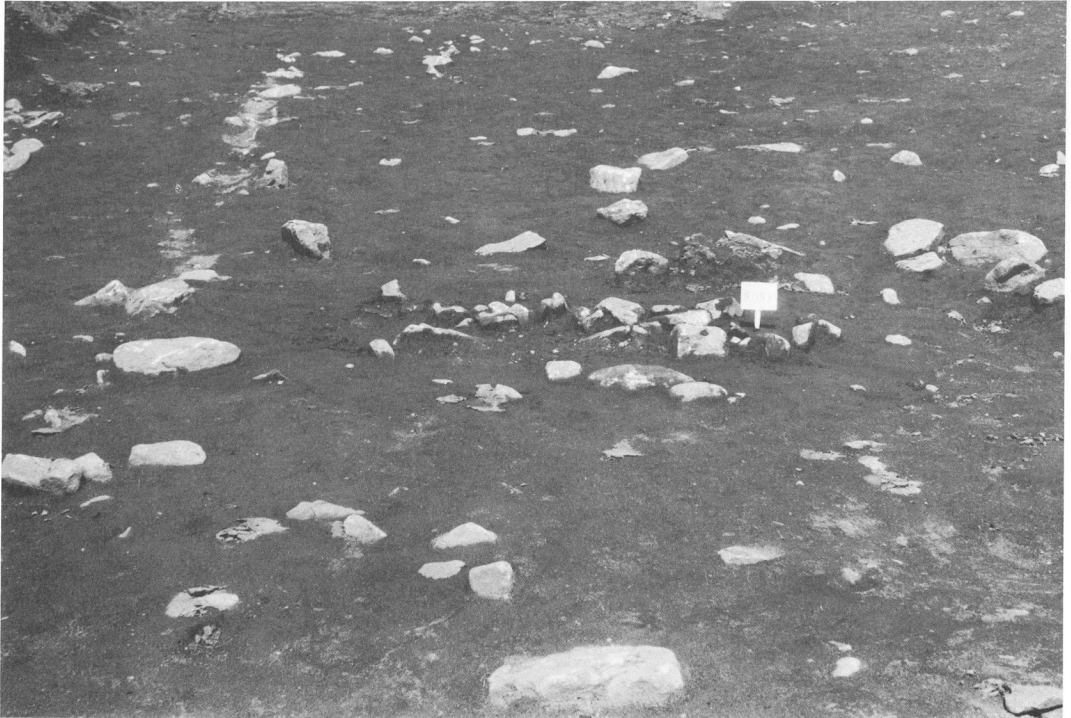


配石址12号 (南東より)

第Ⅱ調査区南部分(1~12-A~G)から、13基の配石址が検出されており、配石址1~10号については、円弧状(南側は道路に破壊されていた)を形成するものと考えられ、11・12・13号は単独の配石址として把握できる。次に一覧表を掲載し、配石址の比較を試みたい。

配石址一覧表

配石址	規模(m)	平面形	断面形	主軸方向	構造	特徴
1号	2×1.5	不整楕円形	—	N2°E	掘り込みなし。 砂礫黄褐色土直上。雲母片麻岩。	大礫を中心とする
2	1.32×0.85	不整楕円形	鍋状	N38°W	掘り込み30~35cm。 上層小礫堆積。雲母片麻岩。	ピット伴う
3	2.1×1.2	不整楕円形	舟底形	N82°E	掘り込み20~25cm。雲母片麻岩 が主。花崗片麻岩、変輝緑岩。	割り石、磨り石伴う
4	1.3×0.85	楕円形	鍋状	N85°E	掘り込み22~44cm。 上層小礫堆積。	盤状石伴う
5	0.62×0.55	不整円形	舟底形	N87°E	掘り込み14cm。 雲母片麻岩。	周辺配石伴う
6	1.78×1.52	不整円形	—	N9°E	掘り込みなし。 砂礫黄褐色土直上。雲母片麻岩。	北東側に礫集中
7	2.6×1.5	不整楕円形	—	N8°W	掘り込みなし。 砂礫黄褐色土直上。雲母片麻岩。	ピット2包含す
8	2.48×2.06	不整円形	皿状	N60°W	掘り込み10~12cm。 雲母片麻岩、花崗岩半々。	大礫多し
9	1.96×1.84	不整円形	皿状	N30°W	掘り込み5~22cm。雲母片麻岩 が主。花崗片麻岩、変輝緑岩。	盤状石中心
10	2.5×1.25	不整楕円形	皿状	N78°W	掘り込み10cm。 雲母片麻岩。	盤状石と小礫
11	1.25×0.88	楕円形	鍋状	N36°W	掘り込み58cm。 雲母片麻岩。	盤状石と枕状石
12	4.9×3.2	(不整楕円形)	—	N54°E	掘り込みなし。 砂礫黄褐色土直上。雲母片麻岩。	3群により構成
13	1.45×1.2	楕円形	—	N82°E	掘り込みなし。 黒褐色土中。雲母片麻岩	溝址上層



配石址13号及び溝址・焼土址(南より)

配石址13号 11-Bより検出され、溝址の上層に配石されている。長軸1 m 45cm、短軸1 m 20 cmの楕円形状に、割合角張った15~20cmの中礫をⅢ層(黒褐色土)中に平面的に配している。

礫は、雲母片麻岩が主で、使用痕のあるものや火を受けたものはない。

配石の様相は、黒褐色土中に礫を楕円形状に平面的に配する形態である。

出土遺物は、周辺より縄文時代後期の土器片や石器が出土している。

溝址 11-DからB、さらに12-Bにかけて「く」の字状をなして検出された。幅15~20cm、深さ8 cm前後で、全長約14mの規模である。溝の断面形は「V」字状をなし、砂利で充満していた。11-Dの始点には、8~22cmの小礫が集中し、12-Bの終点には、28×24cmの中礫が遺存していた。

基盤は、11-DからCにかけては、砂礫黄褐色土で、11-Bから12-Bにかけては黒褐色土であり、このことは傾斜地ゆえに、腐蝕土の流出堆積を示すものであろう。

出土遺物は、溝址上層及び周辺より縄文時代後期の土器片や石器が集中している。

焼土址 12-Cより検出され、直径60cmの不整円形に集中していた。中心部に、25×12cmの楕円形をなして特に焼土が集中し、3 cmの厚さであった。

南西側に、10cm前後の片麻岩が遺存し、若干火を受けた痕跡があった。

出土遺物は、覆土上層から縄文後期の土器・石器が多く出土し、本址からは、縄文後期の土器片が1点出土している。

(小原晃一)

土壙 1号 2-Eより検出され、1 m 6 cm×92cmの円形をなし、深さ8～12cmを測る。断面形は、凹凸のある皿状で、砂礫黄褐色土に掘り込まれ、プラン・床ともに挿図ほど整ってはいない。

土層は、VI'+I'層が主体である。

南壁に、35×20の雲母片麻岩の自然石が遺存していた。

出土遺物は検出されなかった。

土壙 2号 2-Fより検出され、土壙1号の北東40cmに位置する。約90cmの円形をなし深さ7～12cmを測る。断面形は、中央部が深くなる皿状であり、1号同様、プラン・床とも整っていない。

土層は、I'層-II'層が堆積している。

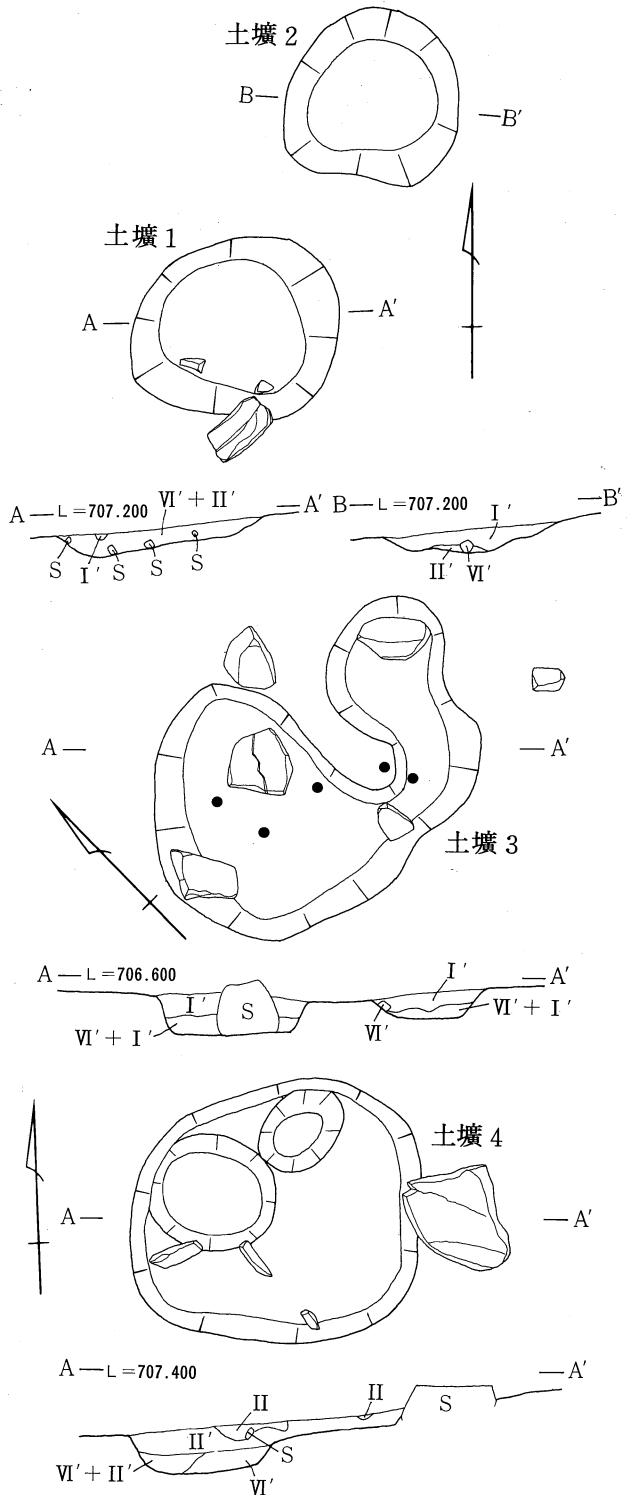
出土遺物は検出されなかった。

土壙 3号 1-C・Dより検出され、配石址7号の南50cm位置する。長軸1 m 90cm、短軸1 m 38cmの不整形をなすが、2基の土壙として把握する方が適切かと考えられる。30cm前後の大礫が土壙内に4個遺存している。断面形はタライ状で、砂礫黄褐色土に掘り込まれ、深さは14～20cmを測り、床は整ってはいない。

土層は、I'層・II'層-VI'+I'層と堆積している。

出土遺物は、覆土中層より縄文後期土器片と硬砂岩剥片等が出土している。

土壙 4号 6-Dより検出され、配石址12号の北西70cmに位置する。長軸1 m 50cm、短軸1 m 40cmの隅丸方形をなし、深さ10cmを測る。西壁に65×60cm、北壁に48×36cmの共に深さ10cmの小穴を伴う。東壁に盤状石が遺存。出土遺物は検出されなかった。(小原晃一)



第15図 土壙1・2・3・4号実測図 (S=1/40)

1 土壇1・2号 (手前左-1号、奥-2号)

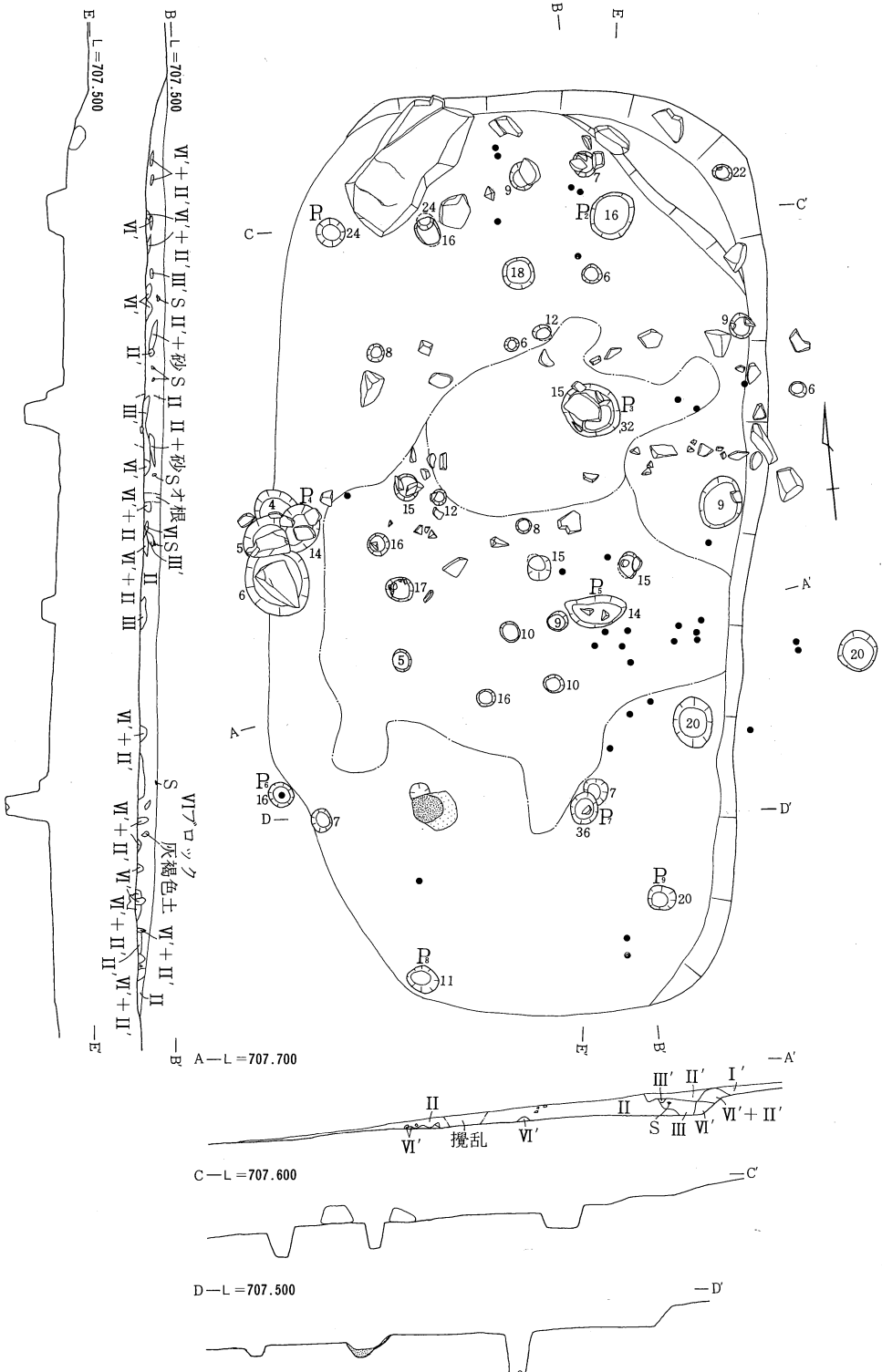


2 土壇3号 (西より)



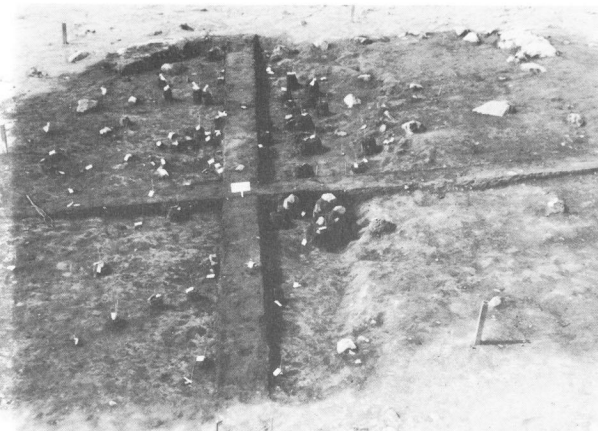
3 土壇4号 (南より)



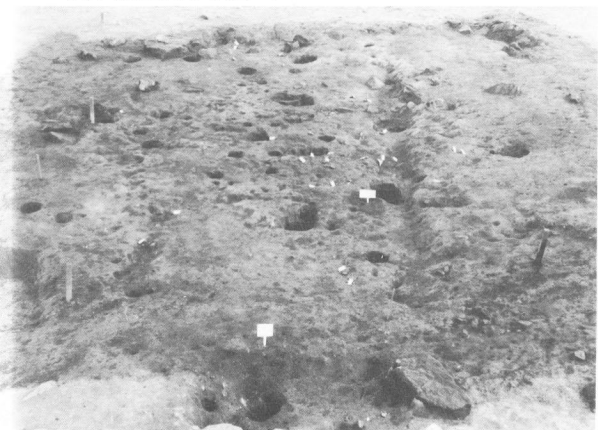


第16図 第1号住居跡実測図 (S=1/60)

1 第1号住居跡遺物出土状態 (南より)



2 同、調査終了状態 (南より)



3 同、出土遺物 (土器)



4 同、出土遺物 (石器)



第1号住居跡 第II調査区南部分の中央部7・8-Dより検出され、砂礫黄褐色土を掘り込んでいます。覆土は、II層が主で、II'層・III'層・IV'層が入り込み、耕作上での攪乱もある。

プランは、長軸7m 94cm、短軸4m 20cmで隅丸長方形をなす。掘り込みは、東壁で15~20cm、北壁で15cmを測り、南壁と西壁は壁がなく、^{(註)5}「半竪穴式住居」として位置付けられる。

柱穴は、P1~P9が想定され、直径25cmのものが多く、P2~5は40~50cmで、深さは11~36cmを測るが、20cm前後が平均である。

炉は、地床炉で床面南西部にあり、直径25cmのほぼ円形をなし、深さ12cmで6cmの厚土に焼土が遺存し、灰は東側に残っていた。

床面は、第17図中、--- (2点破線)内は凹凸の著しいタタキ床で、-.- (1点破線)内は、平らなタタキ床で、この周辺は、割合柔かく凹凸をなしている。自然の小礫が散乱している。

北壁西部には、1m 30cm×60cmの雲母片麻岩の大礫が遺存し、北東壁には、比高差8cmの段(ベット状遺構の小規模なものか)が設けられている。

なお、P10~16・17は、上屋の外壁を補定する柱穴として、P18~27は棚状の施設を設けた柱穴と想定できる。

(小原晃一)

〈遺構に伴う遺物〉

配石址 1号 本址の直上（Ⅰ層中）から出土した遺物は、縄文時代後期の深鉢形土器胴部無文部片7点で、胎土的に見て、堀之内系3点（内1点精製）、加曽利B系4点（内1点精製）ある。鉢ないし小型深鉢形土器胴部片は、2点（加曽利B系）で精製あり、内外面ともに良く磨かれ、1点は沈線を施す。

石器では、第23図9の黒耀石製のサイドスクレイパーが周辺（1-G）より出土している。

配石址 2号 本址の基底部（Ⅱ層）より黒耀石剥片が1点のみ出土している。覆土及び周辺からは、縄文後期の深鉢形土器胴部無文部片が1点出土している。石器では、周辺（2-G）より第22図11の黒耀石製の石鏃（剥片鏃）が出土している。

配石址 3号 本址の直上（Ⅱ層中）より変輝緑岩（一部磨ってあるか）と風化したホーンフェルス剥片と、土器細片が出土している。

配石址 4号 本址に伴う遺物は検出されず、周辺より縄文土器細片と、黒耀石剥片が2点出土している。

配石址 5号 本址の直上（Ⅱ層）より縄文後期深鉢形土器片（沈線を施す一堀之内系か）1点が、周辺より縄文後期深鉢形土器胴部無文部片（粗製）1点、黒耀石剥片1点が出土している。

配石址 6号 本址に伴う遺物は検出されず、周辺より黒雲母片岩の剥片のみが出土している。

配石址 7号 本址に伴う遺物は検出されず、周辺より縄文時代後期深鉢形土器胴部無文部片（粗製）2点と、本址北西壁外より、第25図8の硬砂岩製の石錘が出土している。

配石址 8号 本址の直上（Ⅱ層F）より縄文後期土器細片1点が、周辺より黒耀石剥片1点が出土している。

配石址 9号 本址の直上（Ⅱ層下）よりホーンフェルス剥片と黒耀石剥片2点が出土し、周辺より第24図12の緑泥片岩製の磨製石器、第25図16の硬砂岩製の切目石錘及び、チャート剥片が各々出土している。なお、覆土上層より第22図31の黒耀石製の「飛燕形」石鏃が出土している。

配石址10号 本址の直上（Ⅱ層中）より第20図1・2・17・24の縄文後期土器底部片（1・2は粗製の深鉢、17・14は精製の鉢か注口土器と思われる）と、第21図29の^{(註)6}土製円版（胴部無文部使用）、第24図6の硬砂岩製の刃部に顕著な使用痕のある打製石斧が出土している。この他では、^{(註)7}粗製深鉢形土器胴部片6点、^{(註)8}半精製深鉢形土器胴部片5点、^{(註)9}精製鉢形土器胴部片4点と、黒耀石剥片が出土している。周辺からは、第18図2の称名寺1式の深鉢形土器胴部片、第19図1の堀之内～加曽利B式にかけての鉢形土器口縁部片、同図15の加曽利B1式の深鉢形土器胴部片、21～23の加曽利B1式の浅鉢形土器胴部片、第20図8・14・15の縄文後期土器底部片（8は半精製の鉢か浅鉢、14は粗製の小型深鉢、15は精製の小型深鉢）が出土している。この他では、精製小型深鉢形土器胴部片7点（いずれも加曽利B式系か）と黒耀石剥片が出土している。

配石址11号 本址に伴う遺物は検出されず、周辺より明褐色で、ナデ調整後に棒状施文具で沈線区画文（渦巻状となるか）と棒頭刺突を施す深鉢形土器胴部片（堀之内2式か）と胴部無文部片が出土している。なお、第18図3の称名寺1式の深鉢形土器胴部片が北側から出土している。^{(註)10}

配石址12号 本址の直上(砂礫黄褐色土直上)より風化が著しい為、図示できなかつたが、器面に斜縄文を施し棒状施文具で沈線をつけ磨り消しを行う称名寺1式の深鉢形土器胴部片、器面に棒状施文具で間隔が1.2cmの巾広の斜条線を施す堀之内1～2式の深鉢形土器胴部片、深鉢形土器胴部無文部片が出土している。周辺からは、粗製深鉢形土器胴部片4点(内1点は斜縄文を施し、外は無文)が出土している。

配石址13号 本址に伴う遺物は検出されず、周辺(Ⅱ層下層)より縄文時後期と考えられる粗製深鉢形土器胴部無文部片7点(内1点は表面に煤附着)が出土している。磨耗が著しい。

溝址 本址に伴う遺物及び周辺から出土した遺物が多いが、無文土器片が多く図示できず、記述にとどめたい。沈線と棒状刺突により構成される鉢形土器片(堀之内1～2式か)、半精製深鉢形土器胴部無文部片10点、粗製深鉢形土器胴部無文部片7点が直上から出土し、周辺からは、精製深鉢形土器胴部無文片、半精製深鉢形土器胴部無文片3点₃が各々出土している。

土壌1・2号 両本址に伴う遺物は検出されず、周辺からわずかに、棒状施文具で渦巻文を施した鉢形土器胴部片(堀之内2式か)が1点出土している。

土壌3号 本址の直上(Ⅰ'層及びⅡ層)から出土した遺物は、第20図27の縄文後期半精製鉢形土器底部片1点、第24図16の硬砂岩製の敲打器(側面磨っている)が出土している。その他では、半精製小型深鉢形土器胴部無文部片、硬砂岩剝片、タッチのある^{(註)11}「鳴滝岩」に近似した岩石の剝片が出土している。

土壌4号 本址に伴う遺物は検出されず、周辺から、小片であるが、斜縄文を地文とし、棒状施文具で孤状に区画し、粗雑に磨り消しを行う精製小型深鉢土器片(加曾利B2式か)1点と、半精製深鉢形土器胴部無文部片2点、粗製深鉢形土器胴部片1点が出土している。

焼土址 本址の焼土上層より縄文後期粗製深鉢形土器胴部片1点₁が出土し、周辺からは同後期の土器片が多く出土している。

第1号住居跡 本跡の出土遺物の内、覆土(Ⅱ層)上層からは、第18図1の称名寺1式の精製深鉢形土器胴部片、第19図24の加曾利B2式に伴うと考えられる半精製浅鉢形土器口縁部片、同図38・40の斜条線を施した半精製深鉢形土器胴部片(38は関西系か)、第21図9の注口土器注口部破片、同図22の精製鉢形土器(注口土器の可能性もあるが器壁が1cmと厚い)胴部片が出土している。石器では、第22図1の黒耀石製の鋏形鏃、同図25の三角鏃(黒耀石製)、第22図21・23のピエス・エスキュー(ともに黒耀石製)、第25図12の硬砂岩製の石錘が出土している。これらは、住居跡床直上から出土した下記の遺物と時代が異なり、流れ込みの可能性が高い。

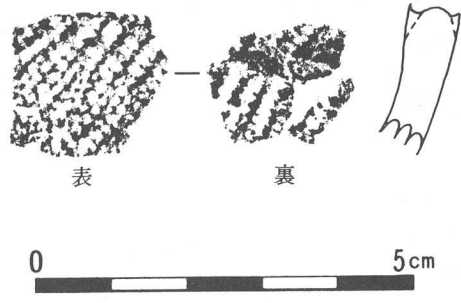
本跡の床直上から出土した遺物は、第27図1・5・6・7・8・10・12・14・16・18・20～23である。1・6は、口唇部に櫛状施文具で浅い刺突をもち、口縁部下に波状文と短条線文を施す「深鉢」形土器で、5は1と同型で、7・8は6と同型である。同図2～3は北方の地点から出土し、1と同型、9は鋸歯文をもつ壺形土器口唇部、11は6と同型であろう。12・13は類例が少ない。14は底部で、櫛描文を施す伊那谷における弥生時代中期末「北原→恒川式」～後期前葉「座光寺原式」に比定される。石器では15・16・18の石包丁、20～22は磨製石鏃、23は有肩扇状打石器である。

〈遺構外出土主要遺物〉

第Ⅰ群土器 (第17図)

縄文時代早期に属するものであろう。

器面の表裏に縄文を施す。第17図に掲載したも器片1点のみである。施文はLRの斜縄文を施している。色調は淡褐色で、胎土は1mm以下のこまかい砂粒と極少量の繊維を含む。内面は凹凸をもち、上端は接合部である。



第17図 第Ⅰ群Ⅰ類土器 (S=Ⅺ)

第Ⅱ・Ⅲ群土器

第Ⅱ群は縄文時代前期、第Ⅲ群は縄文時代中期の土器である。本群は第Ⅱ調査区南部分では検出されず、同区北部分で検出されているので、別の章で記述する。

第Ⅳ群土器 (第18～21図)

縄文時代後期に属するものである。以下の様に、時期により類、器形により種と分類する。

- 第1類—称名寺式
- 第2類—堀之内1式
- 第3類—堀之内2式
- 第4類—加曾利B 1式
- 第5類—加曾利B 2式
- 第6類—無文土器
- 第7類—関西系・北陸系の土器の影響を受けるもの

器形はA種—深鉢形土器、B種—鉢形土器、C種—浅鉢形土器、D種—壺形土器、E種—注口土器に分け、有施文—無施文、精製—半精製—粗製については文章及び表記述とする。

なお、出土地点、色調、胎土、焼成等については表記する。

第1類A種 (第18図1～7)

深鉢形土器の一部位で、地文に斜縄文を施し、棒状施文具で曲線・直線による「J字状文」や「三角状文」の区画をし、磨消縄文として文様を構成するものである。

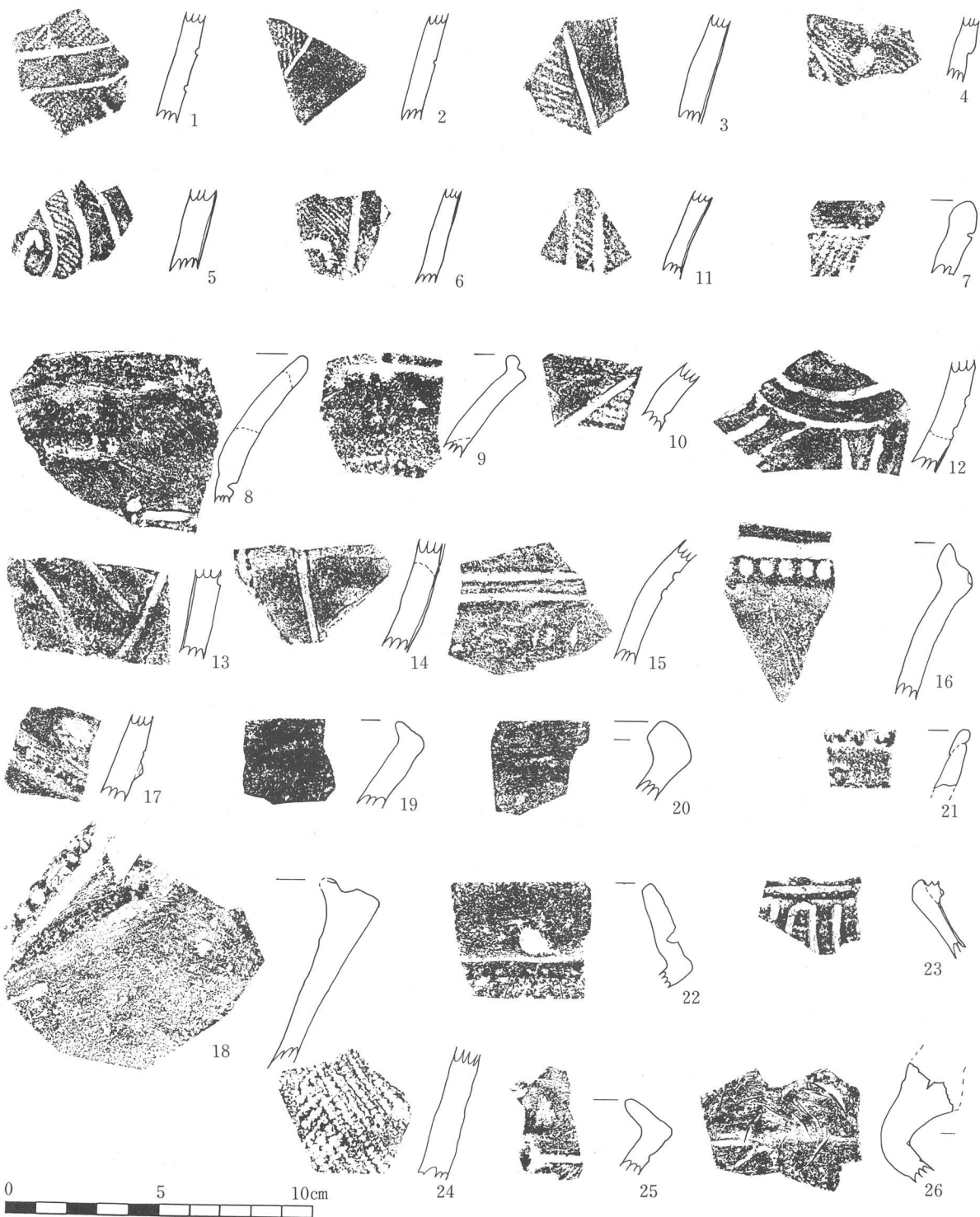
1はLR斜縄文に連続すると考えられる孤状の磨消を行い、2～4はRL斜縄文に「三角状文」の磨消しを行う。4は棒頭で縦位に刺突する。5・6はLR斜縄文に「J字状文」の区画をする。7は口縁部にLR斜縄文を施し、横走沈線が口唇部に平行している。

第2類A種 (第18図8～16)

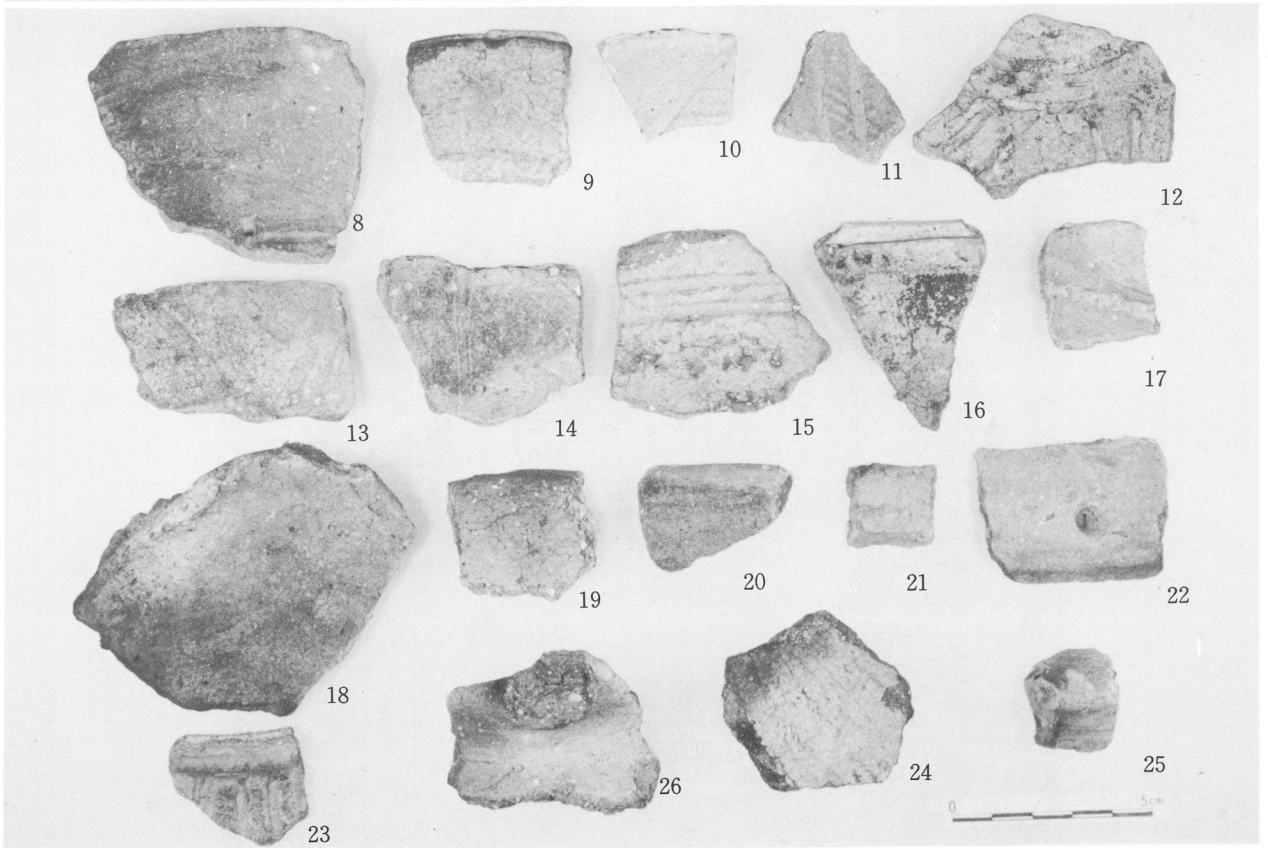
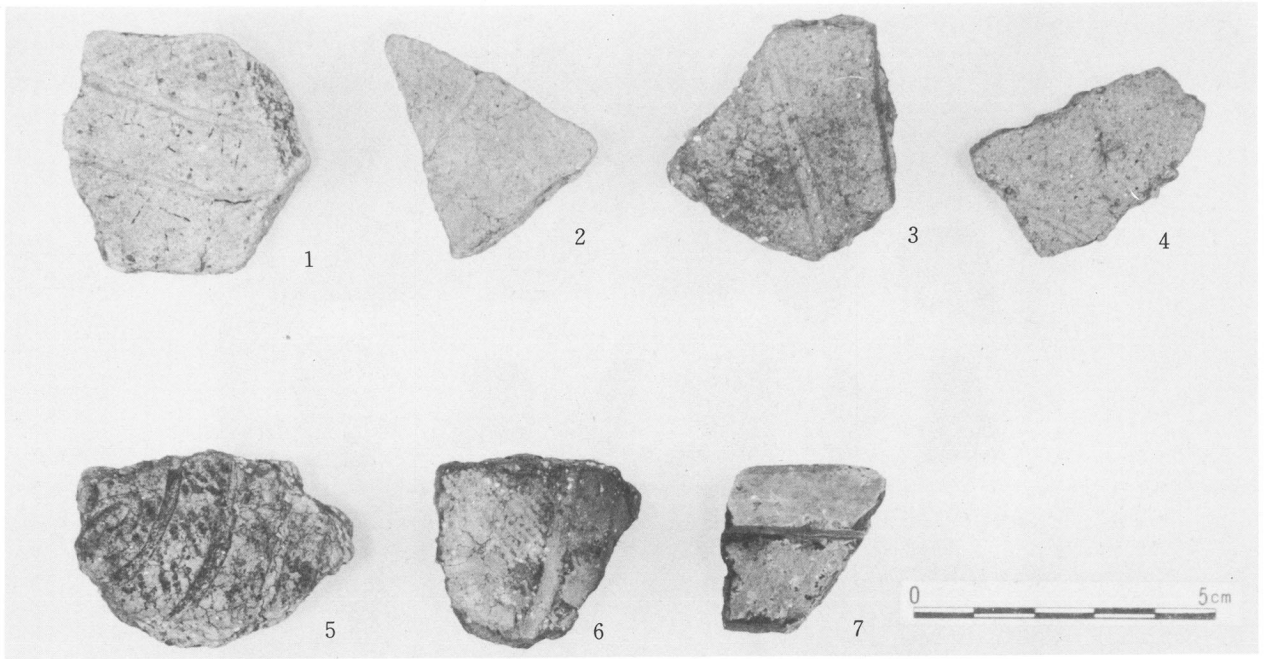
深鉢形土器の一部位で、地文に斜縄文を施し、棒状施文具で直線による「三角状文」の区画をし、磨消縄文として文様を構成するもの(10・11)、棒状施文具で横走沈線文、斜沈線文、渦巻文+斜沈線文を施すもの(8・9・12～15)、口縁部を肥厚させ、棒状施文具で押圧列点文を施すもの(16)がある。

第3類A種 (第18図17・18・21)

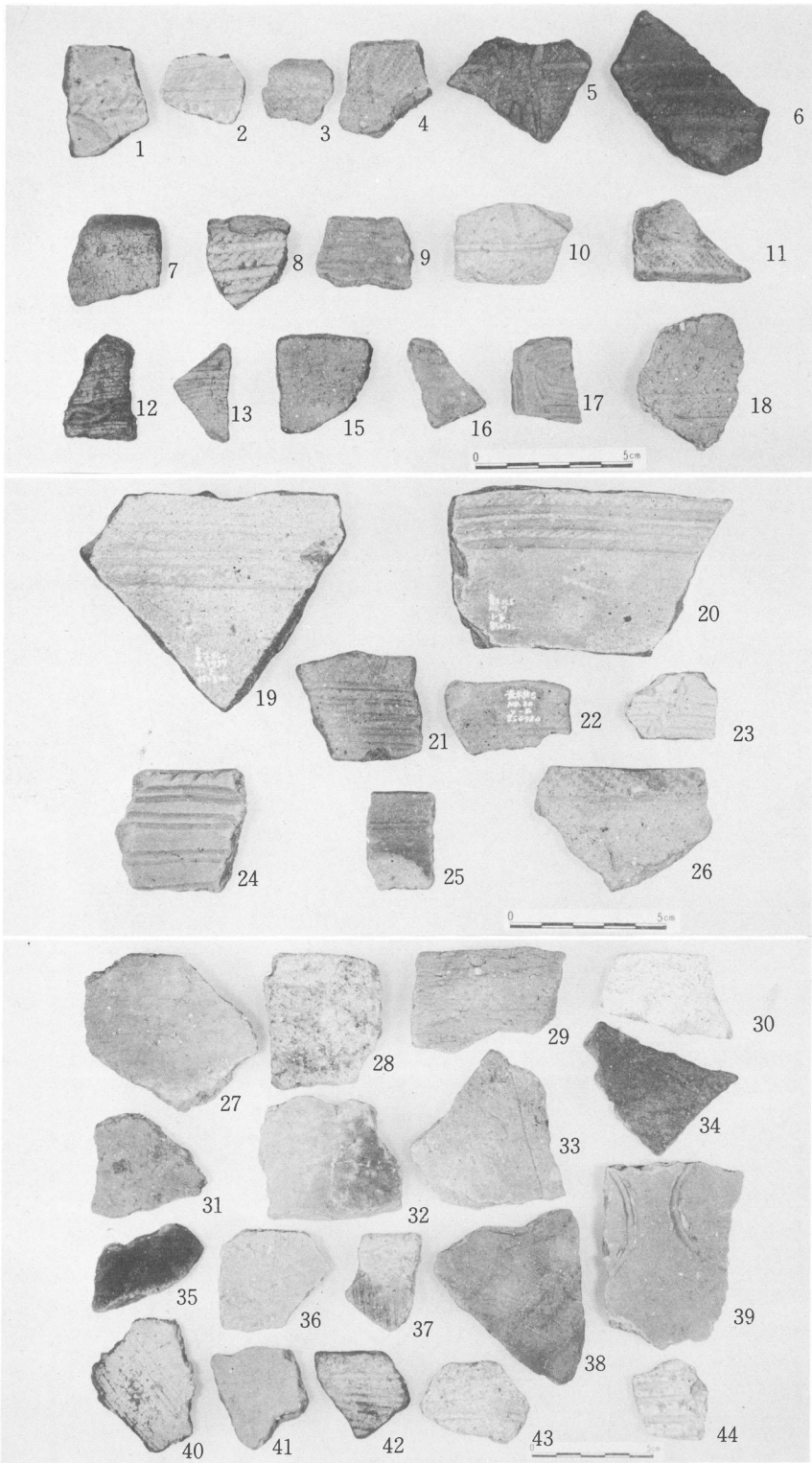
山形口縁をもち二重口縁化し、刻み目を施すもの(17)と斜めの凸帯文に刻み目を施すもの



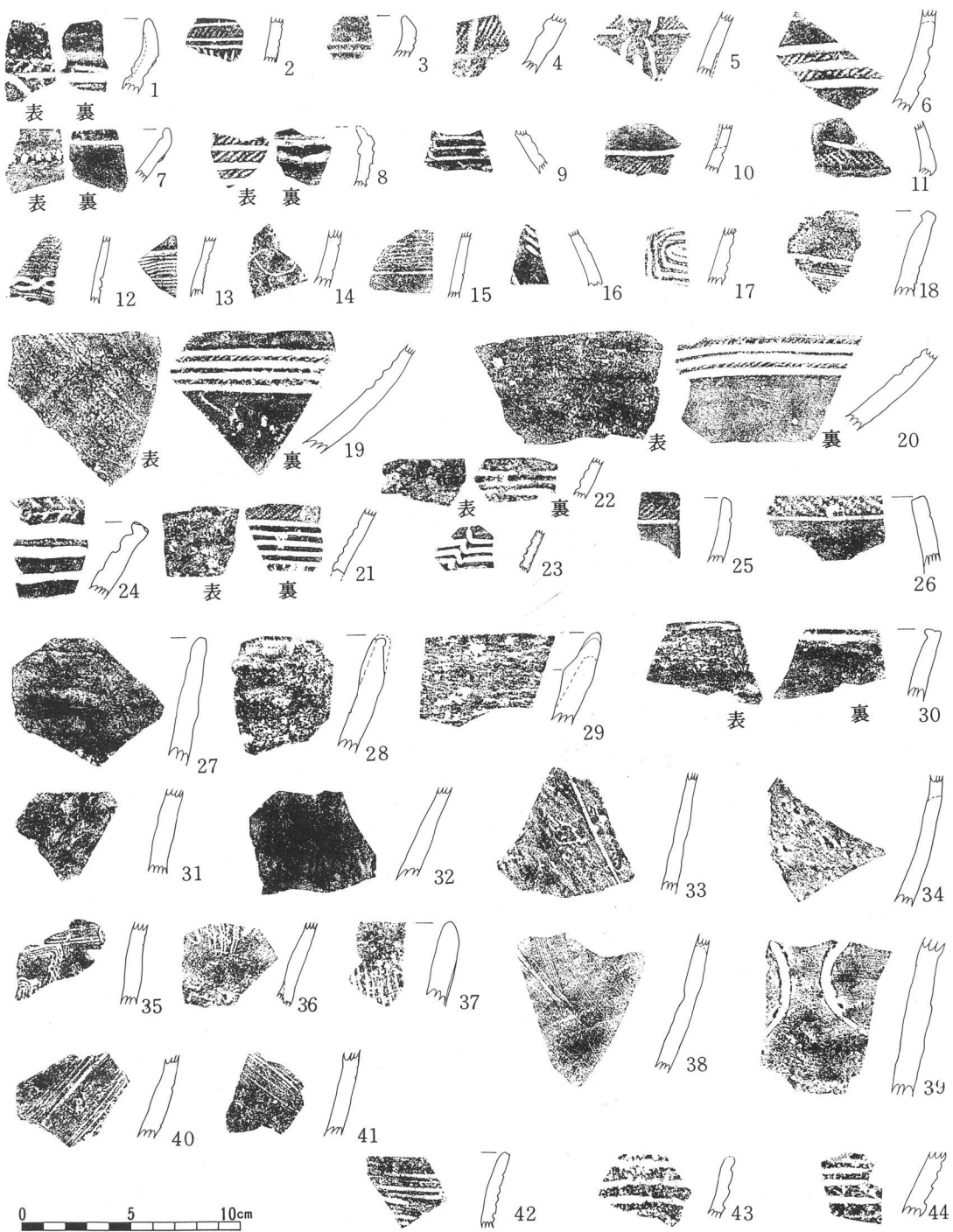
第18図 縄文時代後期第Ⅳ群第1・2・3類土器拓影図
 <1~7 称名寺、8~26 堀之内> (S=1/2)



写真Ⅺ 縄文時代後期土器<第Ⅳ群第1類(上段)、第2・3類(下段)>



写真Ⅷ 縄文時代後期土器<第Ⅳ群第4・5類(上段)、第6・7類(下段)>



第19図 縄文時代後期第IV群第4・5類(上段)、第6・7類(下段)土器拓影図 (S=1/3)

(18) がある。21は小型深鉢形土器の口縁部で、肥厚させ指頭でつまむものである。

第3類B種 (第18図19・20・22・25)

鉢形土器の口縁部で、無文で内傾する口唇部をもつもの(19・20)、内屈する口唇部をもち棒頭刺突文を施すもの(22)、横走沈線十棒状刺突文十LR斜縄文を施すもの(25)がある。

第3類D種 (第18図23)

壺形土器の頸部で、「く」の字に折れ微隆凸帯文に刻み目を施しRL斜縄文を胴部に施し、長楕円文を棒状施文具でつけ磨り消すものである。

第3類E種 (第18図26)

注口土器の頸部で、突起か釣手をもつと思われ肥厚させている。頸山部に沈線で弧状文を施している。

第4類A種 (第19図6・10・12~18)

深鉢形土器の一部で、胴部に一定の幅だけLR斜縄文を施し横走沈線を3条付けるもの(6)、棒状施文具で「木の葉状」の区画をしその外側の区画内にRL斜縄文を施すもの(10)、櫛状施文具で密な横走条線文をつけ「鎖状文」を沈線で施すもの(12)、横走条線文が見られるもの(13・15)、沈線で「鎖状文」を施すもの(14)、棒状施文具で斜条線文を施すもの(16)、隅丸長方形に沈線渦巻文を施すもの(17)、口縁部片で斜条線文を施すもの(18)がある。

第4類B種 (第19図1~4・7・8・11)

鉢形土器の一部で、口唇部を内彎させ微隆凸帯に刻み目を施すもの(1)、地文にLR斜縄文を施し沈線区画を行い横走沈線文と同心円文を施すもの(2)、口唇部を内彎させ横走沈線文を施すもの(3)、口唇部を内傾させ微隆凸帯に棒状施文具による列点文を施すもの(7)、口縁部にLR斜縄文を付け横走沈線文を施し内面にも2条の横走沈線を付けるもの(8)、頸部が内傾し棒状施文具で弧状の区画をし若干磨り消すものがある。器形は鉢と思われ、口縁部を肥厚させLR斜縄文を施し、内側に沈線を付けるもの(4)がある。

1~4・7は堀之内2~加曾利B1の過渡的な土器とも考えられる。

第5類A種 (第19図5)

深鉢形土器の胴部片で、地文にLR斜縄文を施し棒状施文具で「い」の字の連続する沈線文を付け磨り消すものである。

第5類B種 (第19図25・26)

口縁部片で、口唇部にLR斜縄文を施し外傾するもの(25)と内傾するもの(26)がある。

第5類C種 (第19図19~24)

大型の浅鉢胴部で、外面は横及び斜めのケズリを行い、内面に4条の沈線を付け間隔の隆起部に斜めの刻み目を施すもの(19・20)、中型の浅鉢胴部で、LRの斜縄文を上方に横走沈線を下方に施すもの(21)、横走沈線を施すもの(22)、「矩尺」状の沈線文を構成するもの(23)、口縁部片で外面はケズリを行い口唇部にヘラ状施文具で「ハ」の字状文を内面に太くて深い横走沈線を施すもの(24)がある。

第5類D種(第19図9)

壺形土器の頸部片で、良く磨いた後に「矩尺」状の沈線文を施すものである。

第6類A種(第19図27~34)

深鉢形土器の口縁部片及び胴部片で、直立ぎみに外傾するもの(27)、口唇部を肥厚させるもの(28・29)、口唇部が二重口縁化し内面に沈線をもつもの(30)、器面に斜めのナデを施すもの(31・32)、器面に斜めのケズリを施すもの(33・34)がある。

第7類A種(第19図35~44)

櫛状施文具で横走・蛇行条線文を施す(35)、縦位の条線文を施すもの(36・37)、整った条痕文を地文に施し、やや太い斜沈線文を付けるもの(38)と太くて深い孤状文(蛇行する可能性が強い)を付けるもの(39)、粗雑な斜条線文を施すもの(40・41)、横走の条痕文を口唇部に沿って施すもの(42)、口縁部及び頸部に幅の広い横走沈線文を施すもの(43・44)がある。

35・38・39・42は北白川上層式(註)14(「桑飼下式」)(註)15に、36・37・40・41は一乗寺K式(註)16に、43・44は元住吉山1式(註)17(「井口1式」)(註)18に各々対比されよう。

(底部)

第2~3類A種(第20図1~7)

粗製深鉢形土器底部で立ち上りが「く」の字にくびれるもの(1)、1と同型でやや凹んで立ち上るもの(3・4・7)、粗製中型深鉢形土器底部で、ゆるやかに立ち上るもの(2・6)、「く」の字にくびれて立ち上るもの(5)がある。網代は、「2本超え、1本潜り、1本送り」のもの(1)、「3本超え、2本潜り、1本送り」のもの(2)、「1本超え、1本潜り、1本送り」の粗雑なもの(3)、押圧が浅いもの(5・6)、4は不明で、7はナデ調整である。

第2~3類B種(第20図8~10・12・13)

粗製大型鉢形土器底部で直の立ち上りをし胴部にかけて丸味を帯びるもの(12)、粗製中型鉢底部で丸味を帯びて「く」の字に立ち上るもの(8)、粗製小型鉢底部でゆるやかに立ち上るもの(9・10)がある。網代は「2本超え、1本潜り、1本送り」のもの(10・12)があり、13は不明で、9はケズリ調整である。

第2~3類C種(第20図11)

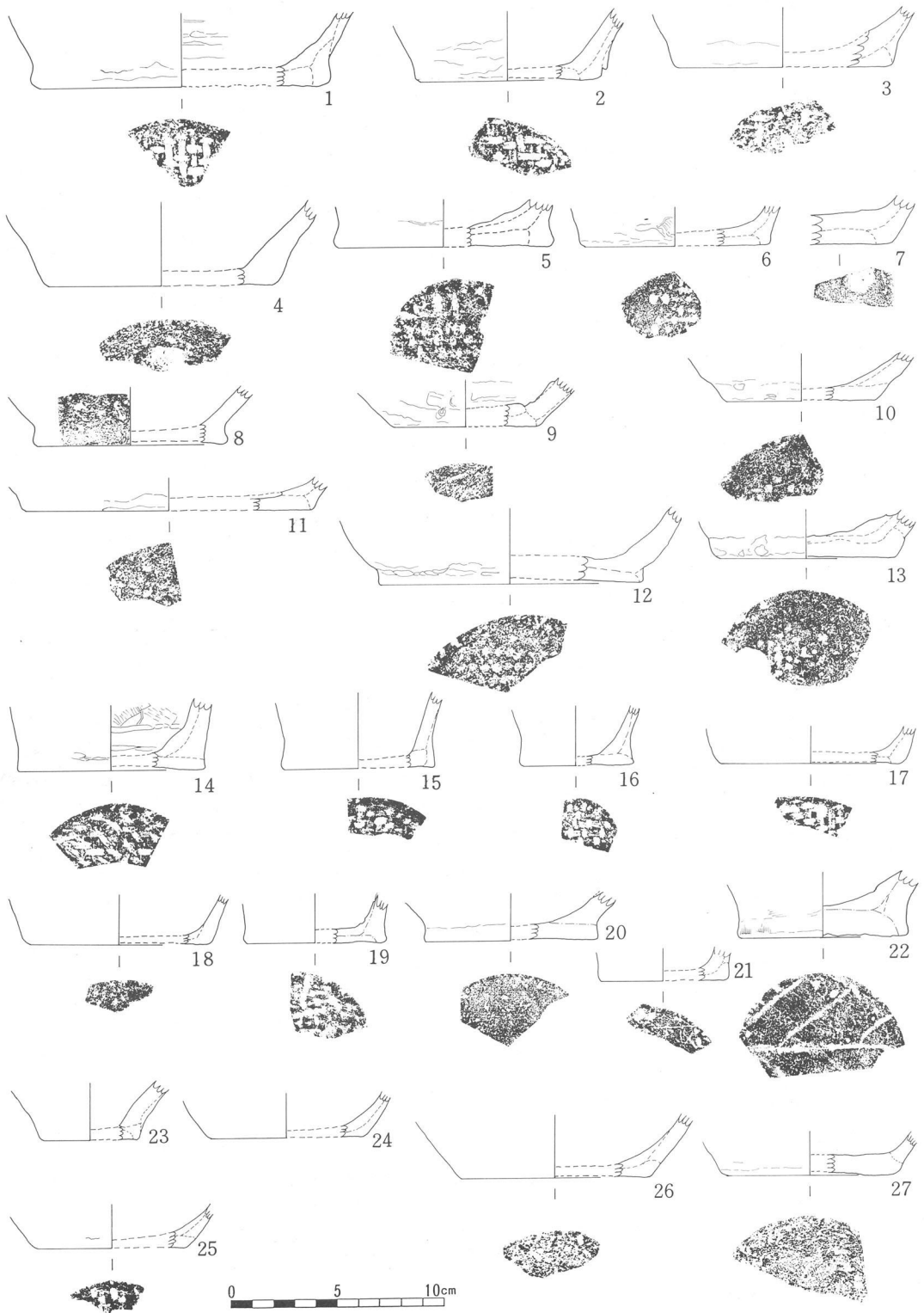
粗製浅鉢形土器底部で立ち上りはややくびれているものである。

第4~5類A種(第20図14~16・19・21)

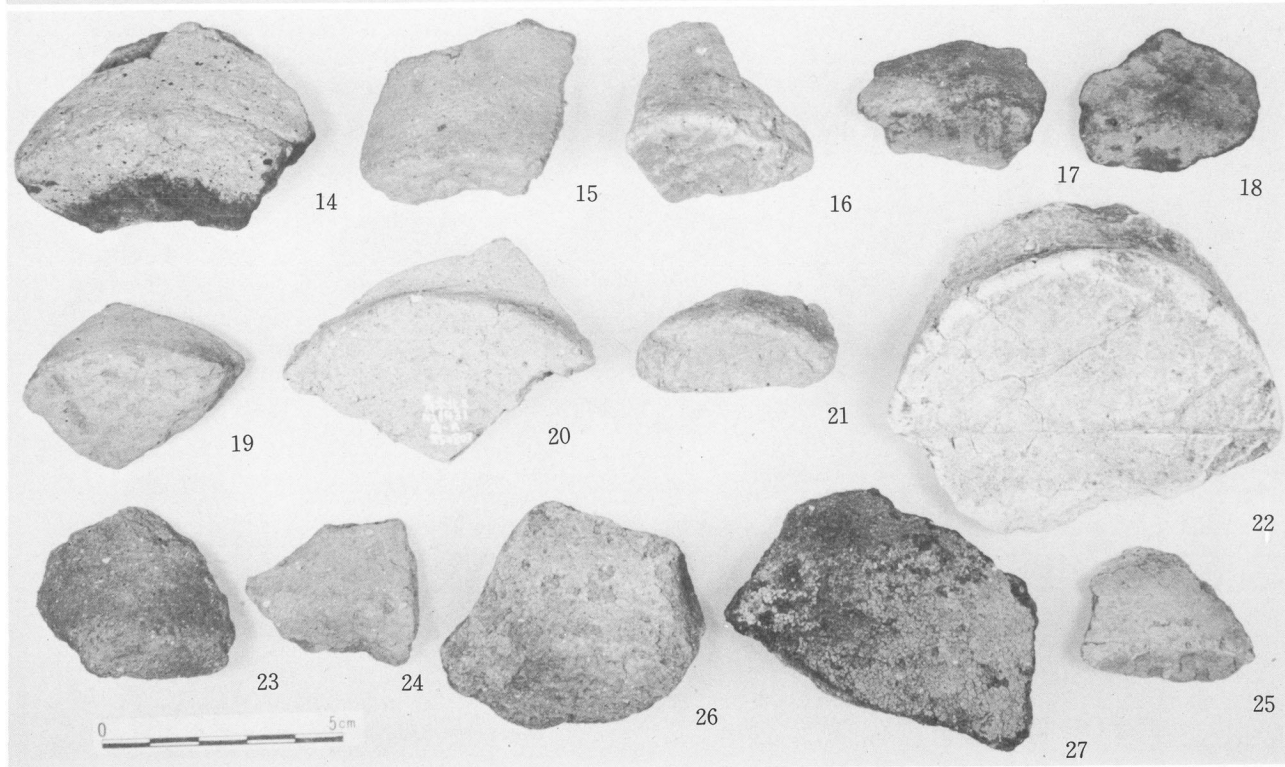
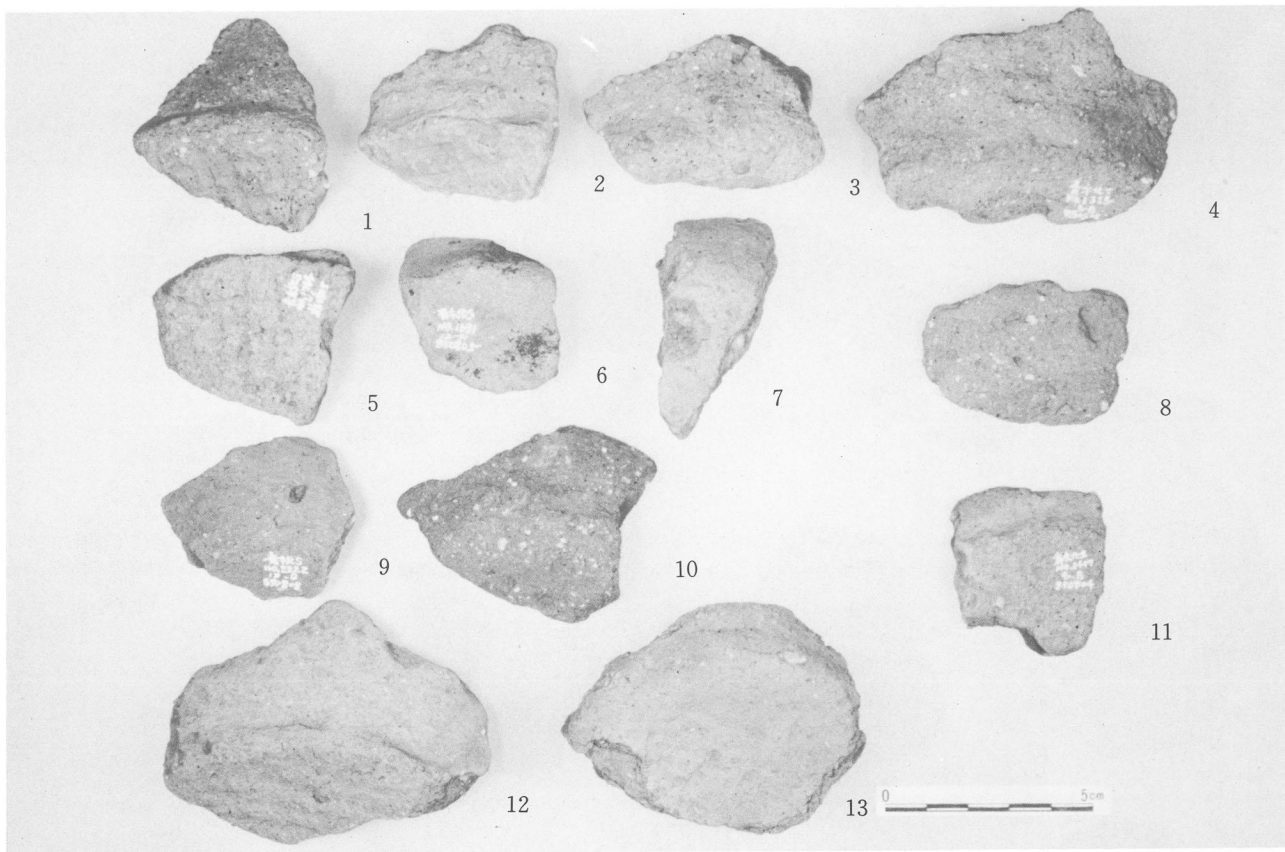
半精製中型深鉢形土器底部で立ち上りが直に近いもの(14)、半精製小型深鉢形土器底部でやくびれて立ち上るもの(15・16・19・21)がある。網代は「2本超え、1本潜り、1本送り、(斜め網み)」のもの(14)、「2本超え、1本潜り、1本送り」のもの(15・16)である。19は15と同タイプと考えられるが、やや不鮮明である。21は木葉圧痕が施されている。

第4~5類B種(第20図17・18・20・22)

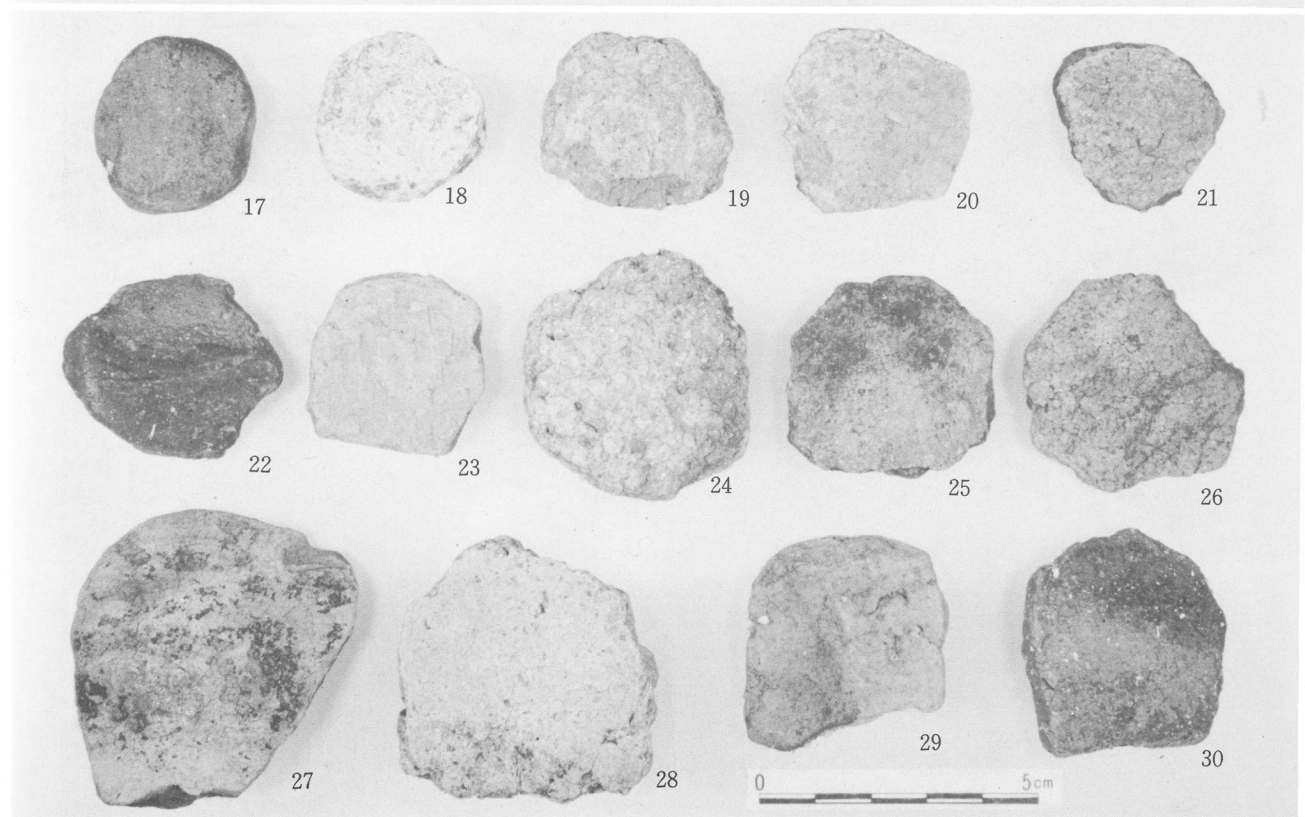
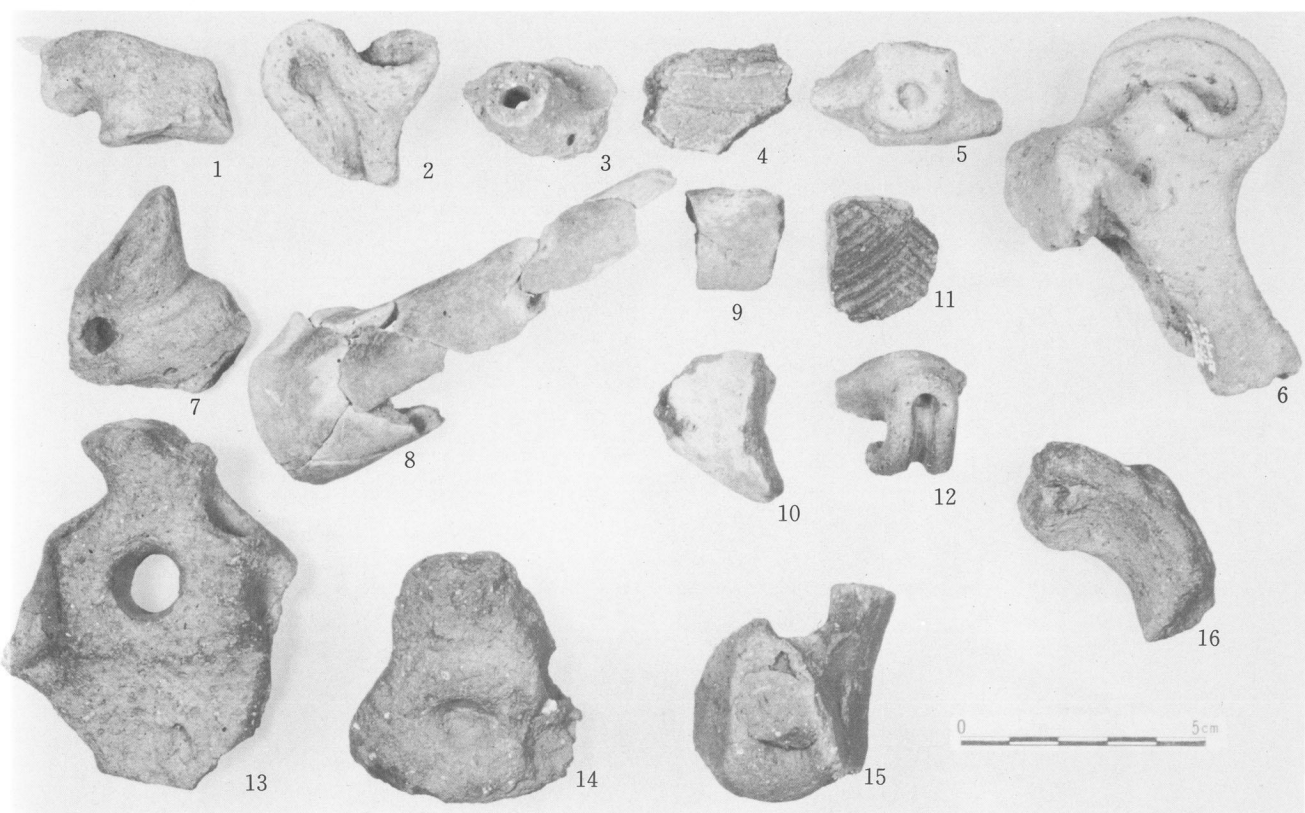
精製中型鉢形土器底部で立ち上りが丸味を帯びるもの(17・18)、くびれが強く丸味を帯びて



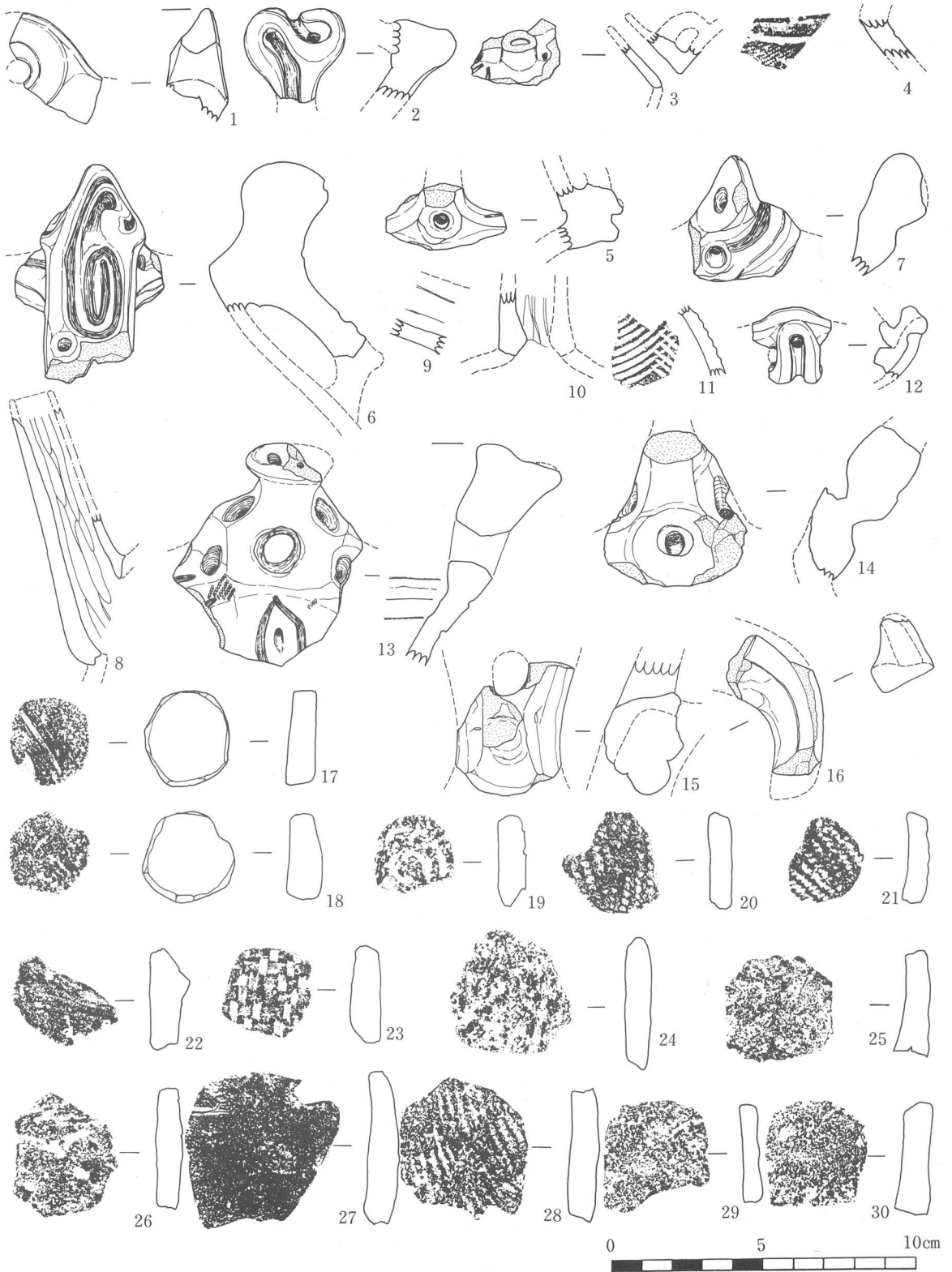
第20図 縄文時代後期土器底部実測図



写真XIII 縄文時代後期土器底部



写真XIV 縄文時代後期注口土器（上段）及び土製円版（下段）



第21図 縄文時代後期注口土器（上段）及び土製円版（下段）実測図（ $S=1/2$ ）

立ち上るもの (20)、分厚い底部で丸味を帯びて立ち上るもの (22) がある。網代は「2本超え、1本潜り、1本送り」のもの (17)、18は不明である。20はナデ調整で、22は木葉圧痕を施す。

第5類E種 (第20図23～27)

半精製注口土器底部片と考えられ、立ち上りは外反するもの (23)、精製注口土器底部片で丸味を帯びて立ち上るもの (24～26)、基底部分が丸く立ち上るもの (27) がある。25は網代底であるが網み方は不明である。26・27はナデ調整である。

注口土器

第2～3類E種 (第21図1～7)

1は、半精製深鉢形土器の口唇部とも考えられるが、^{(註)20}「注口付鉢形土器」の可能性があるので、この種に含んで考えたい。孔の直径は8mmで、両側から抉りあけている。2は「横S字」状の突起部で棒状施文具で棒頭刺突をし間をなでている。3は小型注口土器の注口部で、上方に橋梁をもつと考えられる剥落痕跡がある。棒頭刺突と条線文を施す。4は壺形土器の可能性もあるが、内外の磨きが丁寧であることからこの種に含む。孤状の沈線区画内にLR斜縄文を施す。5は頸部片で、くびれが強く、上方に橋梁をもつ突起部である。棒頭刺突と沈線文を施す。6は流水を表現するかのような「横S字」状の貼り付けを橋梁状の把手に付け棒頭刺突と沈線渦巻文を施す。

第4～5類E種 (第21図8～12)

8は精製注口土器の注口部で、現長は最大で9.5cm、口径は1.7～2.4cmを測り、外は良く磨かれ内は棒状施文具で注ぎ口に平行してなでている。注口部は傾斜が強く立ち上るものである。9・10は精製注口土器の注口部胴部片と基幹部片である。11は精製注口土器胴部片で、上方に「S字」状の削り込みと紐線(同心円状か)文を施す。外面は漆黒色をなす。12は堀之内的要素をもつが、胎土・色調よりこの類に含む。注口土器口唇突起部片で、橋梁状の貼り付けに棒状施文具で、内・外面、両側面に刺突を施す。

深鉢形土器突起部 (第21図7・13～15)

第4類A種 (第21図7・15)

7は半精製深鉢形土器の貝殻状の突起部で、正面と左側面に細い棒頭で回転しながら刺突文を施す。15は半精製深鉢形土器の柱状突起部で、直径1.5cmの環状孔が正面からあけられている。

第5類A種 (第21図13・14)

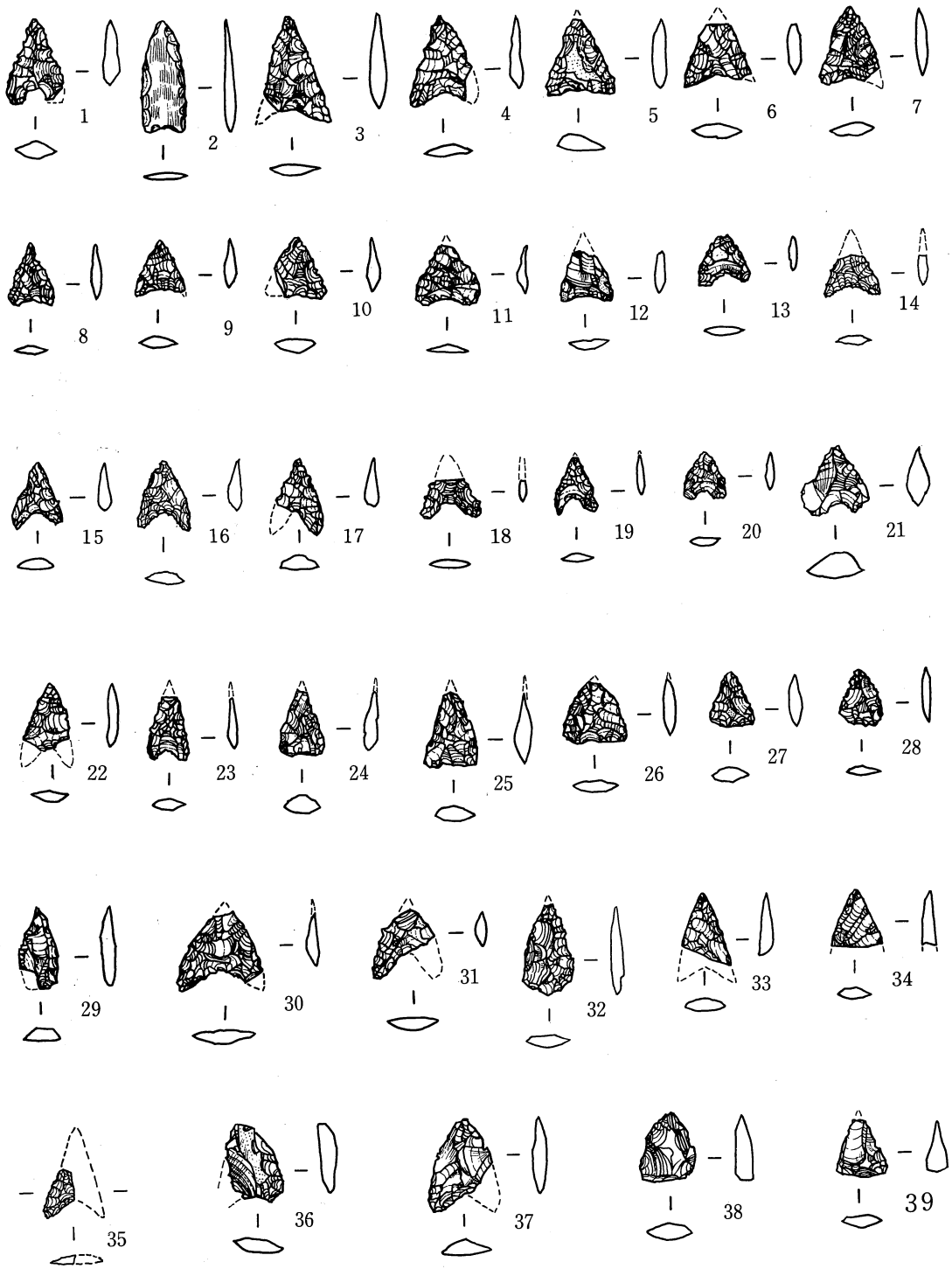
13は半精製深鉢形土器の「シシ鼻状」の頭を付け環状孔をもつ「五角形状」の突起部で、頭部上面に2個、両側面に2個ずつ棒頭で回転しながら刺突文を施す。口縁部下は「8の字状」の沈線文と刺突沈線文をつけ、その上に撚りの細いLR斜縄文を施す。14は半精製深鉢土器の柱状突起部で棒状施文具で内・外面、両側面に回転しながら刺突文を施す。

土偶 (第21図16)

肩が若干張り出す形態をとる土偶の左腕で、平らな棒状粘土塊を芯に入れ断面は三角状をなす。

母載土器一覽表

挿図No.	出土地点	形態	色調	胎土	焼成	分類	挿図No.	出土地点	形態	色調	胎土	焼成	底径	分類
18図1	1 住覆	深鉢、胴部	淡褐色	砂利、長石粒	良好	Ⅳ-1	19図32	1-E	深鉢、胴部	明褐色	長石粒多し	良好		Ⅳ-6
2	1-F	〃、〃	明褐色	金雲母、長石粒	極良好	〃	33	1-F	〃、〃	暗褐色	金雲母、砂粒	良好		〃
3	5-E	〃、〃	灰褐色	黒雲母、長石粒	良好	〃	34	4-B	〃、〃	黒色	粗い長石、黒耀石	良好		〃
4	11-D	〃、〃	明褐色	金雲母、砂粒	良好	〃	35	11-E	〃、〃	暗褐色	長石、石英多し	良		Ⅳ-7
5	12-F	〃、〃	灰褐色	金雲母、長石粒	良	〃	36	13-F	〃、〃	明褐色	銀雲母細粒、長石	良好		〃
6	12-F	〃、〃	淡褐色	4mm前後の長石	良	〃	37	12-D	〃、口縁	淡褐色	長石粒	良		〃
7	11-F	〃、口縁	明褐色	黒雲母、長石粒	良好	〃	38	1 住覆	〃、胴部	暗褐色	銀雲母多し	良好		〃
8	1-F	〃、〃	暗褐色	金雲母、長石粒	良好	Ⅳ-2	39	8-E	〃、〃	暗褐色	細粒の金雲母	良好		〃
9	9-E	〃、〃	暗褐色	長石細粒	良	〃	40	1 住覆	〃、〃	淡褐色	粗い長石、片岩	良		〃
10	2-F	〃、頸部	明褐色	堅致、長石細粒	良好	〃	41	2-D	〃、〃	灰褐色	長石多し	良好		〃
11	12-E	〃、胴部	暗褐色	堅致、長石細粒	良好	〃	42	8-D	〃、口縁	黄白色	堅致、長石粒	良好		〃
12	8-B	〃、〃	淡褐色	堅致、砂粒	極良好	〃	43	10-B	〃、〃	黄白色	粗い砂粒含む	良		〃
13	12-F	〃、〃	灰褐色	粗い、砂粒	良	〃	44	8-D	〃、胴部	黄白色	堅致、石粒	良好		〃
14	12-F	〃、〃	明褐色	粗い、長石大粒	良好	〃	20図1	配10直	〃、底部	暗褐色	黒雲母、砂粒	良好	13	2~3
15	1-F	〃、頸部	淡褐色	砂粒、雲母	良好	〃	2	配10直	〃、〃	淡褐色	粗い長石粒多し	良	8.6	〃
16	8-C	〃、口縁	淡黄白色	粗い砂粒多し	良好	〃	3	12-F	〃、〃	褐色	粗い長石、石英	良	9.6	〃
17	1-F	〃、胴部	明褐色	粗い長石多し	良好	Ⅳ-3	4	土4周	〃、〃	明褐色	粗い長石、石英	良	10.2	〃
18	12-D	〃、口縁	暗褐色	砂利、黒耀石片	良好	〃	5	11-C	〃、〃	灰褐色	長石粒多し	良	9.8	〃
19	3-E	鉢、〃	暗褐色	金雲母、砂粒	良好	〃	6	12-F	〃、〃	淡褐色	粗い長石、金雲母	良好	8.4	〃
20	12-E	〃、〃	褐色	砂利多く含む	良	〃	7	12-F	〃、〃	明褐色	長石、石英	良好	—	〃
21	土4周	深鉢、〃	明褐色	堅い、粗い長石	良好	〃	8	配10周	鉢、〃	明褐色	粗い砂粒	良好	8.4	〃
22	13-F	鉢、〃	灰褐色	銀雲母、長石	良好	〃	9	12-D	〃、〃	淡褐色	黒雲母、長石	良好	6.6	〃
23	12-F	壺、頸部	明褐色	砂粒多し	良好	〃	10	12-F	〃、〃	茶褐色	粗い長石多し	良好	6.8	〃
24	3-A	深鉢、胴部	淡黄白色	細かい、長石粒	良好	〃	11	9-B	浅鉢、〃	明褐色	砂粒多し	良	13	〃
25	8-E	鉢、口縁	明褐色	堅致、砂粒含む	良好	〃	12	10-C	鉢、〃	明褐色	砂粒、銀雲母	良好	11.8	4~5
26	9-C	注口、〃	暗褐色	砂粒多し	良好	〃	13	4-B	〃、〃	明褐色	長石、金雲母	良好	8	〃
19図1	配10周	鉢、〃	淡黄白色	極めて細かく堅致	良好	Ⅳ-4	14	配10周	深鉢、〃	淡褐色	長石、黒雲母	良好	8.4	〃
2	1-F	〃、胴部	淡褐色	細かく堅致	良好	〃	15	配10周	〃、〃	明褐色	砂粒多し	良好	6.8	〃
3	1-E	〃、口縁	明褐色	細かい、長石粒	良好	〃	16	12-D	〃、〃	淡褐色	粗い長石多し	良好	4.8	〃
4	7-D	〃、〃	明褐色	砂粒、長石粒	良好	〃	17	配10直	鉢、〃	暗褐色	細かい砂粒多し	良好	8.2	〃
5	1-F	深鉢、胴部	黒褐色	細かい黒雲母	極良好	Ⅳ-5	18	2-F	〃、〃	明褐色	堅致、長石多し	良好	8	〃
6	3-A	〃、〃	暗褐色	銀雲母細粒、長石	極良好	Ⅳ-4	19	1-E	深鉢、〃	黄褐色	長石、石英	良好	6.2	〃
7	12-D	鉢、口縁	灰褐色	細かく堅致	良好	〃	20	9-A	鉢、〃	明灰色	粗い長石、石英	良好	8	〃
8	12-F	〃、〃	灰褐色	長石粒多し	良好	〃	21	12-F	深鉢、〃	褐色	長石、石英	良好	5.6	〃
9	1-E	壺、頸部	茶褐色	細かい砂粒	良好	Ⅳ-5	22	8-A	〃、〃	灰黄色	粗い長石、石英	極良好	7.4	〃
10	1-F	鉢、胴部	灰褐色	細かく堅致	極良好	Ⅳ-4	23	12-F	注口、〃	褐色	砂粒多し	良好	4.2	Ⅳ-5
11	10-D	〃、〃	明褐色	金雲母、砂粒	極良好	〃	24	配10直	〃、〃	灰褐色	長石、石英	良好	7	〃
12	12-B	深鉢、〃	暗褐色	細かい、長石粒	良好	〃	25	9-C	〃、〃	明褐色	堅致、長石含む	極良好	6.8	〃
13	1-F	〃、〃	明灰褐色	細かく堅致	良好	〃	26	5-B	〃、〃	黄褐色	堅致、長石含む	極良好	8.6	〃
14	12-C	〃、〃	淡褐色	銀雲母、長石粒	良	〃	27	土3直	〃、〃	暗褐色	角張った長石	良好	7.6	〃
15	配10周	〃、〃	灰褐色	銀雲母、長石粒	良好	〃	21図1	8-A	〃、口縁	淡褐色	黒雲母、長石	良		2~3
16	1-F	〃、〃	明茶褐色	砂粒	良好	〃	2	12-D	〃、把手	灰褐色	粗い砂粒多し	良		〃
17	5-D	〃、〃	明褐色	細かい、長石粒	良好	〃	3	10-C	〃、注口部	明褐色	粗い長石含む	良	口径1.2	〃
18	1-F	〃、〃	灰褐色	粗い長石多し	良好	〃	4	10-B	〃、頸部	茶褐色	細かい砂粒含む	良		〃
19	1-F	浅鉢、〃	暗褐色	細かい、長石粒	極良好	Ⅳ-5	5	10-C	〃、〃	淡褐色	長石粒多し	良好		〃
20	1-F	〃、〃	暗褐色	細かく堅致	極良好	〃	6	11-E	〃、把手	明褐色	粗い長石、砂粒	良好		〃
21	1 住覆	〃、口縁	灰褐色	細粒、堅致黒耀石	良好	〃	7	12-D	深鉢、突起	淡褐色	堅致、精選土	良好		〃
22	配10周	〃、胴部	明灰褐色	黒雲母多し、長石	良	〃	8	1-E	注口、注口部	茶褐色	堅致、精選土	良好	口径2.1	4~5
23	1-F	〃、〃	明黄白色	細かく堅致	極良好	〃	9	1 住覆	〃、〃	黄白色	堅致、精選土	良好	〃2.4	〃
24	配10周	〃、〃	明茶褐色	細かく堅致	良好	〃	10	1-F	〃、〃	灰白色	堅致、精選土	良好		〃
25	1-E	鉢、口縁	暗褐色	細かく堅致	良好	〃	11	1-F	〃、胴部	漆黒色	堅致、精選土	極良好		〃
26	12-F	〃、〃	淡赤褐色	砂粒、粗い長石	良好	〃	12	15-D	〃、突起	暗褐色	堅致、長石粒	良好		〃
27	5-F	深鉢、〃	暗褐色	金、銀雲母細粒	良好	Ⅳ-6	13	1-F	深鉢、〃	灰褐色	やや粗い、長石	良好		〃
28	11-D	〃、〃	淡褐色	長石、石英多し	良	〃	14	12-E	〃、〃	暗褐色	粗い長石粒	良		〃
29	12-F	〃、〃	明褐色	細粒の雲母、長石	良好	〃	15	1-D	〃、〃	茶褐色	銀雲母、長石	良好		〃
30	2-E	〃、〃	明黄白色	パミス混入	良	〃	16	12-C	土偶、左腕	明褐色	堅致、精選土	良好		〃
31	8-D	〃、胴部	暗褐色	角の丸い砂粒	良	〃								



第22图 出土石鏃实测图 (S = 2/3)

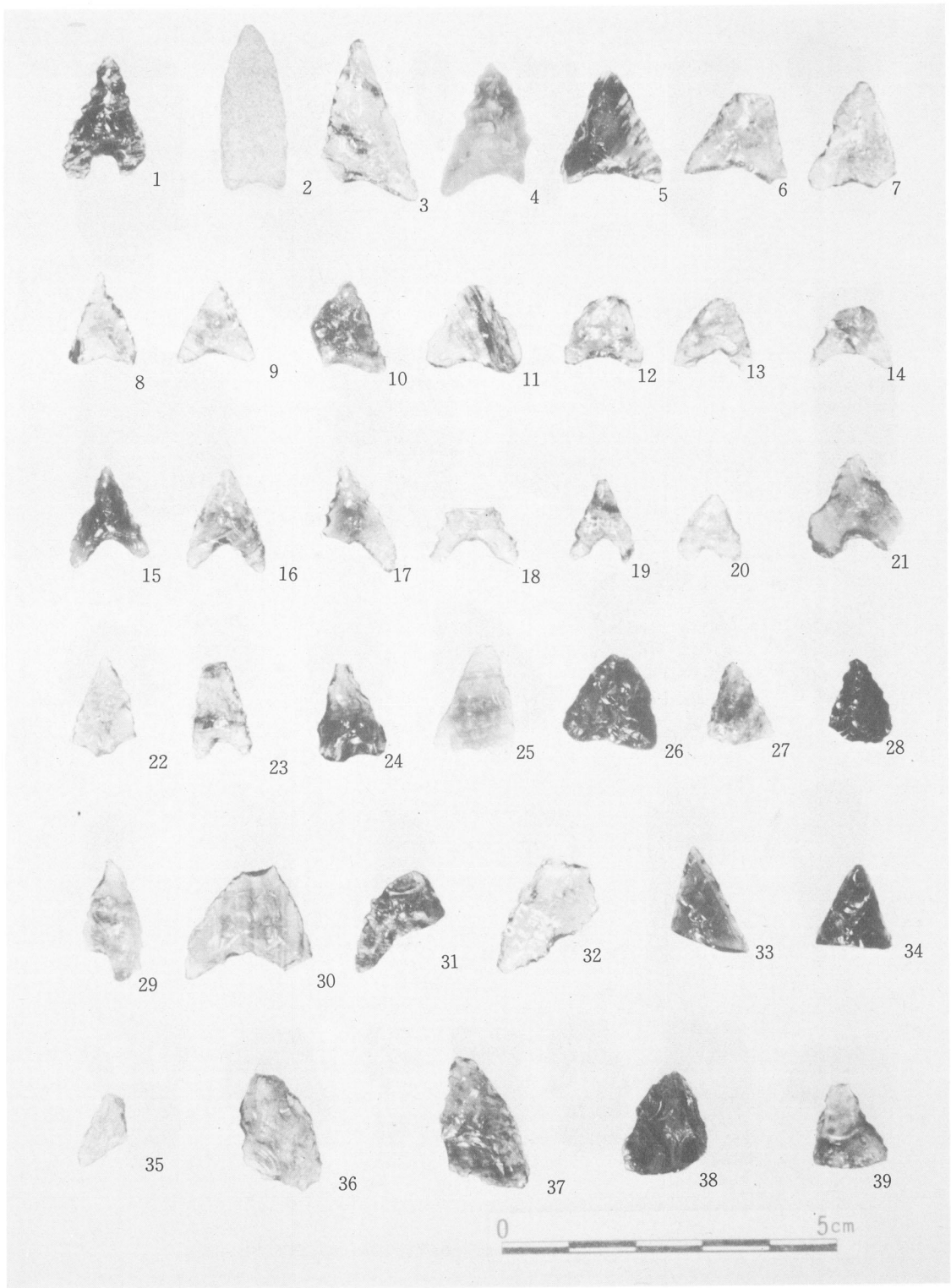
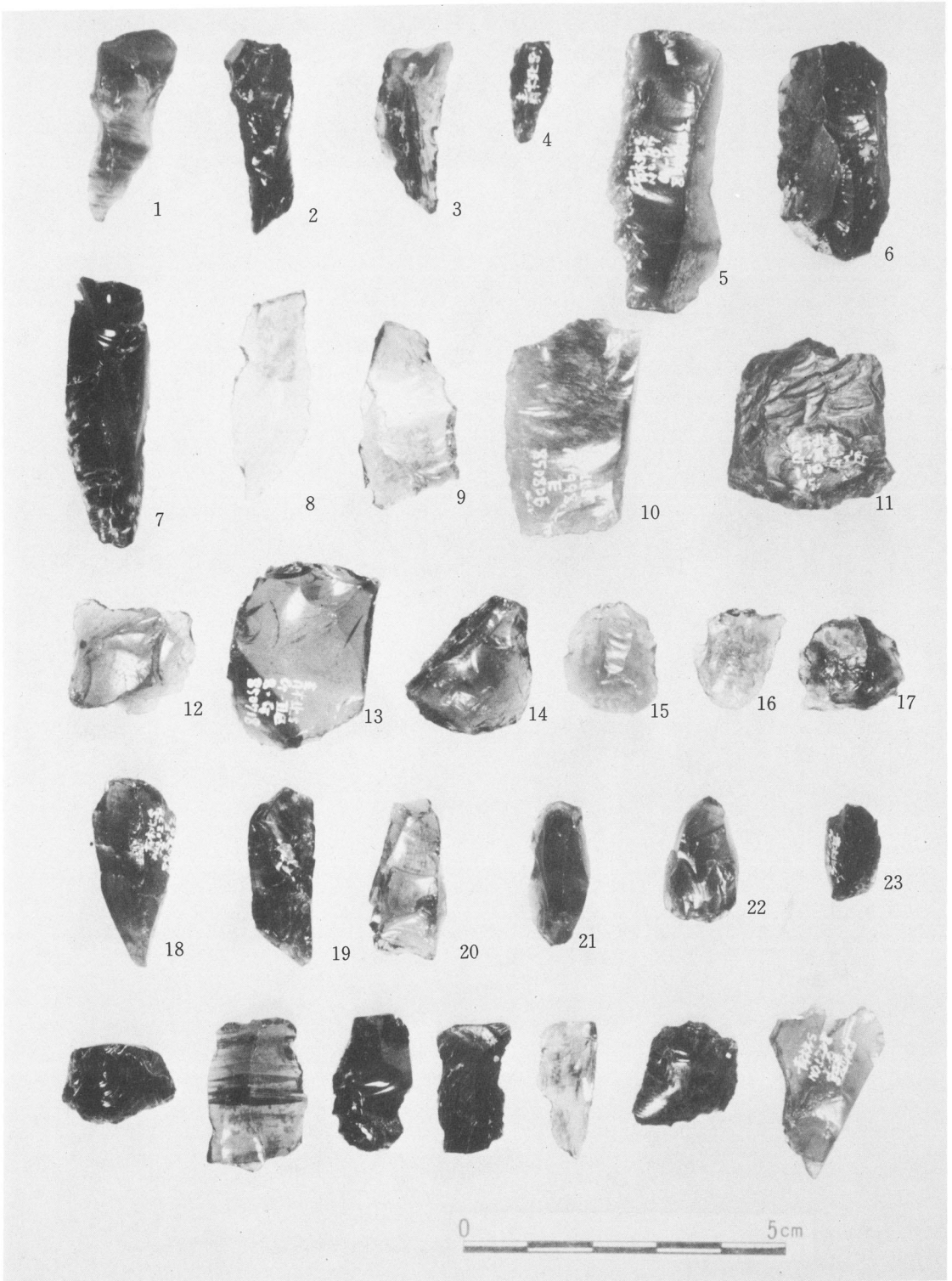


写真 XV 出土石鏃



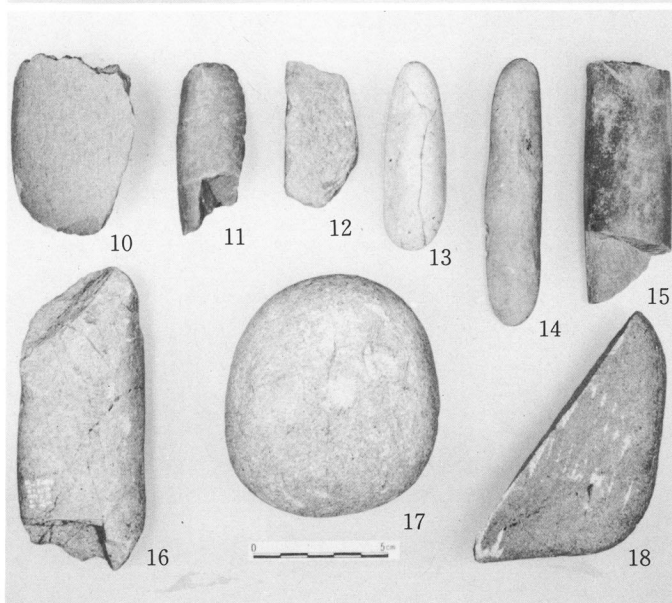
写真XVI 石錐・スクレイパー・円刃搔器・ピエスエスキュー・使用痕のある剥片（最下段）



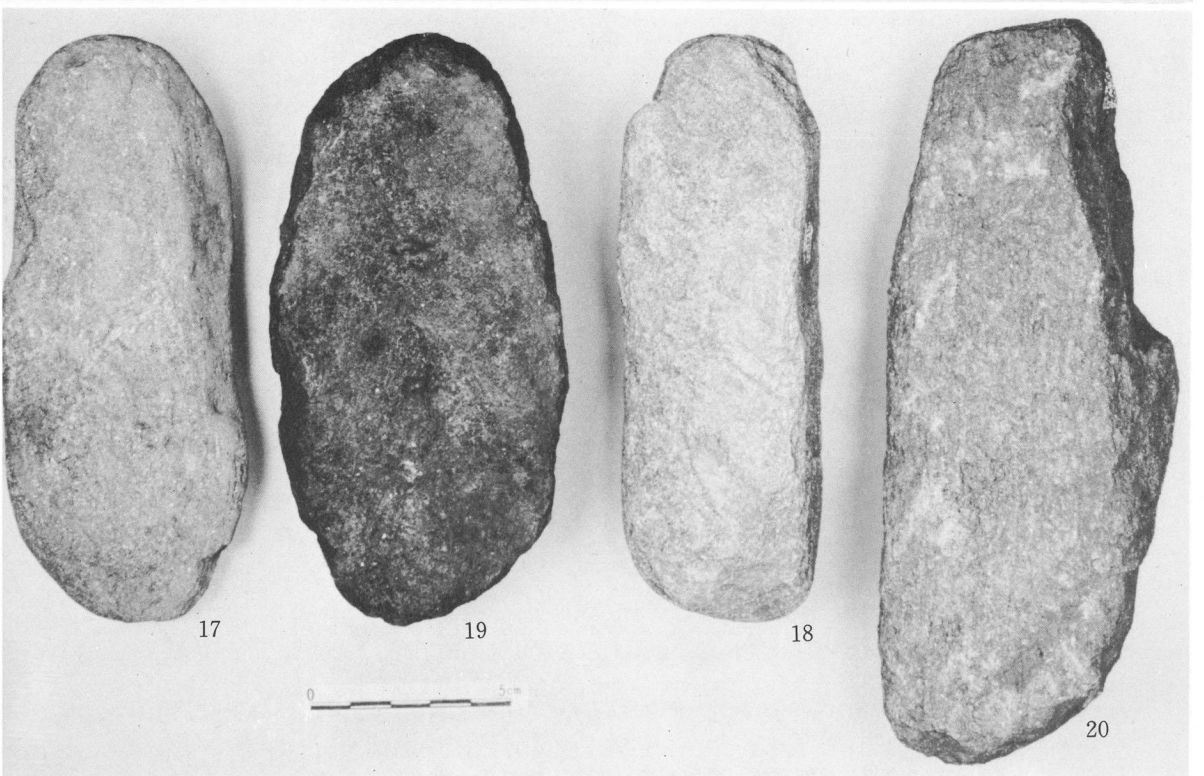
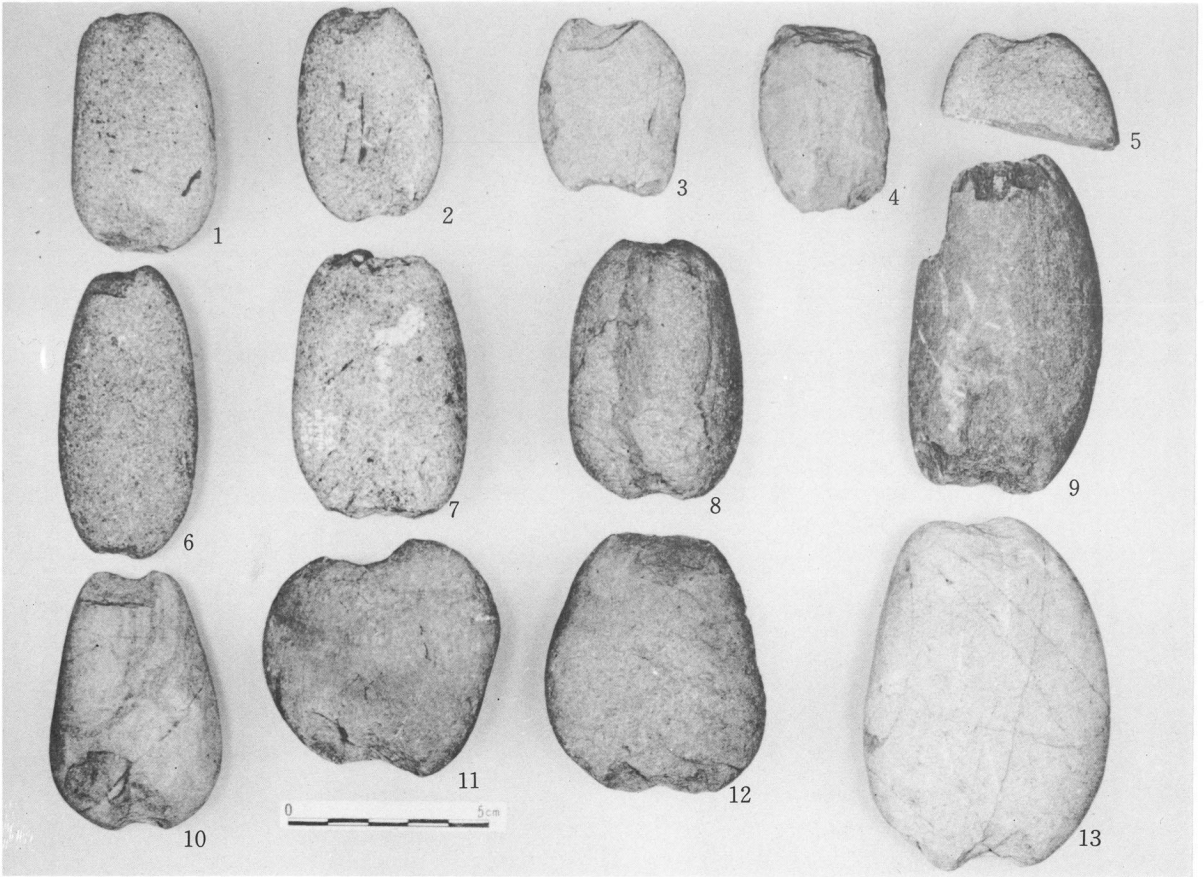
第23図 石錐・スクレイパー・円刃搔器・ピエスエスキュー実測図 (S = 2/3)



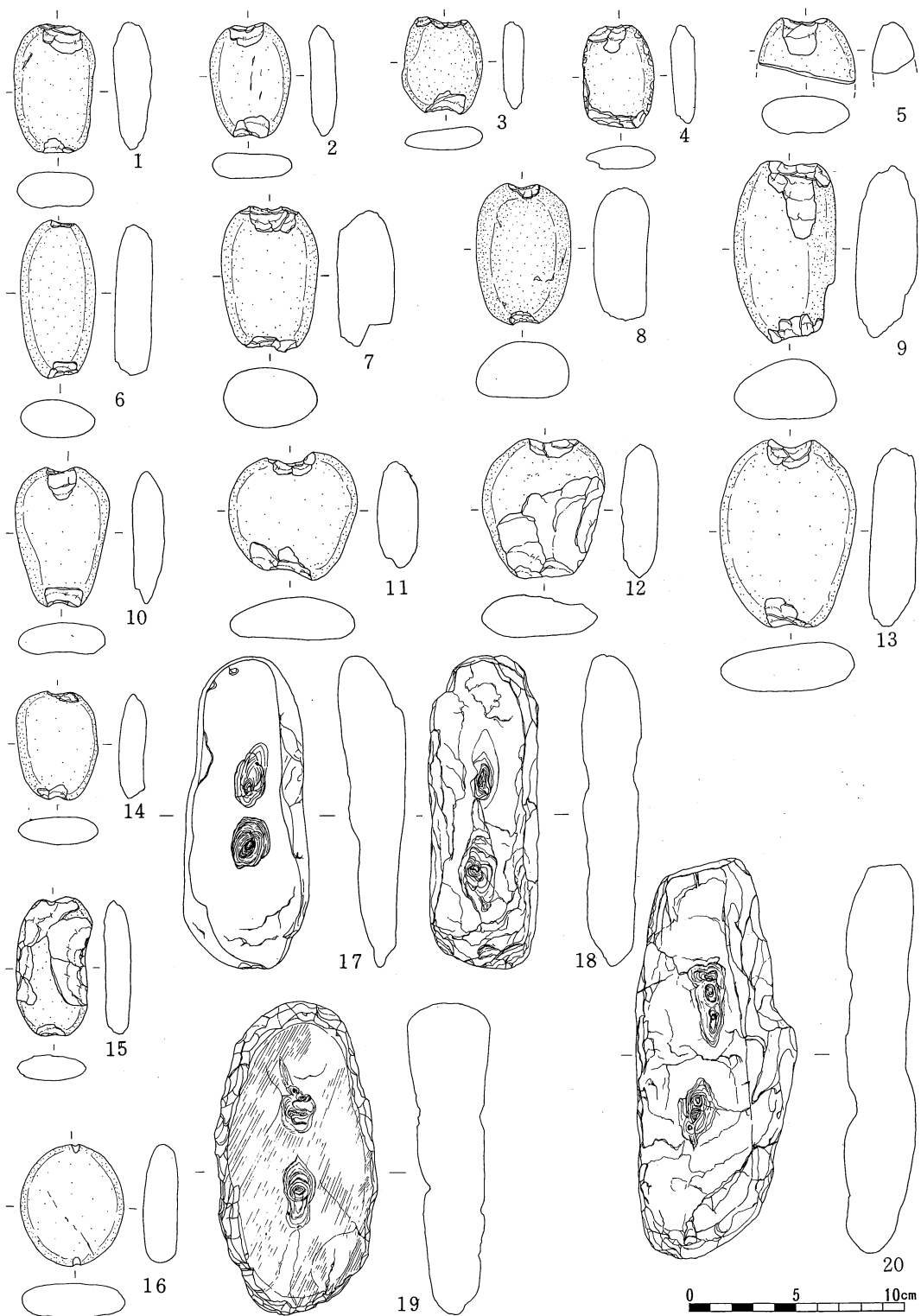
第24図 出土石器実測図 (S = 1/3)
 (1~9: 打製石斧 10~14: 磨製石器 15: 石剣 16・17: 敲打器 18: 磨り石)



写真XVII 打製石斧・磨製石器・石剣・敲打器・磨り石



写真XVIII 石錘（上段）、凹み石（下段）



第25図 出土石器実測図 (S = 1/3) (1~16: 石錘 17~20: 凹み石)

土製陶版観察表

挿図No.	出土地点	出土層位	使用部位	胎土	色調	特徴
21図17	12-D	I'層下	深鉢、胴部	細かい、長石粒	暗褐色	斜条線文。7ヶ所の打ち欠きをし5ヶ所を磨る。
18	12-D	〃	〃、〃	長石粒多し	黄白色	無文。5ヶ所の打ち欠きをし3ヶ所を磨る。
19	12-D	〃	〃、〃	粗い砂粒多し	淡褐色	渦卷文。6ヶ所の打ち欠きをし1ヶ所を少し磨る。表裏ともに剝落が著しい。
20	6-E	I'層	〃、〃	長石粒多し	灰褐色	R.L斜縦文。6ヶ所の打ち欠きをしている。
21	12-B	II層	鉢、〃	細かい長石粒	〃	R.L斜縦文。周辺を丸く打ち欠いている。
22	1住覆	〃	〃、〃	堅致、長石粒	黒色	隆起凸帯文。良好な研磨。6ヶ所を打ち欠いている。表面には黒漆塗付か。
23	1-F	I'層	深鉢、底部	〃	明褐色	2本超え、1本潜り、1本送りの網底底。周辺部を磨っている。
24	7-C	II層	〃、胴部	砂粒、長石粒	〃	無文。6ヶ所を打ち欠いている。
25	11-E	I'層下	〃、胴下部	堅致、金雲母	赤褐色	無文。割合正確に8ヶ所を均等に打ち欠いている。
26	12-F	〃	〃、胴部	銀雲母、砂粒	灰褐色	無文。7ヶ所を打ち欠いている。
27	12-E	I'層下	鉢、〃	堅致、精選土	〃	無文。5ヶ所の打ち欠きをし2ヶ所を磨る。表面は、一部黒漆を塗付か。
28	9-D	II層	深鉢、〃	粗い、長石粒	〃	R.L斜縦文。8ヶ所の打ち欠きをしている。表裏ともに炭化物付着。
29	配10直	I'層	〃、〃	堅致、長石粒	淡褐色	無文。上方は、ていねいに丸く打ち欠き、下端は雑である。
30	1-F	II層	〃、〃	堅致、黒雲母	暗褐色	斜条線文。長方形。雑に上方は磨っている。土器片鏝の可能性もある。

掲載石器一覧表

挿図No.	出土地点	形態	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	特徴	挿図No.	出土地点	形態	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	特徴
22図1	1住覆土	凹基無茎鎌	(1.80)	(1.24)	0.43	(0.55)	o b	鋭形、剝離良、側刃凹凸	23図2	6-B	石 錐	3.09	1.08	0.43	1.14	o b	刃部傾斜、剝離雑
2	3-C	〃	2.48	1.02	0.19	0.58	鳴滝	長身、表裏磨る。	3	8-F	〃	2.76	0.98	0.84	1.68	o b	剝離雑
3	7-C	〃	(2.48)	(1.40)	0.31	(0.77)	o b	長身、剝離良、肉薄	4	南部分	〃	(1.80)	0.69	0.33	(0.32)	o b	先端丸し、剝離良、肉薄
4	12-C	〃	(1.98)	(1.32)	0.26	(0.59)	c h	長身、剝片鏝、側刃凹凸	5	4-D	ナイフ	4.68	1.94	0.58	4.52	o b	側刃、剝離無し
5	3-E	〃	(1.09)	1.53	0.36	(0.77)	o b	長身、剝片鏝、肉厚	6	12-E	〃	3.44	1.78	0.61	4.30	o b	側刃、剝離若干
6	4-F	〃	(1.40)	(1.53)	1.34	(1.62)	o b	長身、剝離良、肉厚	7	12-D	〃	4.20	1.29	0.70	3.50	o b	側刃、剝離無し
7	5-F	〃	(1.68)	(1.31)	0.25	(0.50)	o b	長身、剝離雑、肉薄	8	3-E	〃	3.37	1.26	0.33	1.09	o b	側刃、剝離若干
8	1-D	〃	1.39	1.01	0.21	0.20	o b	短身、剝離良、先端頭	9	1-G	Sスクレイパー	2.92	1.53	0.54	1.95	o b	剝離雑、下刃調整
9	11-C	〃	1.19	1.17	0.24	0.21	o b	短身、剝離良	10	1-E	〃	3.27	2.00	0.66	4.72	o b	黒輝岩、剝離良、下刃有
10	10-C	〃	(1.42)	(1.18)	0.31	(0.38)	o b	短身、剝離雑、肉厚	11	10-G	E. 〃	2.55	2.65	0.80	5.94	c h	赤色c h、剝離
11	配2覆土	〃	(1.30)	1.41	0.27	(0.38)	o b	巾広、剝片鏝、剝離雑	12	9-B	S. 〃	1.78	1.94	0.75	2.50	o b	側刃、剝離雑
12	12-B	〃	(1.10)	1.18	0.27	(0.30)	o b	短身、剝離雑、肉厚	13	8-G	E. 〃	2.83	2.26	0.65	5.83	o b	剝離良、良質 o b
13	5-A	〃	(1.09)	1.15	0.22	(0.25)	o b	短身、剝片鏝、剝離雑	14	11-C	円刃掻器	2.21	1.89	0.90	3.18	o b	剝離良、自然面多し、肉厚
14	12-F	〃	(1.02)	1.23	0.20	(0.15)	o b	短身、剝離良、肉薄	15	2-A	〃	1.74	1.46	0.43	1.16	o b	剝離雑、剝片使用
15	2-D	〃	1.41	1.17	0.30	0.26	o b	短身、挟入深、剝離良	16	1-G	〃	1.60	1.21	0.41	0.80	o b	剝離良(石鏝か?)
16	12-E	〃	1.52	1.20	0.29	0.34	o b	長身、挟入深、剝離雑	17	4-C	〃	1.50	1.65	0.51	1.21	o b	剝離雑(石鏝か?)
17	10-C	〃	(1.70)	(1.02)	0.28	0.29	o b	長身、挟入深、剝離良	18	3-F	ピュスエスキユ	2.95	1.29	1.81	2.70	o b	上下端打撃若干、長剝離
18	5-E	〃	(0.86)	(1.33)	0.22	(0.20)	o b	(長身)挟入深、剝離良	19	2-E	〃	2.77	1.04	0.65	1.83	o b	上下端打撃若干、長剝離
19	南部分	〃	1.23	0.96	0.20	0.14	o b	短身、挟入深、剝離雑	20	12-E	〃	2.44	1.23	1.72	2.06	o b	下端打撃多し
20	5-E	〃	1.03	0.97	0.20	0.17	o b	小形、挟入深、剝離良	21	住覆土	〃	2.23	0.94	0.80	1.77	o b	上下端打撃若干
21	8-E	〃	1.48	1.44	0.46	0.73	o b	長身、挟入深、剝片鏝	22	1-F	〃	1.94	1.15	0.66	1.51	o b	下端打撃多し
22	4-D	〃	(1.51)	(0.99)	0.23	(0.29)	o b	長身(挟入深)、剝離雑	23	1住覆土	〃	1.54	0.71	0.68	0.82	o b	上下端打撃多し
23	3-C	〃	(1.43)	0.90	0.26	(0.27)	o b	長身、挟入深、剝離良	24図1	6-A	打製、短冊	3.0	5.9	2.1	(216)	sa-st	刃部半欠け、表面自然面残
24	12-B	平基無茎鎌	(1.43)	1.01	0.40	(0.50)	o b	長身、剝離雑、肉厚	2	12-D	〃	13.6	4.1	2.1	172	cla-st	表面自然面残、風化進
25	1住直上	〃	(1.65)	1.20	0.34	(0.50)	o b	長身、剝離雑、肉厚	3	12-D	〃	8.1	3.5	1.1	52	〃	表面自然面残、風化進
26	5-C	〃	(1.36)	1.43	0.30	(0.57)	o b	巾広、剝離良、肉厚	4	7-D	〃	(8.1)	4.1	2.0	(110)	sa-st	刃部に自然面残、頭部欠
27	6-A	〃	1.23	0.99	0.28	0.28	o b	小形、剝離良、肉厚	5	12-C	〃	(5.0)	3.9	0.5	(14)	ho-an	刃部両端欠
28	12-B	〃	1.27	(0.95)	0.20	(0.19)	o b	小形、剝離雑、肉薄	6	配10直上	〃	(6.1)	5.9	1.6	(68)	sa-st	刃部使用痕顯著、頭部欠
29	12-D	円 基	1.81	(0.87)	0.28	(0.48)	o b	長身、剝離雑、先曲る	7	7-G	〃	(8.2)	5.2	2.0	(112)	〃	頭部、刃部欠く。自然面多
30	9-B	凹基無茎鎌	(1.80)	(1.90)	0.33	(0.89)	o b	飛燕形、剝離雑	8	8-D	〃	(11.0)	8.2	2.3	(303)	〃	大形。刃部使用痕顯著
31	配9覆土	〃	(1.66)	(1.22)	0.29	(0.39)	o b	飛燕形、剝離良、風化	9	11-D	〃	(9.8)	8.2	1.9	(184)	〃	大形。刃部使用痕顯著
32	4-D	平基有茎	(1.99)	(1.11)	0.28	(0.59)	o b	長身、剝離雑、側刃凹凸	10	9-C	磨製石器	6.2	4.9	2.7	110	ch-sc	定角磨製石斧片利用
33	11-F	—	(1.73)	(1.05)	0.26	(0.38)	o b	(長身)剝離良、良質 o b	11	3-F	〃	6.5	2.7	1.5	40	cla-st	上端敲打顯著、若干磨り
34	3-E	—	(1.22)	(1.12)	0.31	(0.35)	o b	(長身)剝離良、良質 o b	12	1-B	〃	5.0	2.7	0.9	22	ch-sc	表裏面斜め磨り
35	3-D	(凹基無茎鎌)	(0.71)	—	0.22	(0.10)	o b	(長身)剝離良	13	11-E	〃	7.0	2.4	1.6	39	gr-tu	全体を粗く磨る
36	10-C	—	(1.70)	(1.15)	(0.36)	(0.78)	o b	未製品、自然面多し	14	8-C	〃	9.8	2.2	1.1	34	ch-sc	下端磨り顯著
37	6-F	—	(2.14)	(1.15)	(0.35)	(0.78)	o b	未製品、自然面若干	15	10-G	石 剣	(8.8)	(3.3)	1.8	(82)	〃	焼けている。敲打痕有
38	7-D	—	(1.58)	(1.26)	(0.44)	(0.84)	o b	未製品、自然面多し	16	土3直上	敲 打 器	10.6	4.7	7.4	196	sa-st	両端打ち、片側面磨り
39	3-F	—	(1.08)	(1.35)	(0.42)	(0.48)	o b	未製品、自然面若干	17	10-D	〃	8.7	7.7	4.3	434	〃	局部的に敲打、若干磨り
23図1	7-D	石 錐	(8.10)	1.17	0.82	(2.60)	o b	先端欠、剝離良	18	1-E	磨り石	9.1	6.7	2.6	168	〃	表面全体磨り、裏面若干

掲載石器一覧表

挿図No.	出土地点	形態	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	特徴	挿図No.	出土地点	形態	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	特徴
25図1	8-G	打製、石錘	5.9	3.5	1.5	55	sa-st	長方形状、肉やや厚	25図16	配9周辺	切目、石錘	5.4	4.7	1.3	62	sa-st	円形状、切目浅い
2	6-A	〃	5.1	3.6	1.1	36	〃	長方形状、肉薄	17	4-D	凹み石	14.3	5.7	2.5	304	mi-gn	表面2凹み
3	8-G	〃	4.4	3.7	0.9	24	〃	方形状、肉薄	18	11-D	〃	14.3	4.9	2.5	327	〃	表面2凹み、裏面1
4	8-F	〃	4.1	3.1	1.0	24	sha	方形状、肉薄、剝離多し	19	7-A	〃	14.3	5.2	3.0	572	〃	表裏面2凹み
5	9-F	〃	(2.8)	(3.9)	(1.7)	(29)	sa-st	半分欠く、肉厚	20	7-A	〃	14.8	6.3	2.8	648	〃	表裏面2凹み
6	9-B	〃	7.2	3.4	1.7	65	〃	短冊状、肉やや厚	26図	9-A	石棒	(12.4)	(16.5)	(12.3)	—	hy-an	人為的に壊されている
7	11-C	〃	6.4	4.3	2.6	118	〃	長方形状、肉厚	27図15	1住直上	打製、砲丁	3.4	8.4	1.0	34	si-sha	刃部長7.9cm、肉厚
8	配7周辺	〃	6.1	4.2	2.6	114	〃	長方形状、肉厚	16	1住直上	〃	3.1	6.5	0.3	10	mi-sla	刃部長5.5cm、肉薄
9	8-A	〃	7.5	4.7	2.8	162	ch-sc	短冊形、肉厚	17	13-B	〃	2.8	(5.5)	0.4	(8)	si-sha	刃部長4.4cm、局部磨、肉薄
10	4-E	〃	6.1	4.0	1.3	58	sa-st	三角形状、肉やや厚	18	1住直上	〃	3.0	(5.4)	0.5	(10)	〃	視刃部長2.4cm、片面磨、肉薄
11	11-B	〃	6.9	5.9	1.9	85	ep-sc	円形状、肉厚	19	16-B	〃	3.0	(4.5)	0.4	(7)	〃	視刃部長4.4cm、3側面刃部
12	1住覆土	〃	6.1	5.4	2.4	86	sa-st	円形状、肉厚	20	1住直上	磨製、石鏃	(4.0)	(2.7)	0.3	(4)	〃	未製品、表裏、両側面磨る
13	10-C	〃	8.2	6.1	2.1	178	〃	長円形状、肉厚	21	1住直上	〃	(2.3)	(2.4)	0.15	(2)	mi-sla	未製品、表面、下端面磨る
14	7-A	〃	4.7	3.7	1.2	33	cla-st	方形状、肉薄	22	1住直上	〃	(1.6)	—	0.3	(1)	si-sha	欠損多し、磨りていいい
15	11-C	〃	6.3	3.2	1.1	36	sa-st	短冊状、肉薄	23	1住直上	有肩打石器	8.4	11.2	2.0	202	sa-st	扇形状、表面自然面残

※「掲載石器一覧表」で、出土地点—出土グリット（第30図参照）と連携—

長さ・幅・厚さの単位—cm—、重さの単位—g—、石質—
sa-st = sand stone ~ 砂岩（硬砂岩）

sha = shale ~ 頁岩

ch = chert ~ チャート

ob = obsidian ~ 黒曜岩（黒耀石）

mi-gn = banded two-mica-geniss ~ 縞状両雲母片麻岩

hy-an = hyperstene-hornblende-andesite ~ 角閃輝石

角閃安山岩

ch-sc = chlorite-schist ~ 緑泥片岩

mi-sla = mica-slate ~ 雲母粘板岩

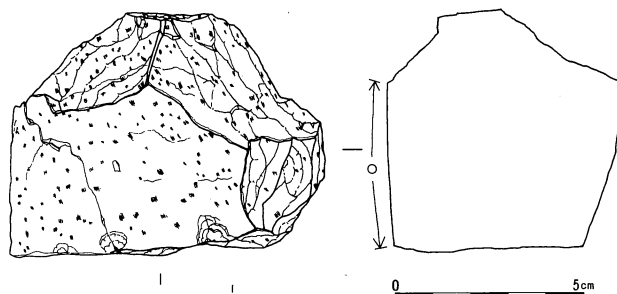
cla-st = clay stone ~ 粘板岩

ep-sc = epidote-schist ~ 綠簾片岩

ho-an = hornblende-andesite ~ 角閃安山岩

gr-tu = green-tuff ~ 綠色凝灰岩

を表わす。



第26図 出土石棒実測図

($S = \frac{1}{2}$)

土製円版、石器、石製品（弥生時代含む）

—第22～26図・写真XV～XVIII参照—

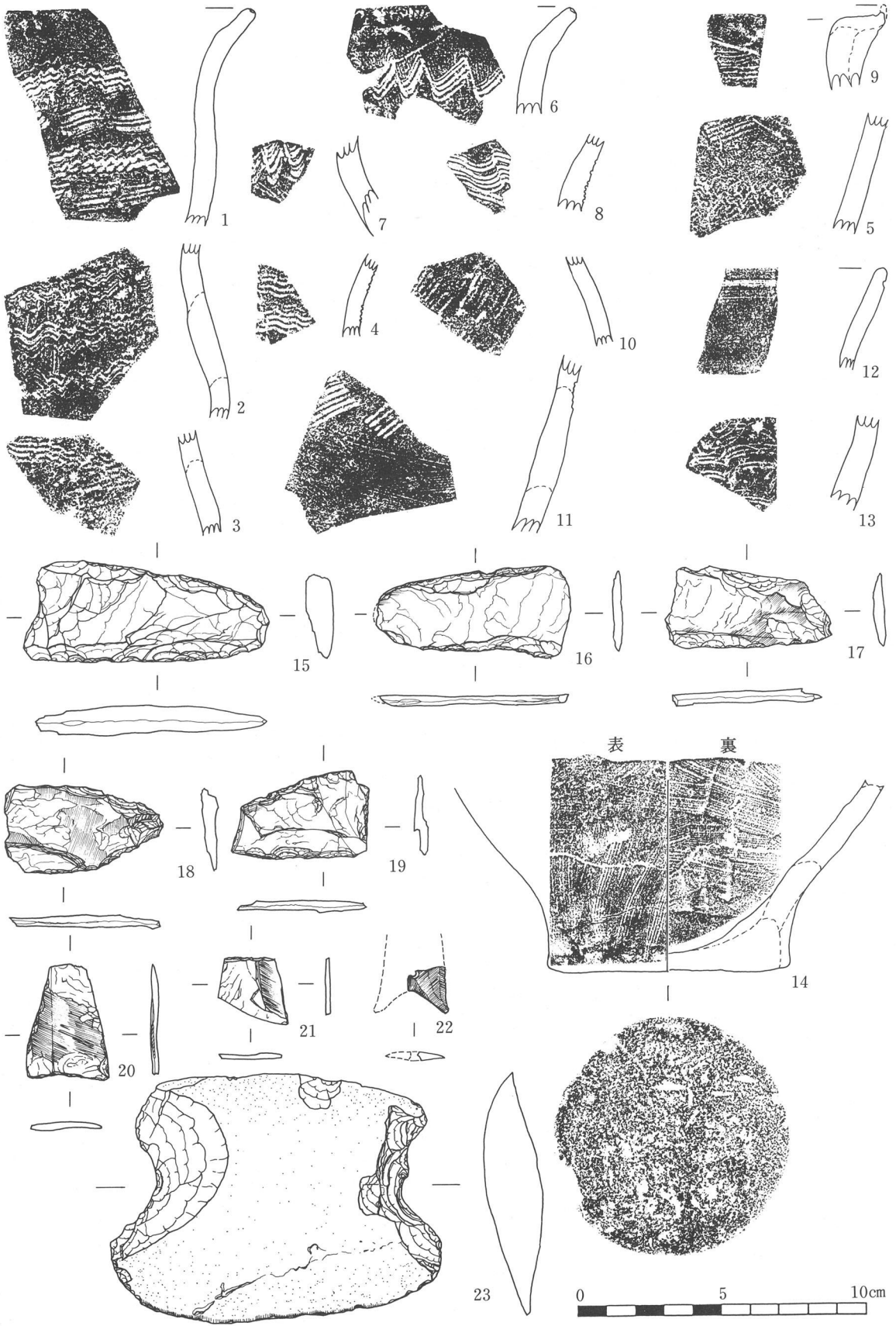
この節内では、一覧表及び観察表を参照願いたい。

第V群土器（第27図1～14・写真XIX・XX）

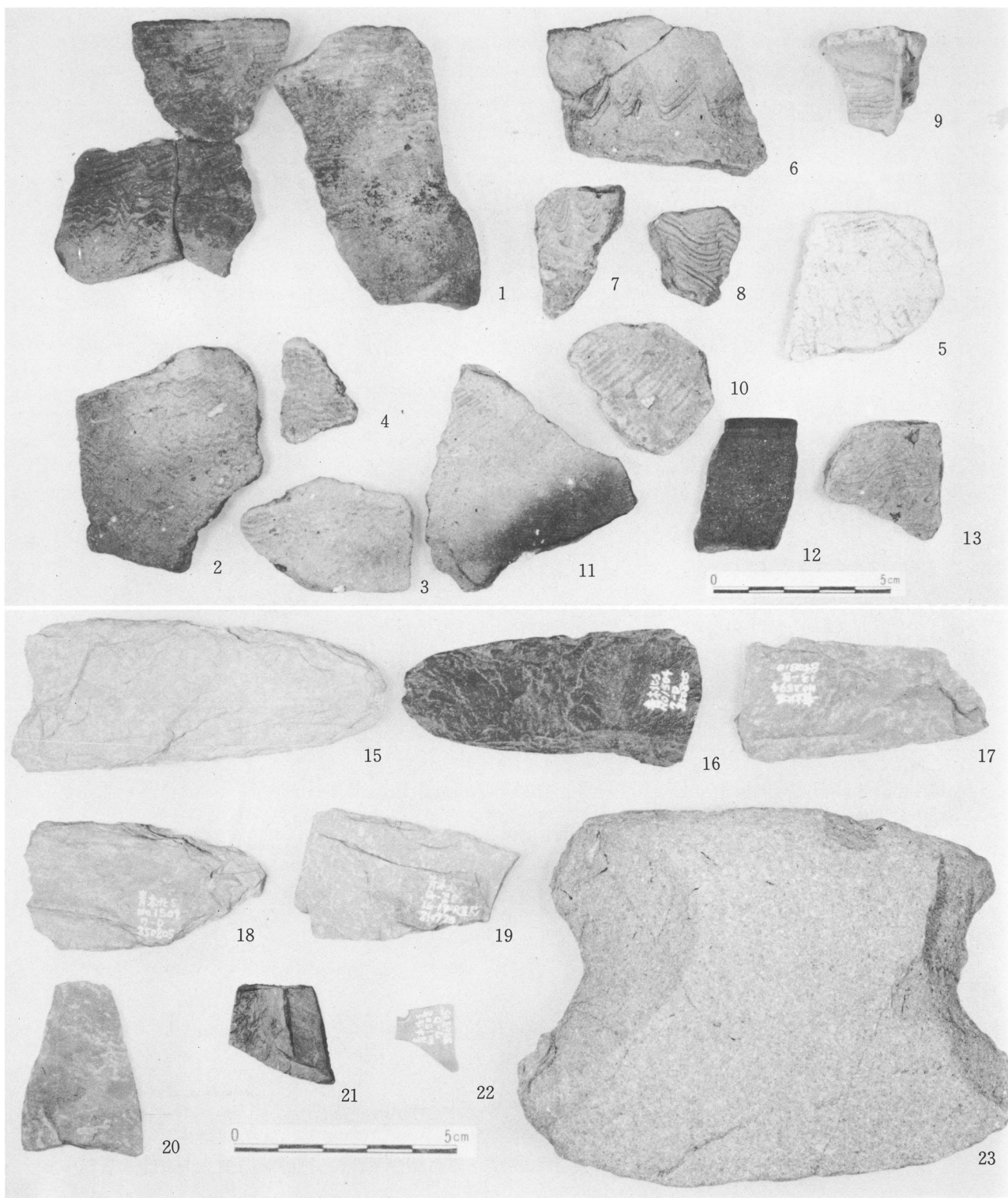
弥生時代中期末から後期前葉にかけてに属するものである。

第27図中2～4、9、11、13以外は第1号住居跡床面直上から出土している。1は深鉢形土器口縁部片で、口唇部に楕状施文具で刻み目をもち表面は横ナデ後、口縁部下に同施文具で波状文及び短条線文を施す。裏面は口唇部近くはていねいな横ナデ、下方は斜めのナデを行う。色調は暗褐色で表面炭化物付着。胎土は堅致で銀雲母を多く含み、焼成は良好。2～5は同じタイプの胴部片で、2は茶褐色で黒曜石細片を含み、3は淡黄褐色で黒雲母を含み、4は明褐色で長石が多く、5は淡黄白色で長石を多く含む。6は1同様口唇部に刻み目をもち表面は斜めのナデ後、振幅の広い波状文を施す。色調は明褐色で、胎土には細かい黒雲母・長石を含み焼成は良好。7は同じタイプの頸部片で、色調は明褐色、胎土には粗い長石を含む。8も6と同じタイプであるが波状文が傾いて施文されている。9は壺形土器の口縁部片で、口唇部は縁が付き口縁部に鋸歯文が施されている。色調は淡褐色で、胎土は細かい砂粒を含む。10・11は深鉢形土器胴部片と考えられ、ともに短条縁文を斜めに施す。10は明赤褐色で細かい金雲母と粗い長石を含み、11は明褐色で細かい金・黒雲母を多く含む。12は深鉢口縁部片で、口唇部下に浅い沈線をもつ。暗褐色で極細かい銀雲母を含む。13は深鉢胴部片と考えられ、楕状施文具で明瞭な波状文・同心円文を施す。14は深鉢形土器底部で、表面は横・斜・縦の、裏面は斜めの楕引文を施す。底径は8.2cmで無文である。

（小原晃一）



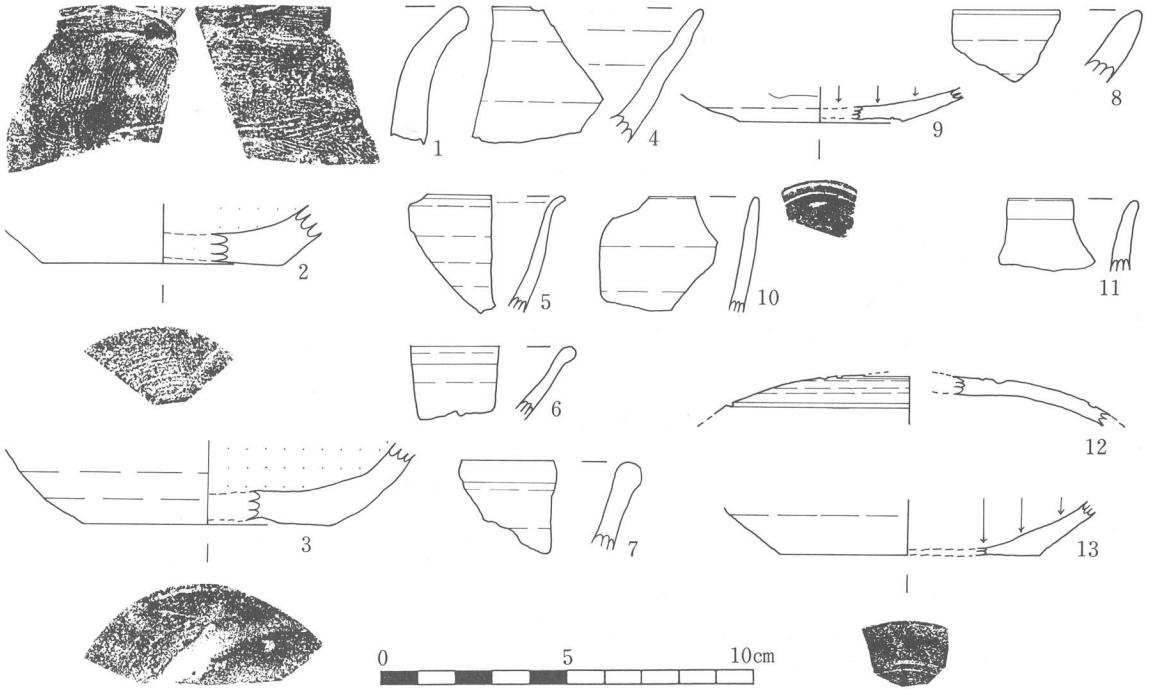
第27图 弥生時代第V群土器・石器実測図 (S = 1/2)



写真XIX 弥生時代土器（第V群）・石器実測図



写真XX 弥生時代土器(第V群)及び平安時代土師器・須恵器(第VI群)、中世陶器・近世陶磁器(第VII群)



第28図 平安時代土師器・須恵器（第Ⅵ群）、中世陶器・近世陶磁器（第Ⅶ群）実測図

〈遺構外出土主要遺物〉

第Ⅵ群土器（第28図1～7、写真X）

平安時代に属するものである。

第28図1は土師器甕口縁部片で、口唇部は外反し表は縦位、裏は横位のハケナデを行う。2・3は内黒土師環の底部片で、横ナデを行い糸切り底。4は須恵器環口縁部片で、灰青色をなし粗い長石を含む。5～7は灰釉陶器で5・6は環、7は瓶である。

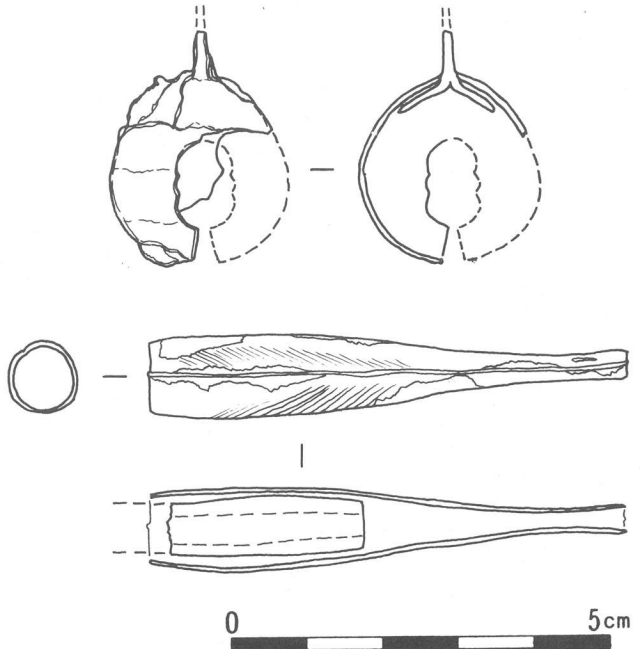
第Ⅶ群土器（第28図8～13、写真X）

室町時代以降に属するものである。

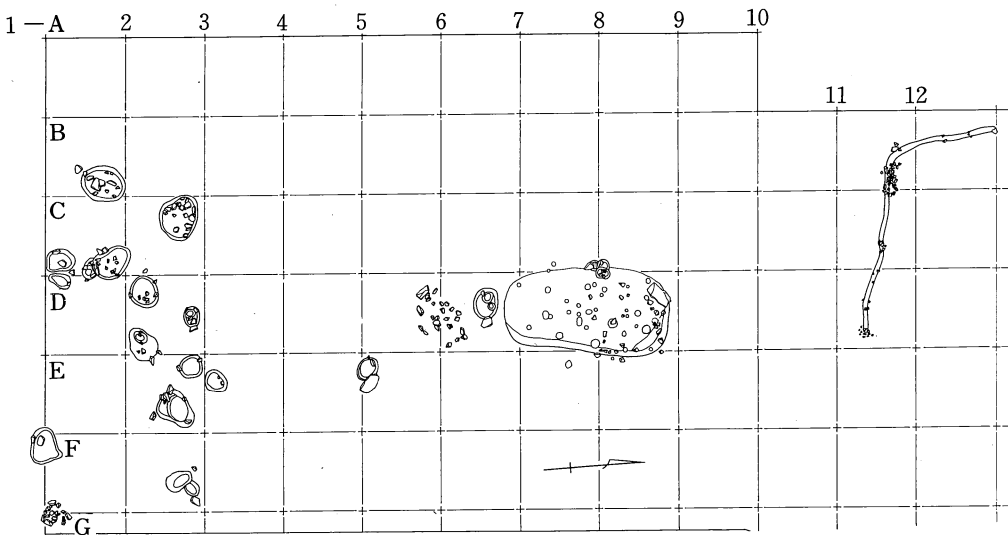
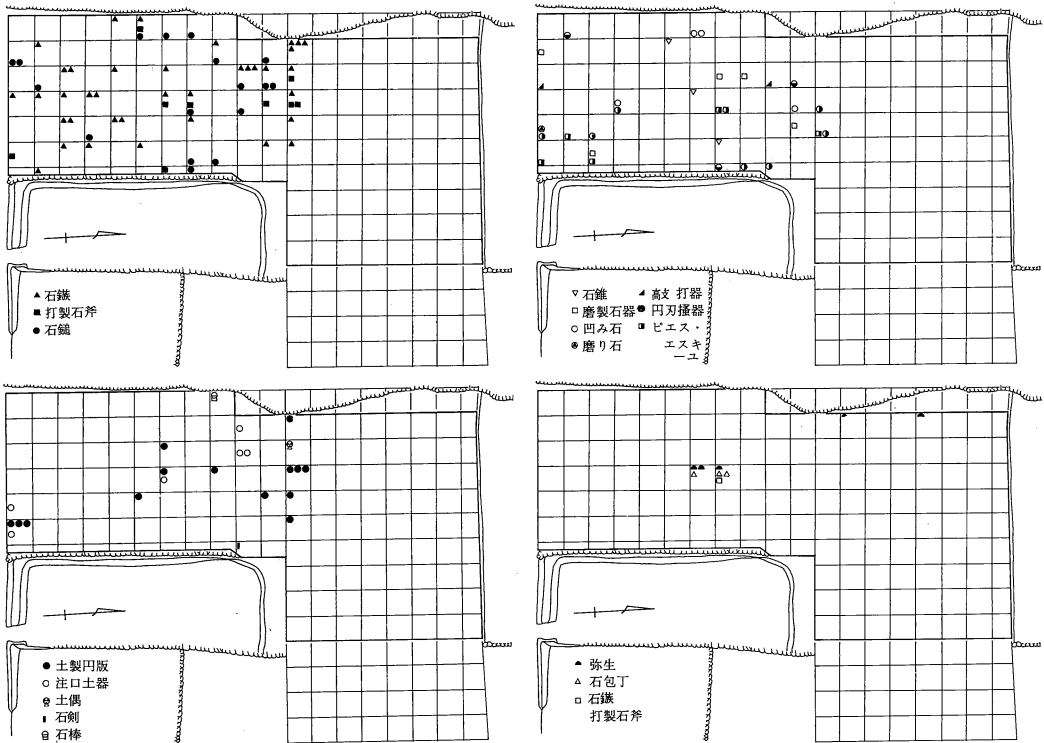
8は古瀬戸灰釉碗口縁部片で、淡緑色がかかる。10・11は碗口縁部片で、共に淡緑白色釉がかかる。9・12・13は鉄釉がかかり、9は皿、12・13はセットの蓋と環と思われる。

その他（第29図） 鉄鈴が5-C I'

層から、キセル吸口（長さ6.3 cm）一芯の竹管残存一が2-B II層上層より出土している。（小原晃一）



第29図 鉄鈴（上段）キセル（下段）実測図（ $S=1/1$ ）



第30図 第Ⅱ調査区南部分主要遺物分布図（上段4図）及び遺構配置図

- (註) 1 配石遺構の形態・分析・位置付けについては様々な現状分析・記述があり概念規定が不明瞭である。「日本考古学辞典」「日本考古学小辞典」の記載事項と、本遺跡の「配石址」「環状配石址群」の様相は異なる。環状列石、環状石籬、組石遺構、配石遺構の未分離、「配石址」―「集石址」の未分離に起因する分析は今後益々曖昧さと混乱を生じる。早急に概念規定される必要性を痛感する。本遺跡では、「大小の礫が一定の範囲と規模をもって平面的又は立体的に配され集められた遺構」と把握した。ここにも矛盾はある。自然面基盤上に構築したものの、浅く掘り込んだもの、土壙状掘り込みに詰め込んだもの、小穴を伴うもの、盤状石を伴うもの等、形態は様々である。ゆえに、概念規定への提言として、原則的ではあるが、人為的行為の痕跡に対する判断規準として「規則性」「形態分類」の明確化を挙げるものである。
- (註) 2 土壇(＝土壙)についてで、第1・2号は掲載実測図より整然としない点、第3号については2基を1基として把握した点を明記する。
- (註) 3 砂礫黄褐色土は今まで砂質ロームと筆者は呼称していたが、土壌分析的に表現すると「黄褐色土壌」「礫質土壌」の混土となる。表現を正せば、「砂礫質黄褐色土壌」となろう。高鳥谷山塊の崩落浸蝕に起因しよう。
- (註) 4 近年発行された逸書「天竜川上流域地質図」によると、東伊那火山周辺の山塊は領家変成岩類―未区分の変成岩類―董青石帯に位置付けられ、又外辺には黒雲母帯が形成されている。
- (註) 5 「半竪穴式住居」で、本遺跡より検出された第1号住居跡は傾斜地に構築され掘り込み全体が浅く、下位の西壁もないことからこの名称を付した。性格については後述する。
- (註) 6 土製円版についてで、この語彙の概念規定も不明瞭であるが、本遺跡第Ⅱ調査区南部分出土のものは、円版の全側面を磨ってあるものばかりではなく、明らかに人為的行為により5～8ヶ所打ち欠きをしている。更なる「形態分類」が必要であろう。
- (註) 7・8・9 粗製・半精製・精製土器の分類規準について、本書では、原則としてナデ・磨調整が行われぬもの―粗製、ナデと磨き調整の中間のもの―半精製、丁寧なナデか磨きを行うもの―精製として分類した。
- (註) 10 棒頭刺突とは、基本的には胴部縄文磨り消しの為の区画沈線文などを付けるのに使用したと考えられる棒状施文具と同じ施文具を用いて、口唇部及び突起部・口縁部・頸部・胴部に直に又は回転しながら円形凹痕をなすものを言う。
- (註) 11 第22図2の石鏃(3-C出土)及び土壙3号直上(3-C内)から出土したタッチのある石の質は、原色岩石図鑑によれば泥灰岩より「鳴滝岩」―京都府右京区鳴滝産―に近似する。
- (註) 12 特に弥生時代中期から後期後葉にかけて伊那谷天竜川水系から出土する「深鉢形」・甕・壺などの頸部から胴部にかけて、波状文と共に「櫛状施文具」で斜めに2cm前後条線を施すものがあり、「短線文」と呼ばれるが、その形状より「短条線文」の名称が適切と考える。
- (註) 13 弥生時代の土器セットには主として鉢・甕・壺・長頸壺・坏・高坏などと共に「深鉢」形土器も明確に遺存し呼称を省略する旨多しと言っては失言であろうか。再検討と御教示をお願いしたい。
- (註) 14～18 本書第Ⅳ群第7類A種の土器の型式分析の中で、北白川下層式(＝「桑飼下式」)・一乗寺K式・元住吉山1式(＝「井口1式」)の型式比較を行っているのは、「桑飼下遺跡発掘調査報告書」「縄文文化の研究―縄文土器Ⅱ―」を参照した由で、伊那谷全域の縄文時代後期遺跡及び遺物の領域圏の把握と関西・北陸系土器との詳細なる比較分析ではないことを明記する。
- (註) 19 網代の網み方の分析根拠であるが、縄文時代後期土器底部に施された網代の分析は様々な報告書で試みられているが、分析視点・記述において理解し易い「桑飼下遺跡発掘調査報告書」に見られる網代の編み方「経の条に対する「緯」の条の「超え」「潜り」と、「緯」の条の間の「送り」とによって分類する」という根拠と表現を活用させていただく。
- (註) 20 注口土器の形態分類に関する論文の表出があまり見られないが、凸部として注口土器注口部を把握するばかりでなく器面部及び凹部面での注口部を把握する視点として第21図8を「注口付鉢形土器」片と把握する。
(小原晃一)

第3節 第Ⅱ調査区南部分まとめ

本遺跡の内、第Ⅱ調査区南部分（同北部分については別記述する）についてのまとめとする。

南部分から検出された遺構は、縄文時代後期初頭から中葉にかけての配石址13基、土壙4基、溝址1ヶ所、焼土址1ヶ所、弥生時代中期末から後期前葉にかけての「半竪穴住居跡」1軒である。遺物では、縄文時代早期末土器片、同後期初頭～中葉の土器・石器・石製品・土製品、弥生時代中期末～後期前葉の土器・石器・石製品、平安時代の土師器・須恵器・灰釉陶器、室町時代以降の古瀬戸灰釉陶器、鉄釉陶・磁器、白色釉陶器、鉄鈴・キセル吸口（この2点の時代は不明瞭）が出土している。

遺構の内、縄文時代後期の配石址は、第1～10号の一群と単独の11・12・13号とに分けられ、1～10号を一覧すると第5号を除き長軸1.5～2m、短軸1～1.5mの不整形円形か不整楕円形に構築されている。断面形及び主軸方向は規則的でないが、主軸を東西軸・南北軸にもつものが主である。形態等において、第2・4・11が近似する点が注目される。総体的には、「掘り込みをせず大・中礫を自然の砂礫黄褐色土直上に配したもの」「浅めの掘り込みを行い盤状石を覆土又は壁に接してもち大～小礫を配したもの」「深い掘り込み（土壙状）を行い中層に中礫、上層に小礫を詰め込んだもの」「浅め目の掘り込みを行い割り石（人為的）を詰め込んだもの」の4タイプに大別できる。

さらに、第1～10号は南側（道路により破壊）にかけて孤状（「環状」）に形成される可能性もある。

遺物では、縄文時代後期土器の内、称名寺式では深鉢形土器片が少量、堀之内1～2式深鉢・鉢・浅鉢・壺・注口土器片が中量、加曾利B1～B2式深鉢（少量）・浅鉢（多量）・鉢・注口土器が他の称名寺・堀之内に比べて多く出土している。石器では、石鏃・石錘が多く、打製石斧・磨製石斧は少量である。

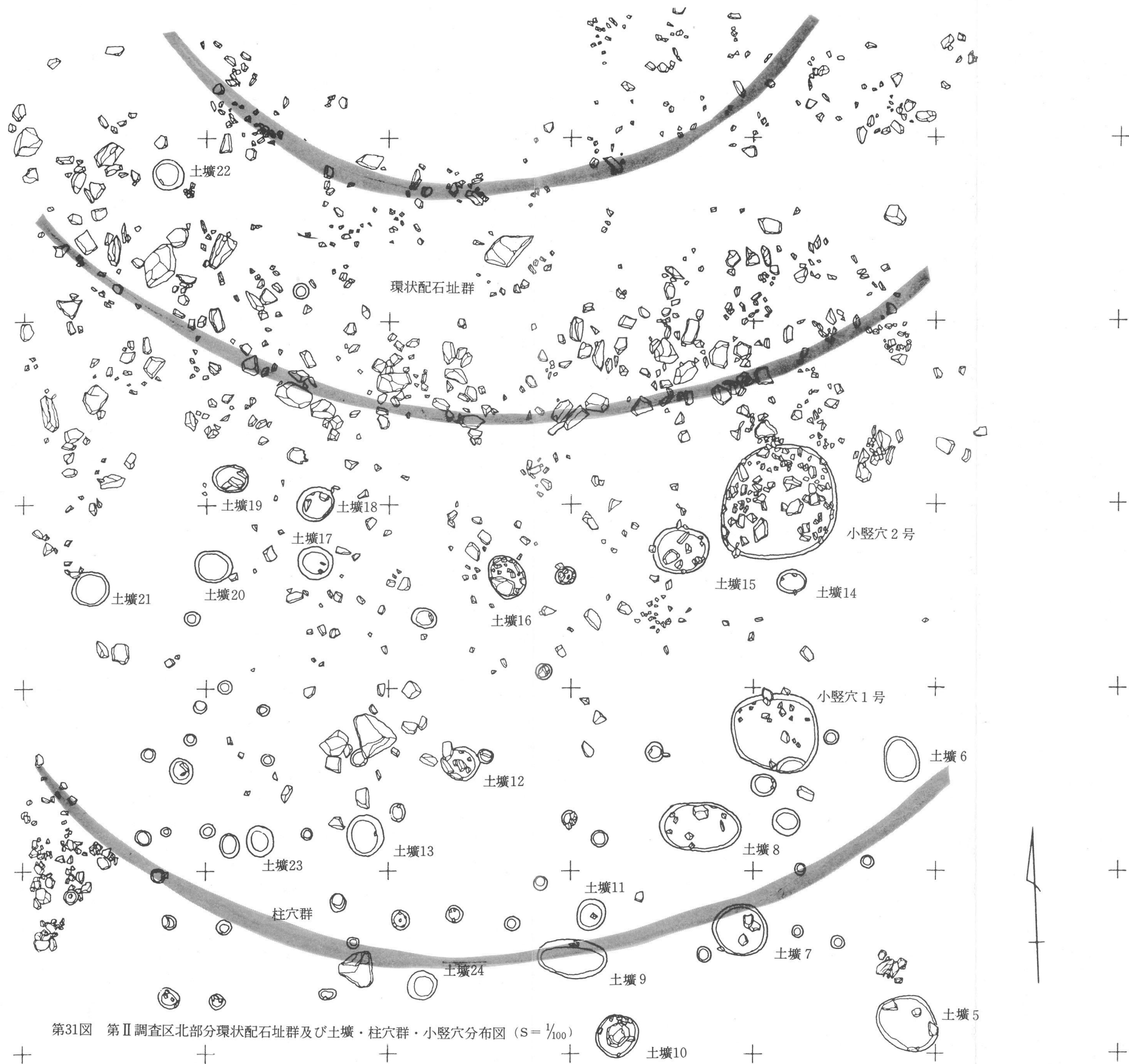
第1号住居址は、出土遺物や形態により弥生時代中期末から後期前葉にかけて存続したものと考える。当市においては、同時期の住居跡としては初めてで、同時代後期のものは、東伊那地区孤久保・栗林神社東両遺跡で発見されており、弥生時代の遺跡の分布や生産基盤を考える上で重要な遺構である。1棟の検出で論求は、先越であるが形態等から「稲作の為の出先小屋」であろうか。

平安時代及び室町時代以降の遺物は、近年に発掘された青木・青木城遺跡と密接な関連をもち特に、青木城址の周辺の生活・生産領域の存在を暗示するものである。

最後に、報告書作成に当り、辰野町郷土美術館学芸員赤羽義洋氏、奈良大学生北澤武志氏には多大なる御協力と御教示を賜り、ここに記して感謝の意を申し上げます。（小原晃一）

主要引用・参考文献

- | | |
|-----------------------------------|-----------------------------------|
| 1 「桑飼下遺跡発掘調査報告書」平安博物館、1975 | 7 「長野県中央道埋文発掘調査報告書 諏訪市その4」 |
| 2 「下北原遺跡発掘調査報告書」神奈川県教委、1977 | 県教委、1976 |
| 3 「平尾遺跡調査報告Ⅰ」南多摩郡平尾遺跡調査会、1971 | 8 「縄文文化の研究 4 縄文土器Ⅱ」雄山閣、1982 |
| 4 「東正院遺跡調査報告」神奈川県教育委員会、1972 | 9 「編年 旧石器・縄文・弥生編」千曲川水系古代文化研、1980 |
| 5 「軽井沢町茂沢南石堂遺跡」軽井沢町教育委員会、1983 | 10 「図録 石器の基礎知識 I～Ⅲ」柏書房、1981 |
| 6 「シンポジウム堀之内式土器の記録」市立市川考古博物館、1983 | 11 「長野県 上伊那誌 自然篇」上伊那誌編纂会、1962 |
| | 12 「天竜川上流域地質解説書・地質図」中部建設協会発行、1984 |



第31図 第Ⅱ調査区北部分環状配石址群及び土壇・柱穴群・小竪穴分布図 (S=1/100)

第4節 第Ⅱ調査区北部分遺構及び遺物

〈遺構〉

第Ⅱ調査区の内、北部分(約1200㎡)より第31・32図の様に小竪穴2基、土壇20基、ピット44ヶ所(内P14~16は列を構成、P20~30は柱穴址1)、配石址37基(内18~50は環状配石址を構成)が検出された。

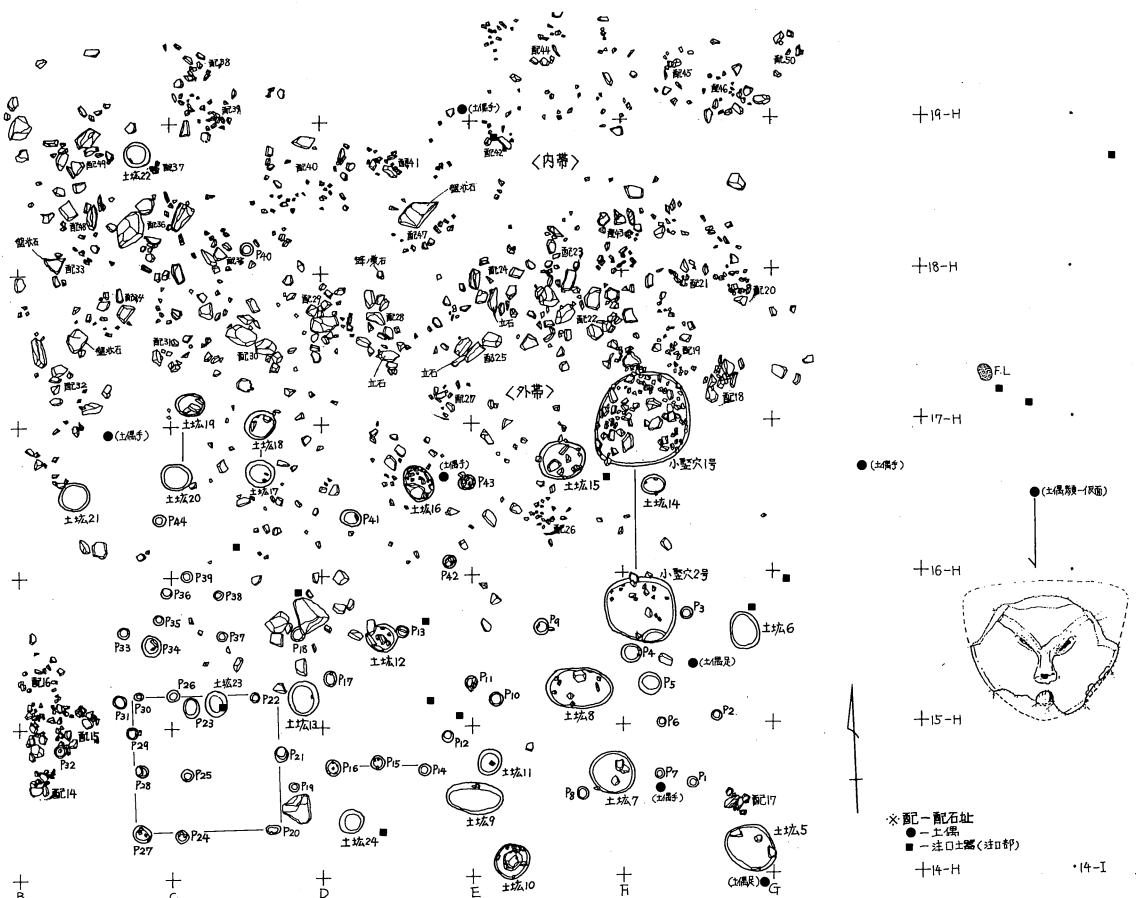
14~19-B~Hグリッド内(約450㎡)は大別して環状配石址群内帯、同外帯、土壇・ピット・小竪穴・柱穴址の3つに分けられる。

環状配石址群は全体の1/2弱の検出にとどまり、北側は耕作地として継続される為、現状保存されている。規模は推定で東西直径28~30m、南北直径26~30mのほぼ円形をなすものであろう。

仮りに土壇・ピット・小竪穴・柱穴址群が環状配石址を周るとすると直径60mの円形の遺構群となり規模としては全国的にも大規模な所に位置付けられよう。

配石址24・25・28からは立石が検出され、根詰め石も確認された。

(小原晃一)



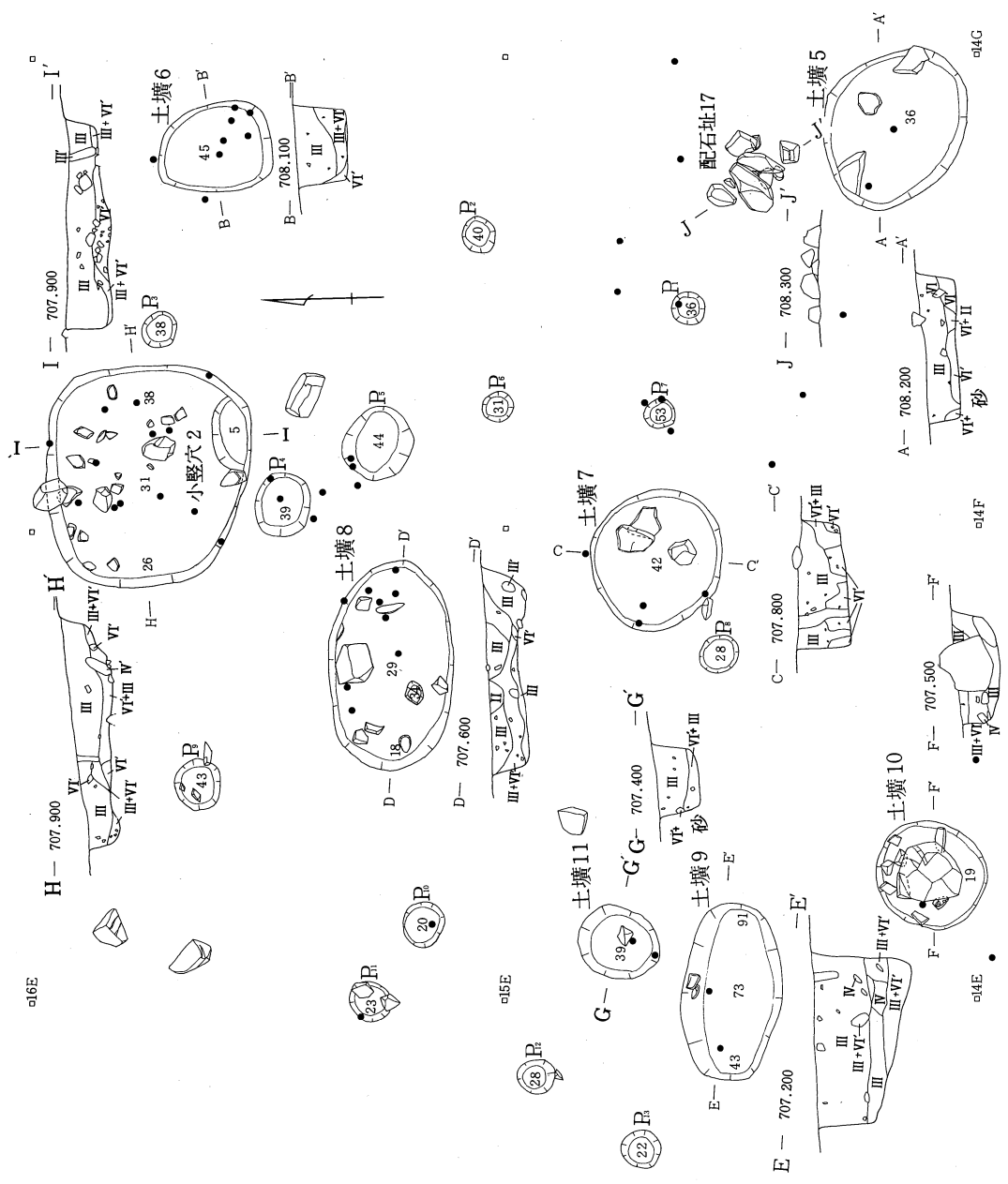
第32図 第Ⅱ調査区北部分遺構及び土偶・注口土器分布図 (S=1/200)



写真XXI 環状配石址群 (西より)

配石址一覧表

配石址	規模(cm)	平面形	主軸方向	構 造	出 土 遺 物	特 徴
14号	84×66	楕 円 形	N26°E	黒褐色土直上。	石皿状磨り石2点出土。	配石の形状は整形良好。
15	190×170	長 方 形	N5°E	黒褐色土直上。	縄文後期土器片出土。	礫重複する。ピットあり。
16	128×85	楕 円 形	N3°E	黒褐色土直上。	縄文後期土器片出土。	小礫を配す。
17	90×73	ひ し 形	N64°W	暗茶褐色土直上。	周辺より縄文後期土器片出土。	礫重複する。
18	120×80	長 方 形	N32°E	暗茶褐色土直上。	周辺より縄文後期土器片出土。	大礫を両端に配し、整形良好。
19	142×122	不 整 円 形	N16°W	暗茶褐色土直上。	周辺より縄文後期土器片出土。	
20	142×78	長 方 形	N13°W	掘り込みなし。砂礫黄褐色土直上。		両端に中礫を配す。
21	80×74	円 形	N31°E	掘り込みなし。砂礫黄褐色土直上。		
22	280×230	不 整 円 形	N32°W	砂礫黄褐色土(北半分)、暗茶褐色土(南半分)直上。二つの配石址か。	縄文後期土器片出土。	中・大礫を大規模に配す。
23	178×136	楕 円 形	N20°E	掘り込みなし。砂礫黄褐色土直上。		東側に大礫、中央に礫集中。
24	166×146	不 整 円 形	N51°W	暗茶褐色土(南半分)、砂礫黄褐色土(北半分)直上。立石あり。		大礫により構成される。
25	152×66	三 角 形	N60°E	暗褐色土直上。立石あり。根詰め石遺存。	縄文後期土器片出土。	立石+大礫3個。
26	112×96	円 形	N23°E	暗茶褐色土直上。	東側に縄文後期土器片集中。	小礫により構成される。
27	82×58	長 方 形	N40°W	暗茶褐色土直上。	縄文後期土器片出土。	小・中礫により構成される。
28	238×134	楕 円 形	N17°W	暗茶褐色土直上。南に立石を伴なう。北側に跡ノ墓石あり。		大礫を列状に配す。
29	196×160	楕 円 形	N3°E	暗茶褐色土直上。	周辺より縄文後期土器片出土。	中心に大礫を配す。
30	263×140	半 楕 円 形	N55°W	暗茶褐色土直上。		大礫を列状に配す。
31	190×108	楕 円 形	N78°W	暗茶褐色土直上。		西側に大礫を配す。
32	158×132	円 形	N25°E	暗茶褐色土直上。		中心部礫なし。
33	90×60	長 方 形	N6°E	暗茶褐色土直上。		中心に三角盤状石を配す。
34	210×140	楕 円 形	N47°E	暗茶褐色土直上。盤状石を伴なう。	周辺より縄文後期土器片出土。	両端に大礫を配す。
35	122×114	円 形	N27°W	暗茶褐色土直上。	周辺より縄文後期土器片出土。	中心の列に3個の中礫を配す。
36	208×140	長 方 形	N32°E	暗茶褐色土直上。	縄文後期土器片出土。	大礫を両端に配す。
37	34×28	円 形	N18°E	砂礫黄褐色土直上。7個の小礫により構成される。		最小規模。
38	84×78	円 形	N33°E	砂礫黄褐色土直上。		両端に柱状石を配す。
39	130×84	楕 円 形	N65°W	砂礫黄褐色土直上。		西側に柱状大礫を配す。
40	240×205	円 形	N11°E	砂礫黄褐色土直上。	南側より縄文後期土器片出土。	北半分は大礫、南半分は小礫配す。
41	110×86	不 整 円 形	N20°W	掘り込みなし。砂礫黄褐色土直上。		
42	108×72	楕 円 形	N42°W	掘り込みなし。砂礫黄褐色土直上。		
43	228×146	楕 円 形	N86°E	掘り込みなし。砂礫黄褐色土直上。		北側に大礫、南に小礫群あり。
44	112×85	円 形	N33°E	掘り込みなし。砂礫黄褐色土直上。		
45	135×80	不 整 楕 円 形	N23°E	掘り込みなし。砂礫黄褐色土直上。	周辺より縄文後期土器片多く出土。	
46	180×75	楕 円 形	N76°E	掘り込みなし。砂礫黄褐色土直上。		中礫を両端に配す。
47	172×146	円 形	N32°E	掘り込みなし。砂礫黄褐色土直上。		大礫を中心に、周りへ小礫配す。
48	186×128	楕 円 形	N77°E	暗茶褐色土直上。		中心に盤状石を配す。
49	148×118	長 方 形	N44°E	砂礫黄褐色土直上。		北側に大礫を配す。
50	88×60	楕 円 形	N58°W	掘り込みなし。砂礫黄褐色土直上。		中礫を両端に配す。



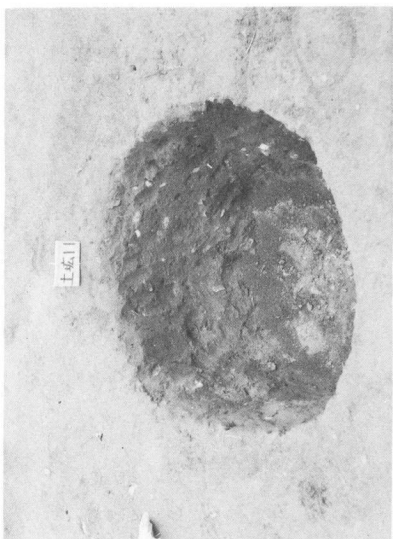
第33図 土壇 5～11、小竪穴 2、ピット群実測図 (S=1/60)



1 土壙8号



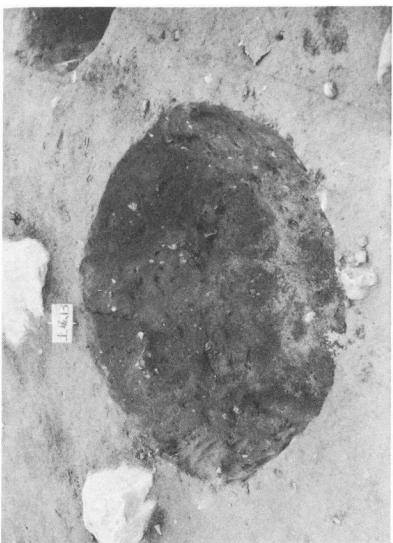
2 土壙9号



3 土壙11号



4 土壙12号



5 土壙13号

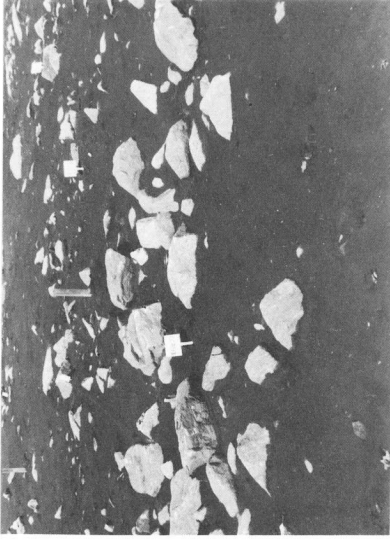


6 小竖穴2号

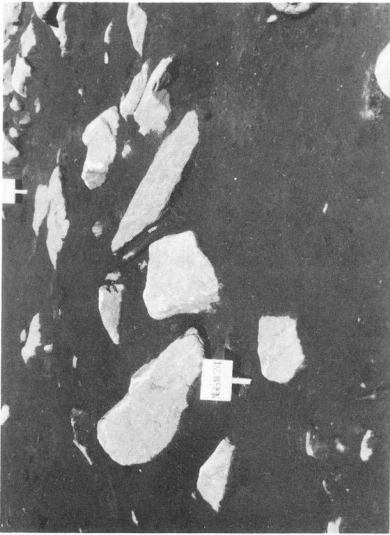
写真XXII 土壙及び小竖穴



1 配石址20



3 配石址22



5 配石址24



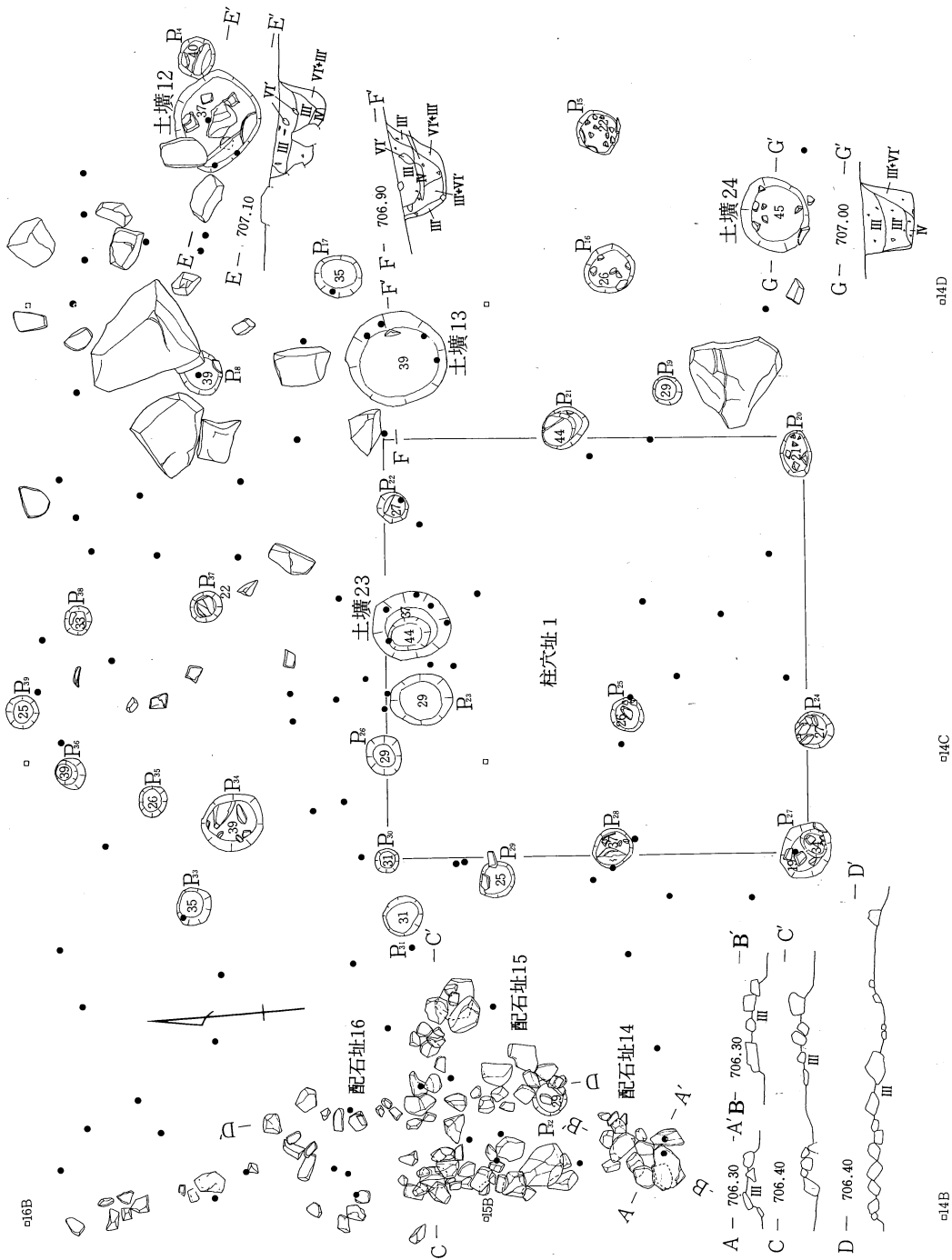
2 配石址18



4 配石址19



6 配石址26



第34図 土壙12・13・23・24、柱穴址1、配石址14~16、ピット群実測図 (S=1/60)



第35图 土壙14·15、小竖穴1、配石址18~20、22·24·26实测图 (S=1/60)



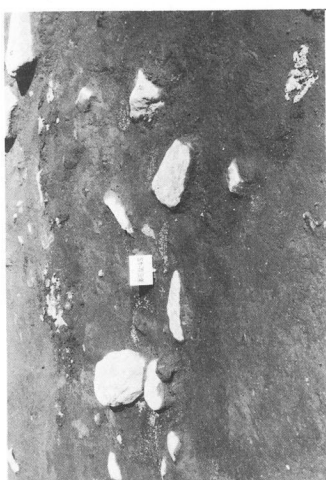
1 配石址50



2 配石址46



3 配石址21



4 配石址45



5 配石址43



6 配石址23



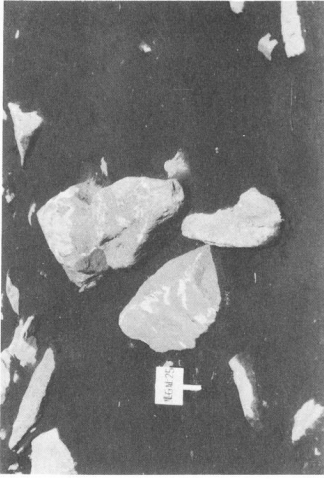
7 配石址44



8 配石址41



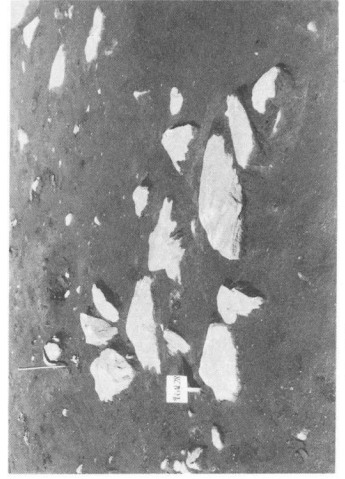
9 配石址47



1 配石址:25



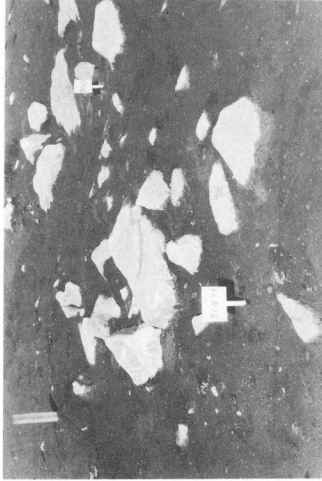
2 配石址:27



3 配石址:28



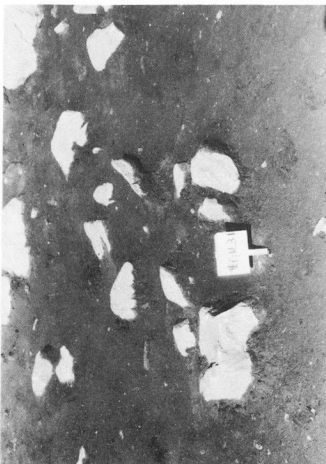
4 配石址:30



5 配石址:29



6 峰ノ巣石 (配石址:28北辺)



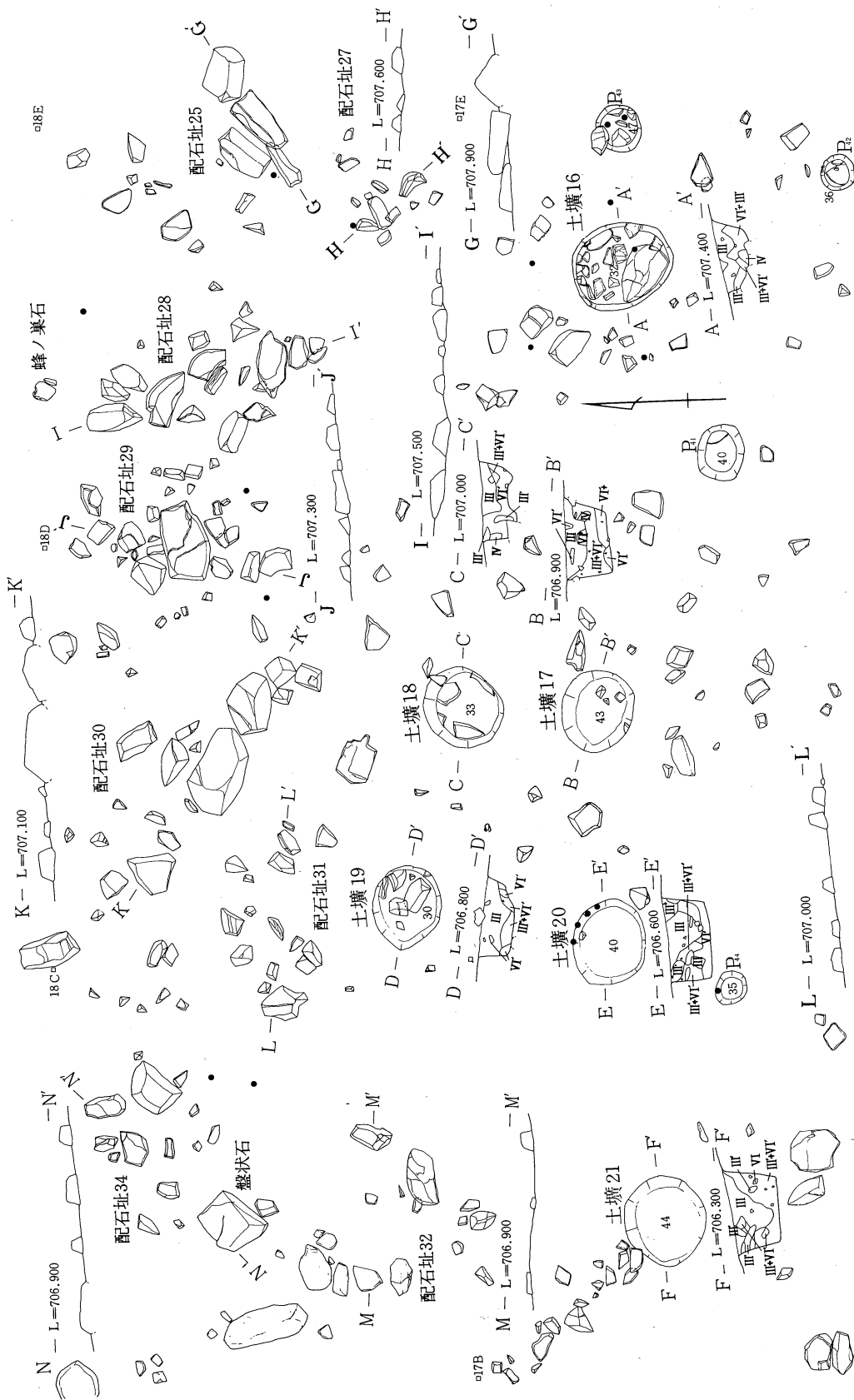
7 配石址:31



8 配石址:32



9 配石址:34



第36图 土壇16~21、P41~44、配石址25・27~32・34実測図 (S=1/60)



第37图 土壙22、P40、配石址33·35·37~40、48·49实测图 (S=1/60)



1 配石址40



2 配石址39



3 配石址35



4 配石址38



5 配石址37



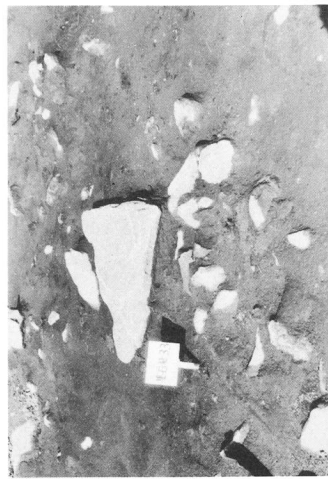
6 配石址36



7 配石址49



8 配石址48



9 配石址33



1 配石址24 (立石穴)



2 配石址25 (立石穴)



3 配石址28 (立石穴)



4 配石址24・25・28立石復元状態



5 環状配石址群全景

6 環状配石址群近景



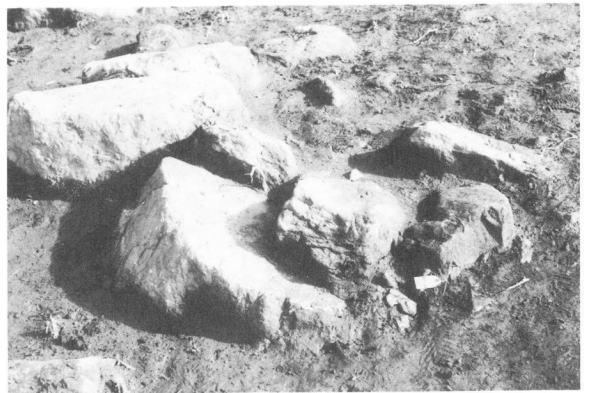
写真 XXVII 配石址及び立石復元状態



第38图 配石址21·23·42~47·50实测图 (S=1/60)



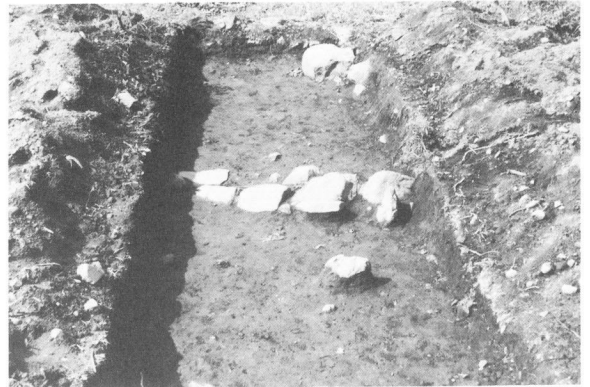
1 遺物出土状態 (配石址45周辺)



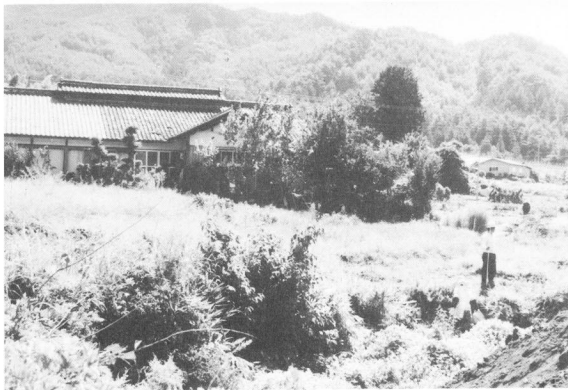
2 遺物出土状態



3 1-Tr 全景 (東より)



4 2-Tr 全景 (東より)



5 権現の泉全景 (北西より)



6 権現の泉近景

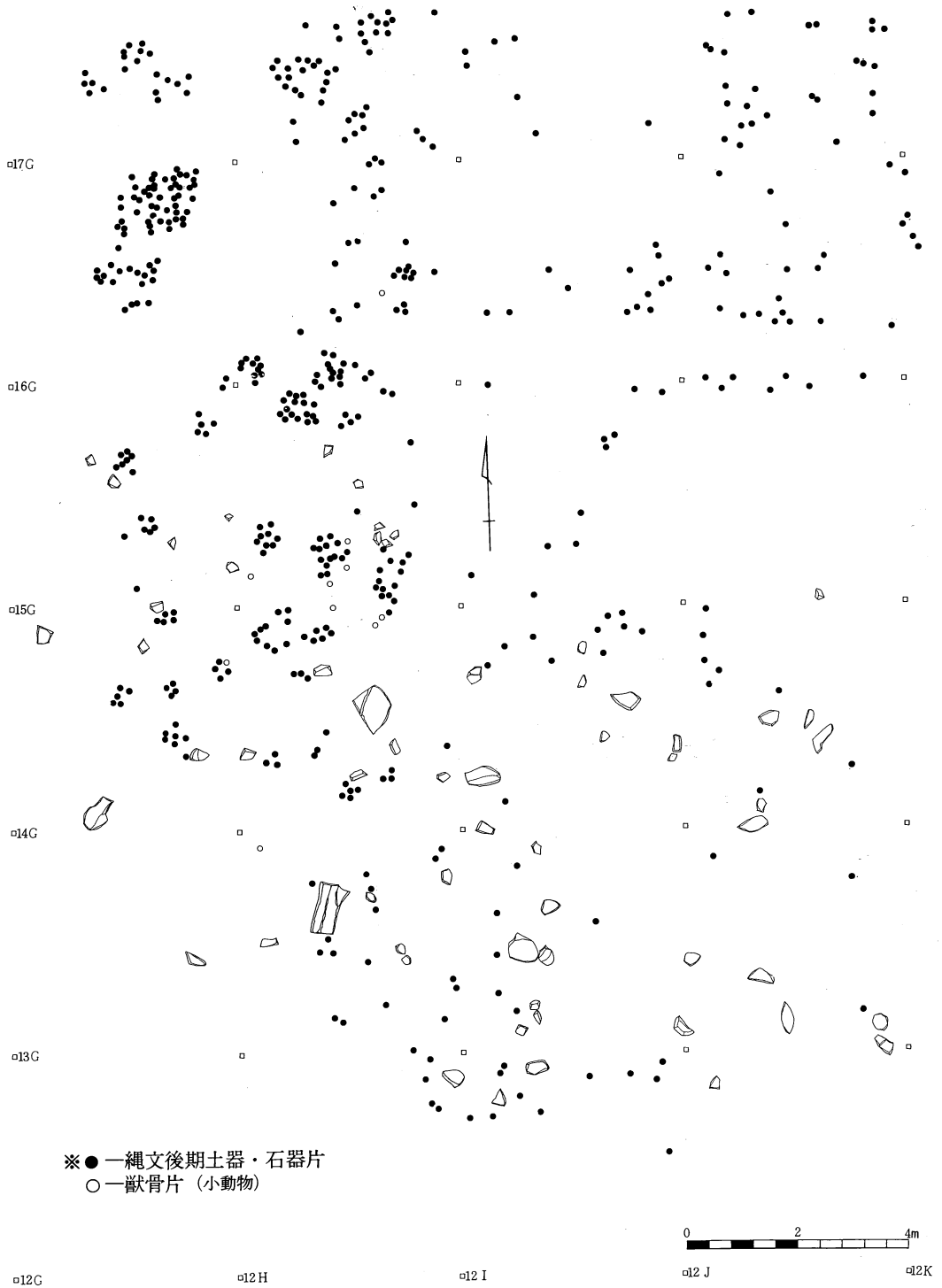


7 埋没保存風景



8 調査団一同

写真 XXVIII 遺物出土状態、1・2-Tr、権現の泉、埋没保存風景、調査団一同



第39図 12~17-G~Kグリット遺物出土状態実測図 (S=1/120)

土壙・小竪穴一覧表

土壙	規模	深さ	平面形	断面形	特徴	出土遺物
5	144×118	36	楕円形	タライ状	覆土直上に礫を伴う。	後期土器片2
6	96×75	45	〃	鉢状	壁直に近い。	土器片8
7	122×112	42	円形	タライ状	底面傾斜。	土器片4
8	178×106	29	長円形	〃	底面凹凸著しい。	土器片、石器片
9	150×85	91	〃	鉢状	底面強く傾斜。	土器片2
10	93×88	19	円形	舟底状	底面丸い。	土器片1
11	71×58	39	〃	鉢状	底面やや丸し。	土器片2
12	77×73	37	〃	〃	底面やや丸し。	土器片3
13	85×82	39	〃	〃	底面丸し。	土器片4
14	63×53	33	楕円形	〃	底面丸し。	土器片1
小竪穴1	247×245	33	不整形	皿状	小礫が、東・西壁に集中。	土器片16
15	119×102	21	円形	タライ状	礫多し。底面丸し。	土器片6
16	97×80	32	楕円形	舟底状	大礫・中礫多し。	土器片1
17	78×69	43	円形	鉢状	底面に小礫あり。	
18	81×68	33	〃	〃	底面に大礫あり。	
19	76×66	30	〃	〃	底面に大礫あり。	
20	78×72	40	〃	〃	壁直に近し。	土器片4
21	86×79	44	〃	〃	底面平担。	
22	71×67	25	〃	〃	底面小礫多し。	
23	68×58	44	〃	〃	中段をもつ。	土器片5
24	68×58	45	〃	〃	底面小礫あり。	
小竪穴2	186×172	38	不整形	皿状	南壁に小穴あり。底面凹凸。	土器片10

ピット一覧表

ピット	規模	深さ	平面形	断面形	特徴	出土遺物
1	28×27	36	円形	柱状		後期土器片1
2	30×29	40	〃	〃		
3	32×30	38	楕円形	〃		
4	54×46	39	〃	鉢状		後期土器片2
5	60×54	44	〃	〃		後期土器片2
6	27×25	31	円形	柱状		
7	26×25	53	〃	〃		後期土器片1
8	36×32	28	〃	鉢状		
9	43×38	43	〃	〃		
10	38×35	20	楕円形	〃		後期土器片1
11	35×32	23	円形	〃	壁に中礫あり。	後期土器片1
12	32×29	28	〃	柱状		
13	33×31	22	〃	鉢状		
14	34×31	40	〃	〃	底面に自然の大礫あり。	
15	38×35	22	〃	〃	底面に自然の小礫多し。	
16	44×41	26	〃	〃	底面に自然の小礫多し。	
17	42×36	35	楕円形	タライ状		後期土器片1
18	(40)×35	39	〃	〃	北東壁に大礫あり。	後期土器片1
19	25×24	29	円形	柱状		
20	41×27	21	楕円形	タライ状	底面に小礫あり。	
21	43×34	44	〃	鉢状	中段あり。底面に大礫あり。	
22	28×25	27	円形	柱状	底面に大礫あり。	後期土器片1
23	54×45	29	楕円形	タライ状		
24	34×32	27	円形	鉢状	壁に中礫あり。	
25	29×29	26	〃	〃	底面に礫あり。	
26	34×30	29	楕円形	〃		
27	21×21	31	円形	柱状		
28	35×33	37	〃	鉢状	底面に大・小礫あり。	後期土器片2
29	36×32	25	〃	〃	壁に中礫あり。	
30	21×21	31	〃	柱状		
31	36×33	31	〃	鉢状		
32	32×31	29	〃	〃	壁・底面に小礫あり。	
33	33×29	35	楕円形	〃		後期土器片1
34	54×50	39	円形	〃	底面に大・中礫あり。	
35	27×24	26	楕円形	柱状		
36	27×27	39	円形	〃	壁傾斜。	
37	29×27	22	〃	〃	底面に大礫あり。	
38	25×24	33	〃	〃	底面に小礫あり。	
39	29×29	25	〃	〃		
40	36×36	28	〃	鉢状	底面に小礫あり。	
41	53×44	40	楕円形	〃	底面に大礫あり。	
42	35×32	36	円形	〃	底面に大礫あり。	
43	46×41	47	〃	〃	壁・底面に中礫あり。	
44	34×30	35	楕円形	〃		後期土器片1
45						

〈遺物〉

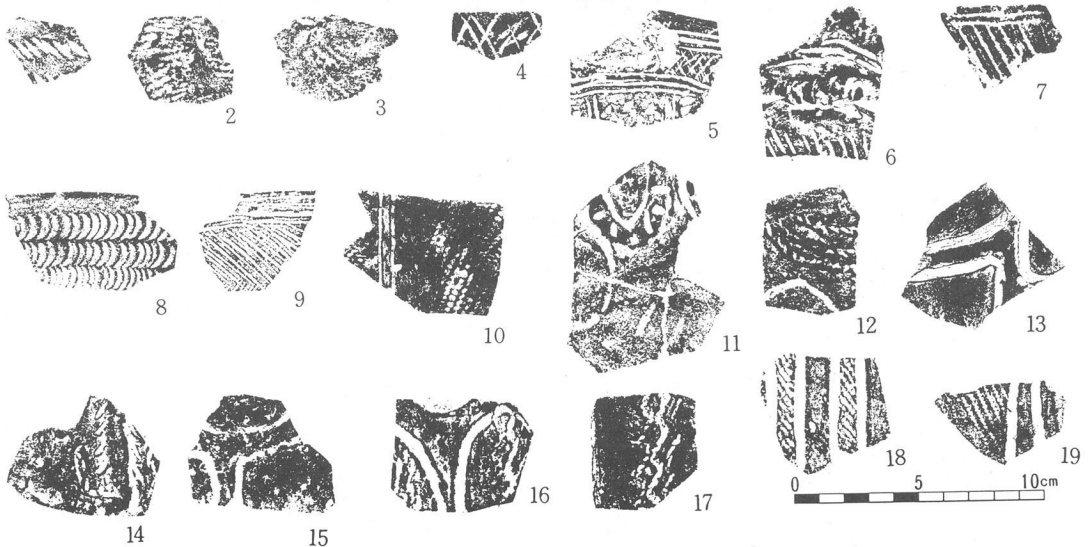
第Ⅱ群土器（第40図1～4）1一爪形文、2・3一R L縄文、4一格字文をもつ。1は若干繊維を含み、2・3は粗い長石・石英、4は細く堅い胎土である。縄文前期前半に位置する。

第Ⅲ群土器（第40図5～19）5～7一半截竹管による平行沈線文と格子文、8一連続爪形文、9一ヘラ先で横位平行沈線文と「く」の字文、10一縦位平行沈線文とL R縄文、11一櫛形文と沈線、12・13一隆帯とヘラ先の列点文、14一器台付で隆帯と列点文、15～17一隆帯と結節縄文、18・19一R L縄文と縦位沈線をもつ。5～10は縄文中期初頭、11は中葉、12～19は後半に位置する。

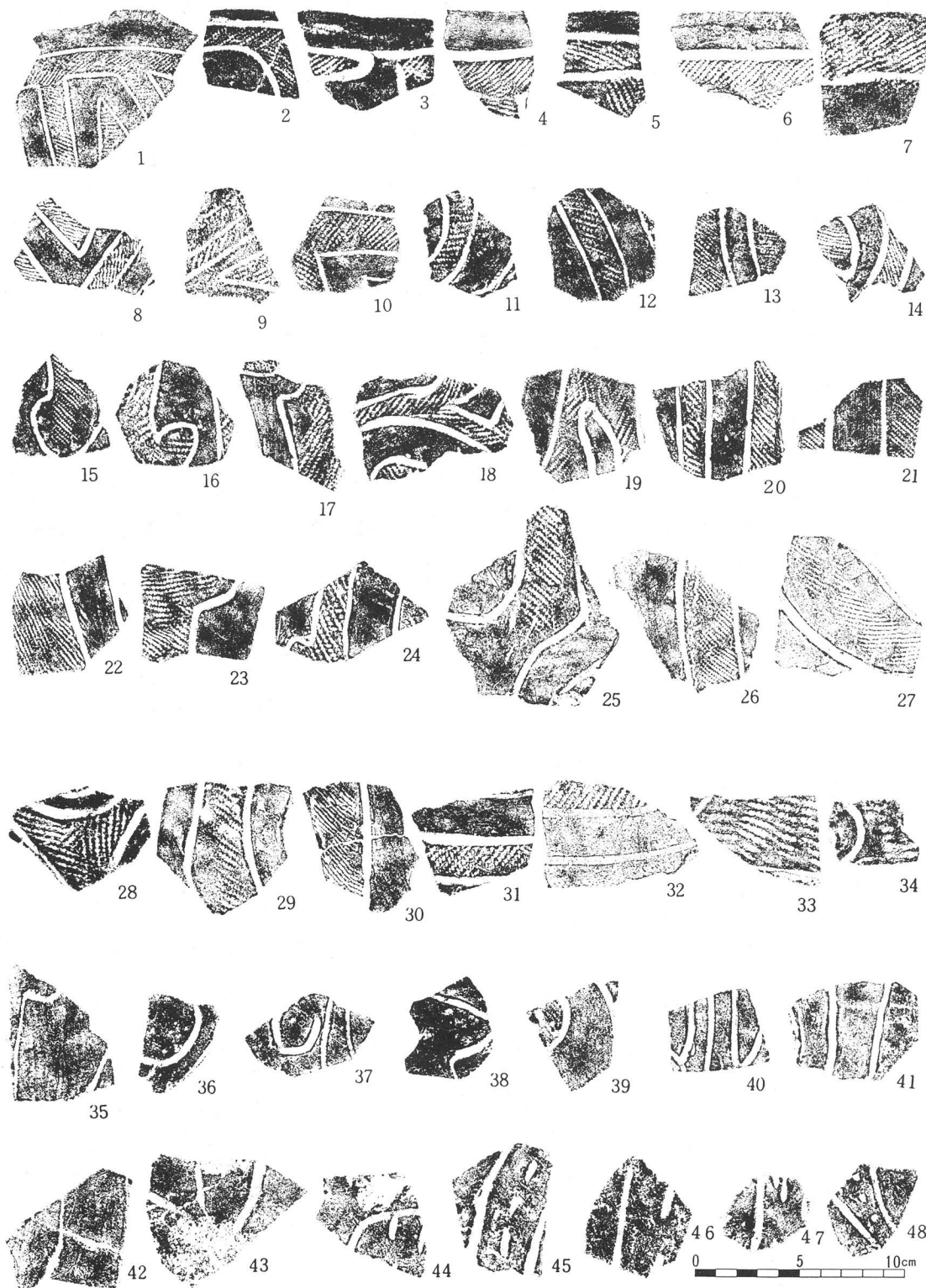
第Ⅳ群土器（第41～53図）第41図一第1類A種（称名寺1・2深鉢形土器）、第42図一第2・3類A種（堀之内1・2深鉢形土器）、第43図一第2・3類B種（堀之内1・2鉢形土器）、第44図一第2・3類A種（堀之内1・2深鉢形土器）、B種（堀之内1・2鉢形土器）、第45図一第2・3類B・C種（堀之内1・2鉢形～浅鉢形土器）、第7類A・B種（林ノ峰貝塚Ⅰ、三十稻場系深鉢・鉢形土器）、第46図一第6群（堀之内系無文深鉢形土器、同縄文地文深鉢形土器）、第47図一第4・5類A種（加曾利B1～2深鉢形土器）、第48図一第4・5類B種（加曾利B1～2鉢形土器）、同C種（加曾利B1～2浅鉢形土器）、同D種（加曾利B2壺形土器）、同釣手土器、第49図一第4・5類D・E種（加曾利B1～2壺形土器及び注口土器）、同土偶（「仮面付土偶顔面」、手、足）、第50図一第7類A種（桑飼下、林ノ峰貝塚Ⅰ系深鉢形土器）、第51図一第7類A種（桑飼下、北白川上層、林ノ峰貝塚Ⅰ系深鉢形土器）、同B種（林ノ峰貝塚Ⅰ、井口系鉢形土器）である。主体は、堀之内1・2式土器が多く、称名寺、加曾利B1、同B2若干の順である。

第Ⅳ群に伴う石器（5～60図）第55図一小・中形打製石斧、第56図一大形打製石斧、第57図一小・中形石錘、第58図一大形石錘、第59図一大形・切目石錘、第60図一石鏃、ピエスエスキ－1がある。なお、写真XXXIV-3に掲載の磨製石斧、石製品、スクレイパー、石槍も出土。

第Ⅵ・Ⅶ土器 写真XXXIII-6の土師器、須恵器、灰釉、古瀬戸灰釉、青磁、近世陶器が出土。

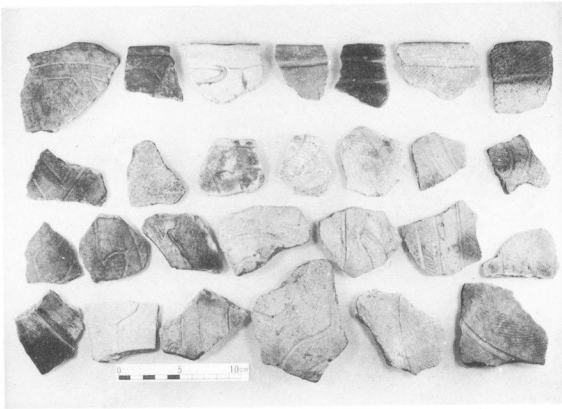


第40図 第Ⅱ・Ⅲ群土器拓影図〈縄文前期・中期〉(S=1/3)

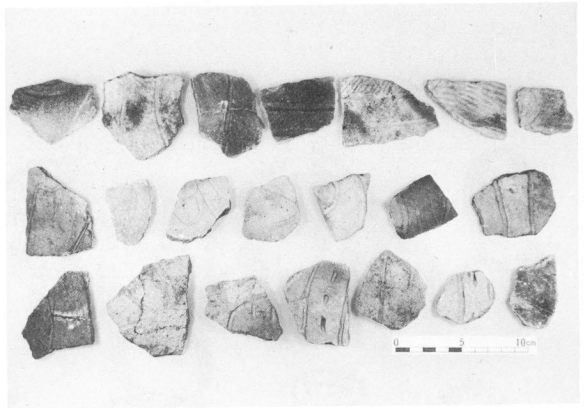


第41图 第IV群第1类土器拓影图<称名寺> (S=1/3)

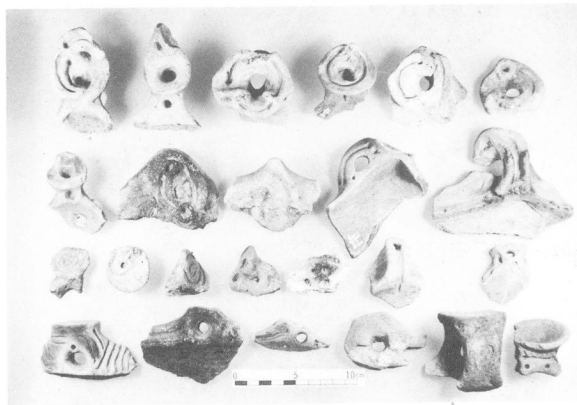
1 第IV群第1類 (称名寺)



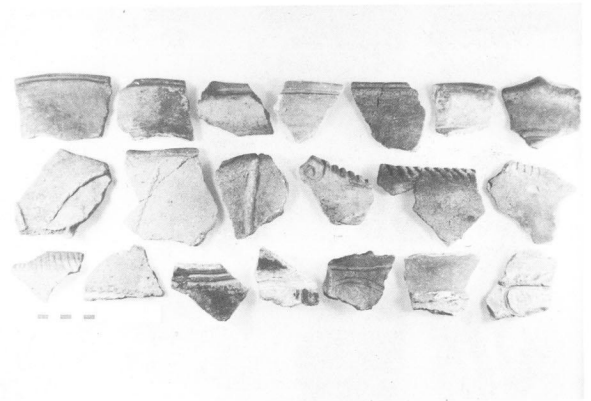
2 第IV群第1類 (称名寺)



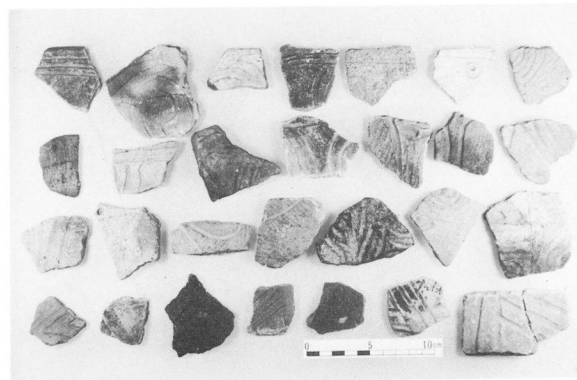
3 第IV群第2・3類A種突起部



5 第IV群第2・3類B種口縁部・頸部



4 第IV群第2・3類A種口縁・胴部



6 第IV群第2・3類B種胴部

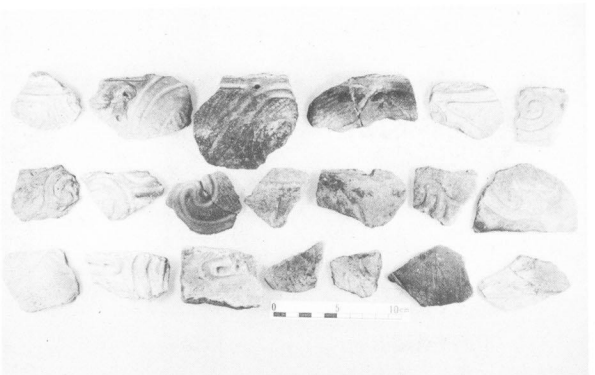
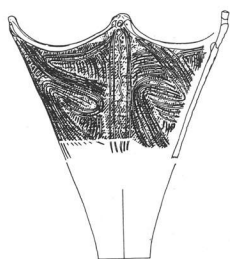
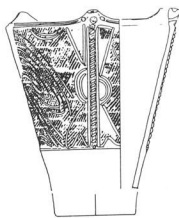


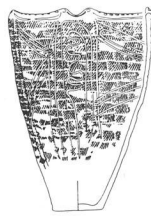
写真 XXIX 第IV群第1・2・3類土器 (称名寺・堀之内)



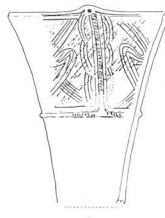
伊皿子遺跡出土



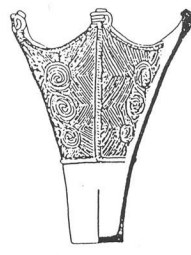
伊皿子



伊皿子

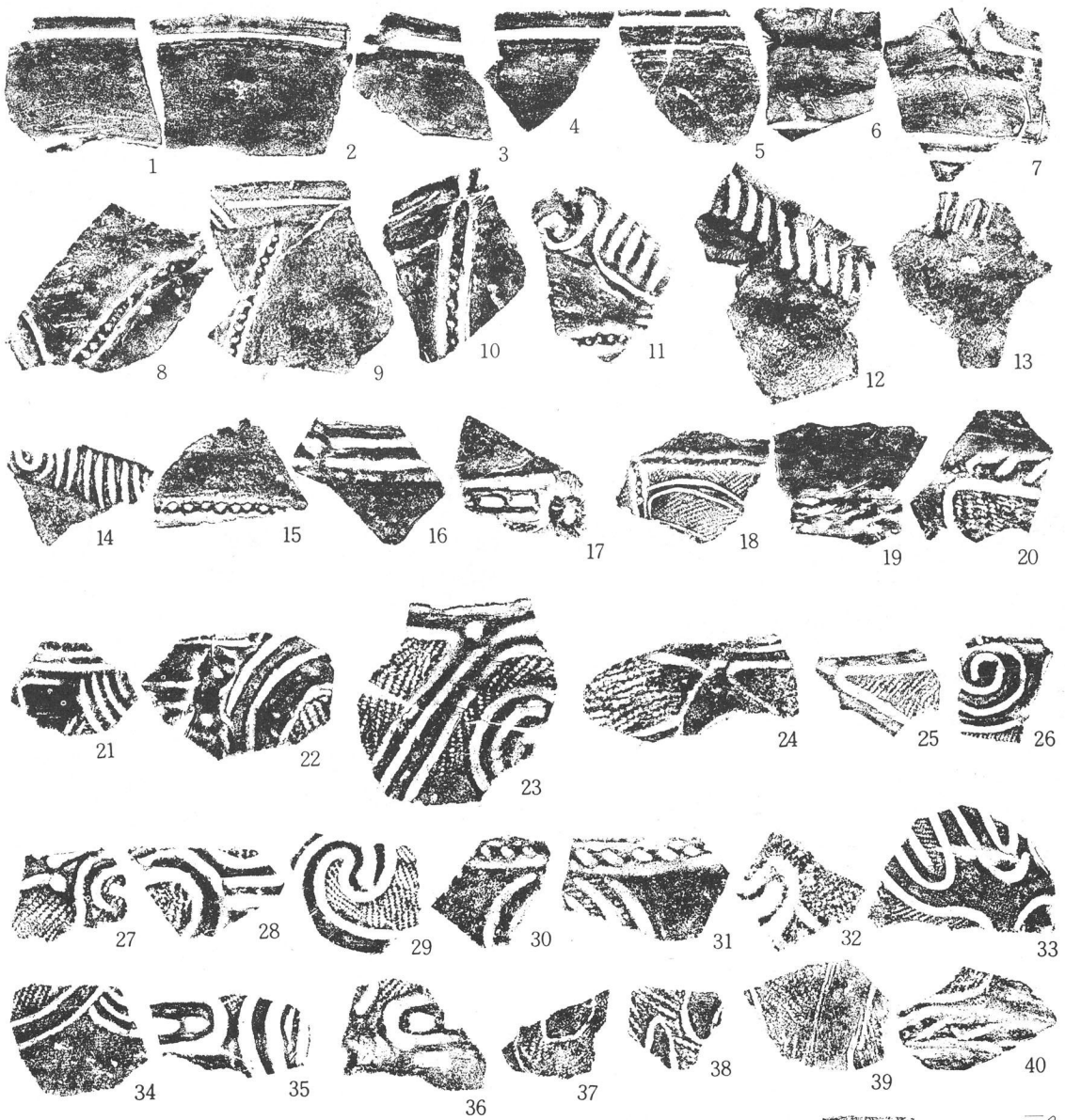


貝の花遺跡

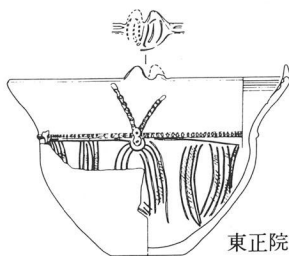


堀之内遺跡

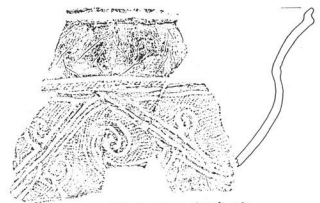
第42図 第IV群第2・3類A種<堀之内>土器拓影図 (S=1/3)



岳の上遺跡出土



東正院遺跡



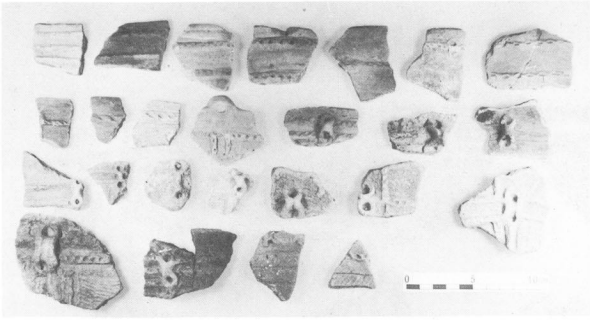
茂沢南石堂遺跡



同上

第43図 第IV群第2・3類B種<堀之内>土器拓影図 (S=1/3)

1 第IV群第2・3類A種口縁部・頸部



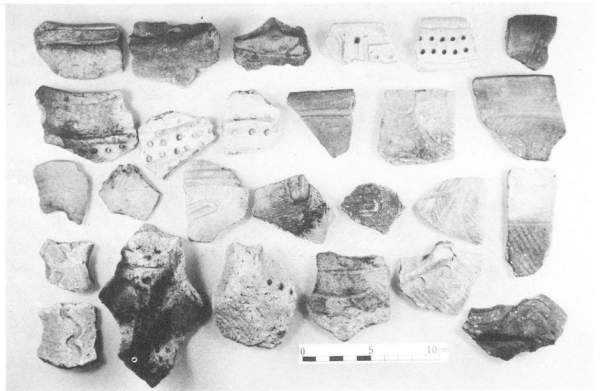
2 第IV群第3類B種口縁部



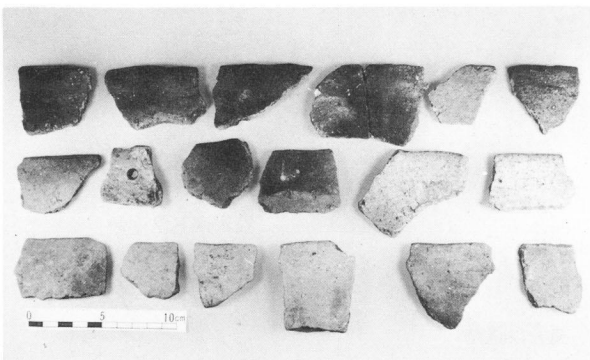
3 第IV群第7類A・B種土器



4 第IV群第7類C・B・D・A種土器



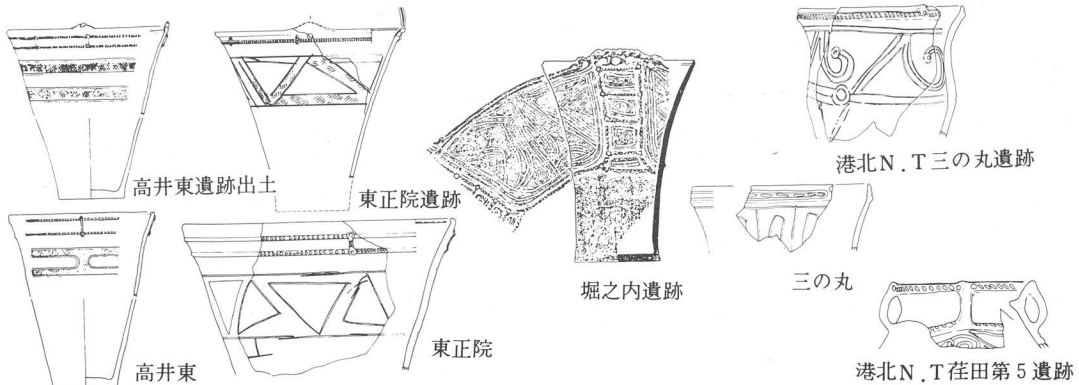
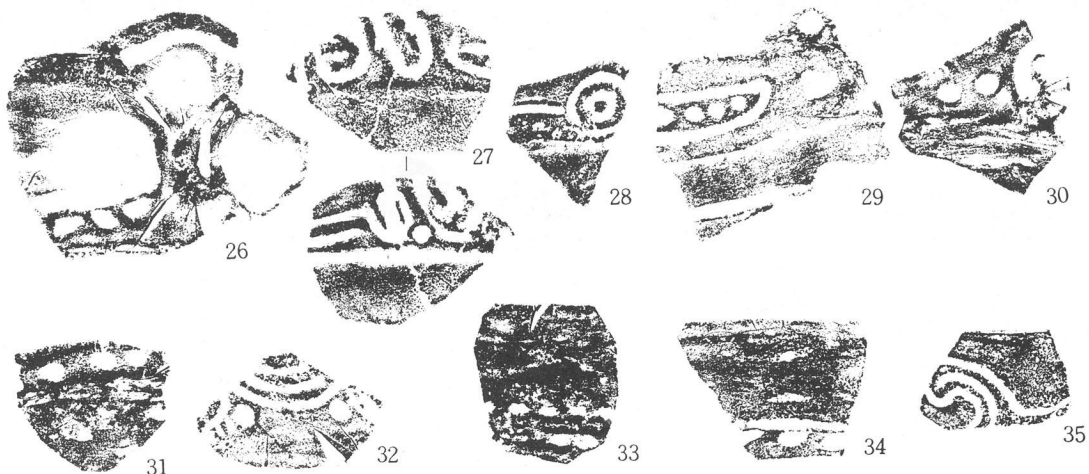
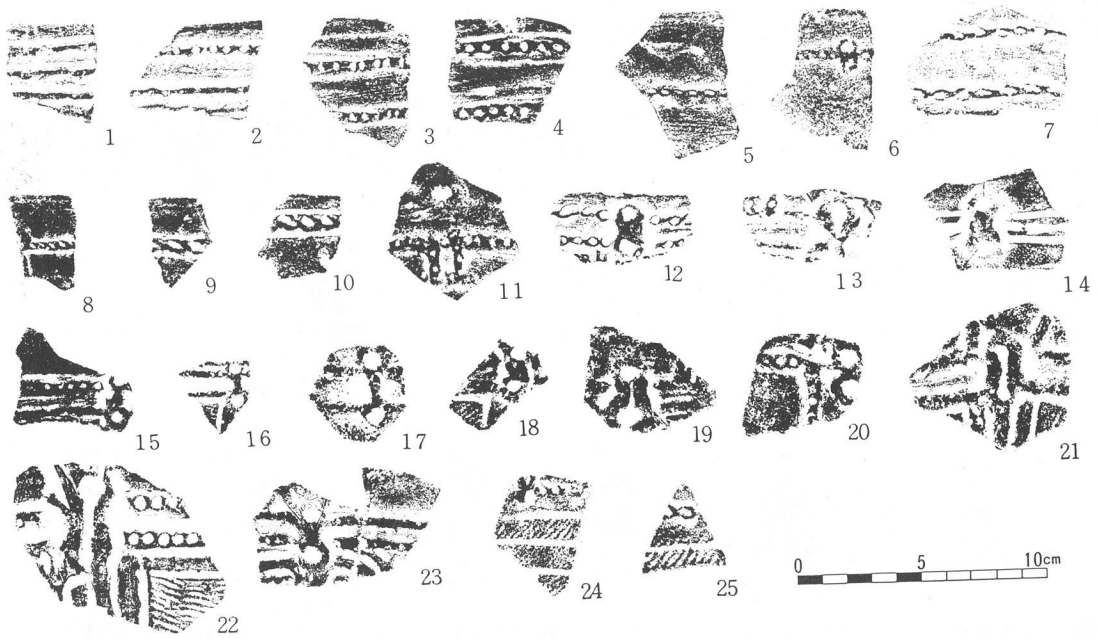
5 第IV群第6類土器



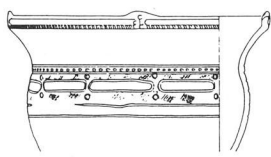
6 第IV群第6類第2・3種土器



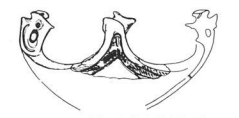
写真 XXX 第IV群第2・3・6・7類土器



第44図 第IV群第2・3類A・B種土器<堀之内>拓影図 (S=1/3)



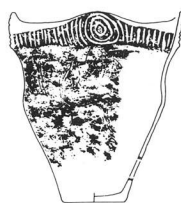
下北原遺跡出土



林ノ峰貝塚I遺跡



港北N.T荏田第5遺跡

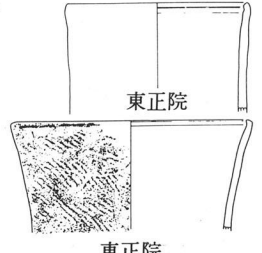
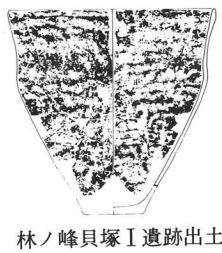
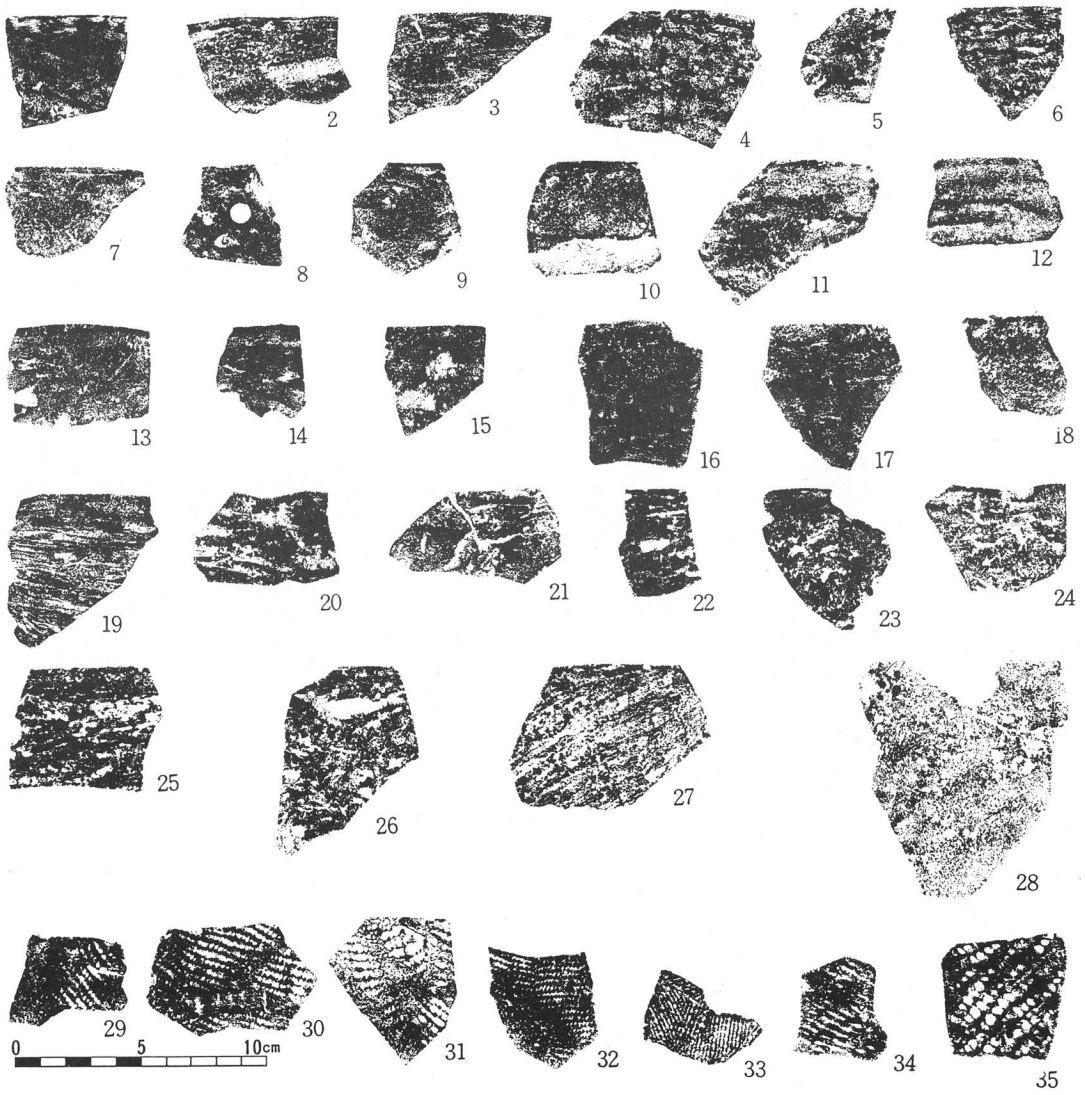


林ノ峰貝塚I



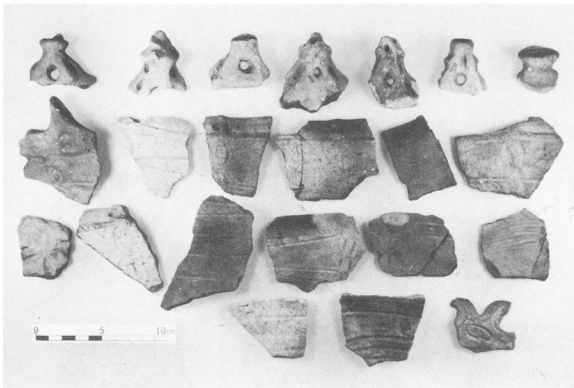
林ノ峰貝塚I

第45図 第IV群第2・3・7類A・B・C・D種土器拓影図 (S=1/3)

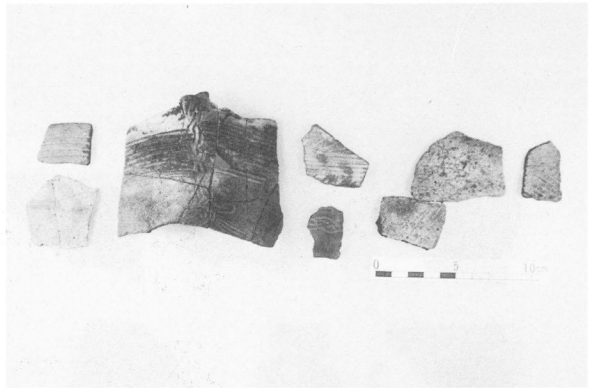


第46図 第IV群第6類第2・3類(縄文)土器拓影図 (s=1/3)

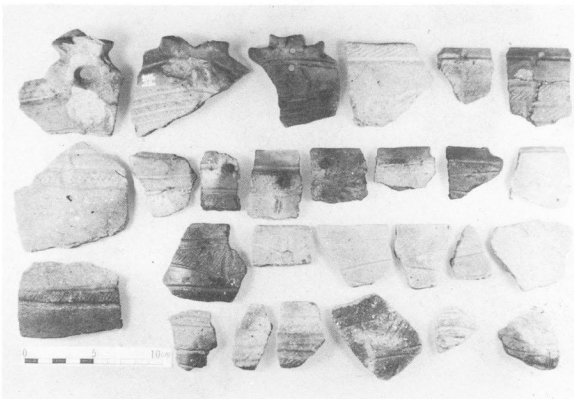
1 第IV群第4・5類A種土器<加曾利B>



2 第IV群第4・5類A種土器



3 第IV群第4・5類B種土器(表)



4 同左(裏)



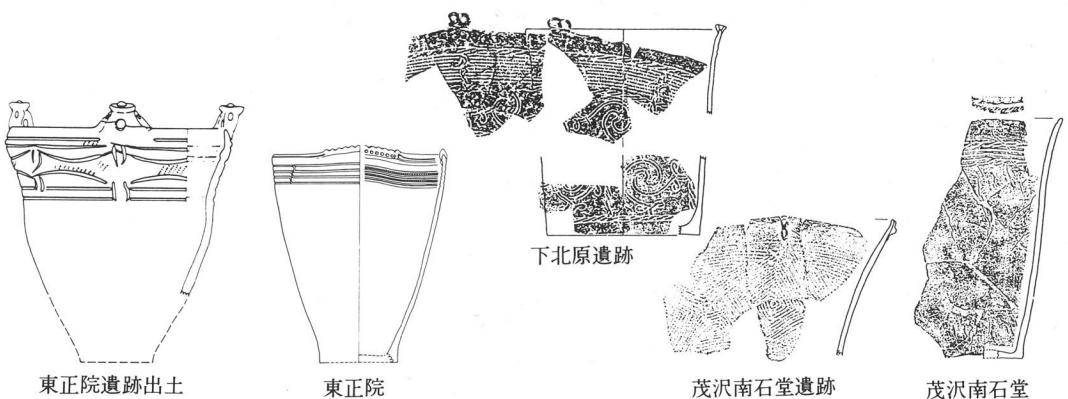
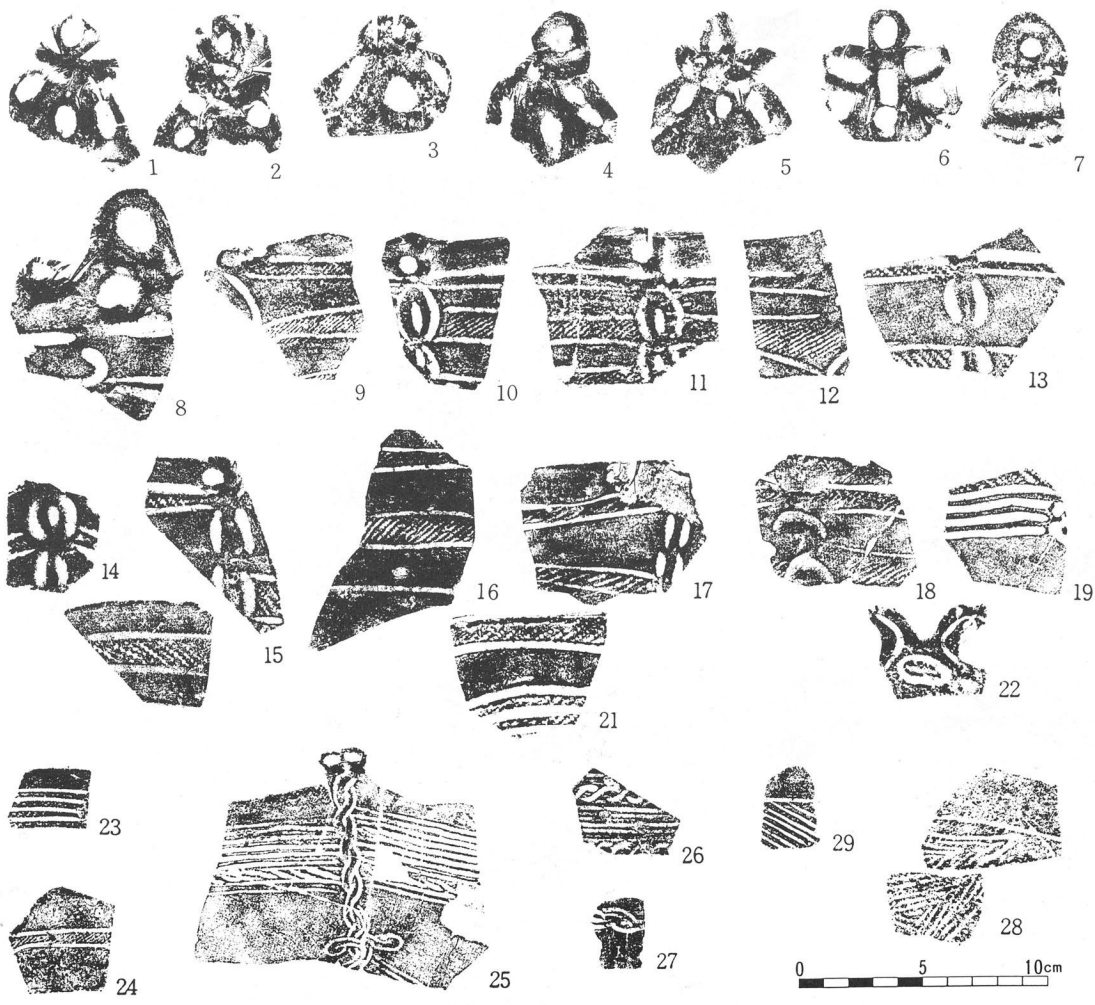
5 第IV群第4・5類C・D種土器(表)



6 同左(裏)



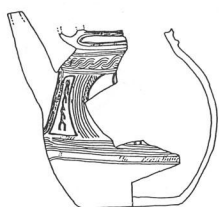
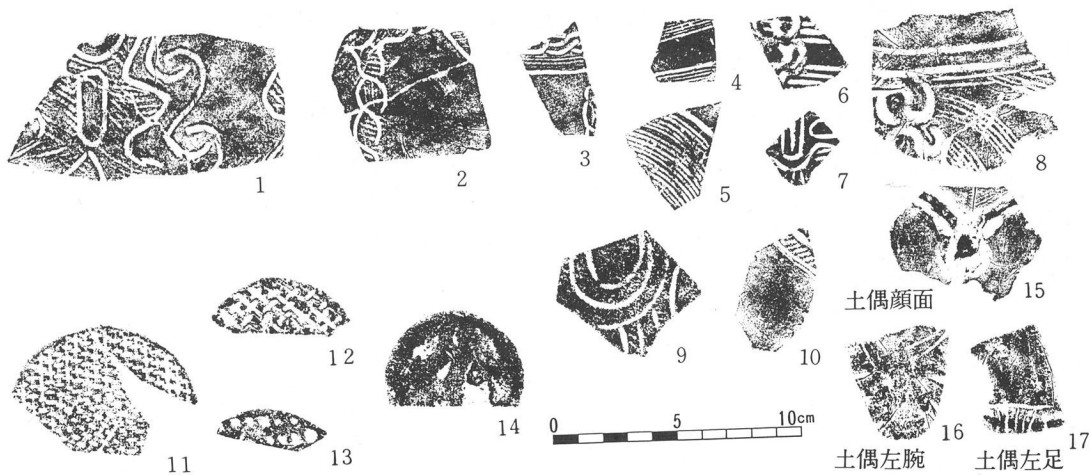
写真XXXI 第IV群第4・5類A・B・C種土器(加曾利B)



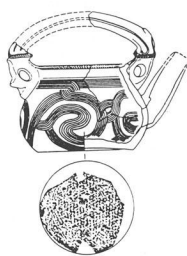
第47図 第IV群第4・5類A種土器<加曾利B>拓影図 (S=1/3)



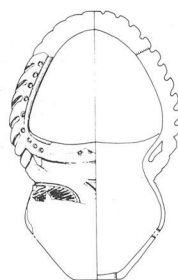
第48図 第IV群第4・5類B・C・D種土器<加曾利B>拓影図 (s=1/3)



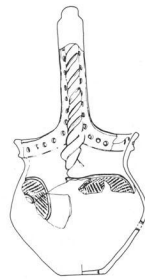
茂沢南石堂遺跡出土



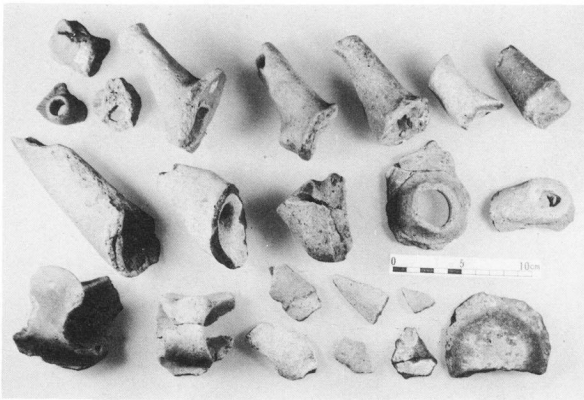
東正院遺跡



林ノ峰貝塚 I 遺跡



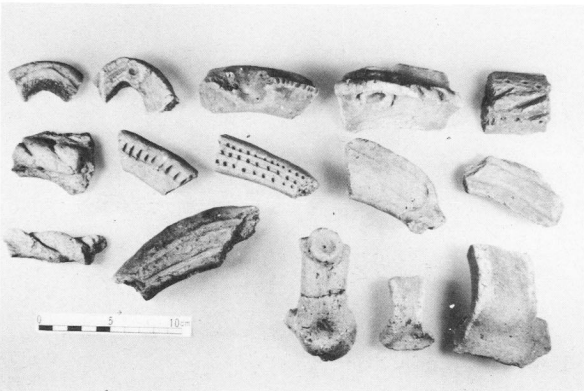
第49図 第IV群第4・5類D・E種、土偶拓影図 (S=1/3)



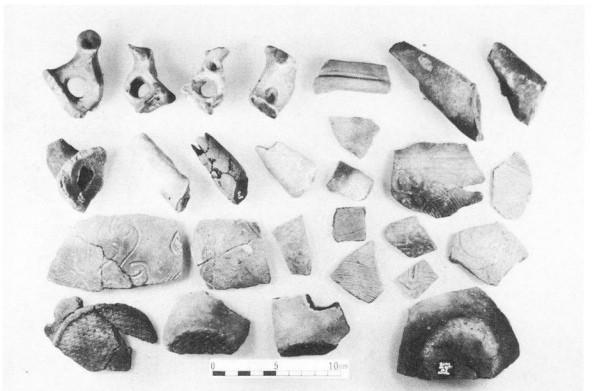
1 第IV群第2・3類E種土器



2 第IV群第2・3類E種土器



3 第IV群第2・3

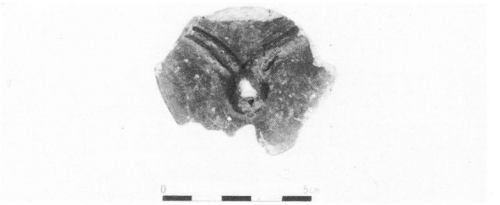


4 第IV群第4・5類E種土器

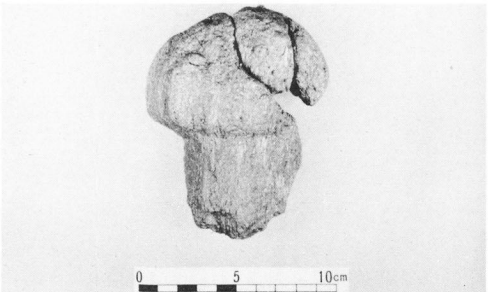


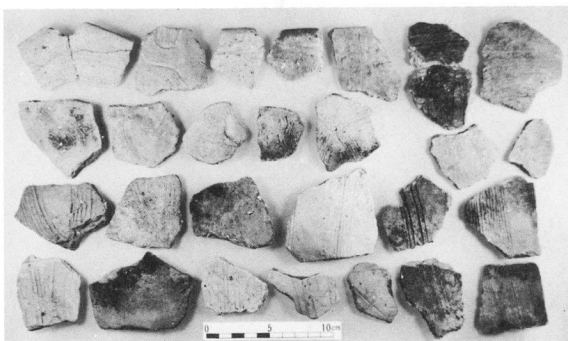
5 第IV群土偶・土製品

6 第IV群「仮面付土偶」

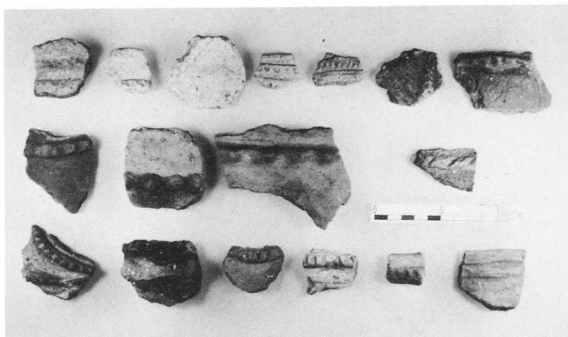


7 石棒（緑泥片岩）

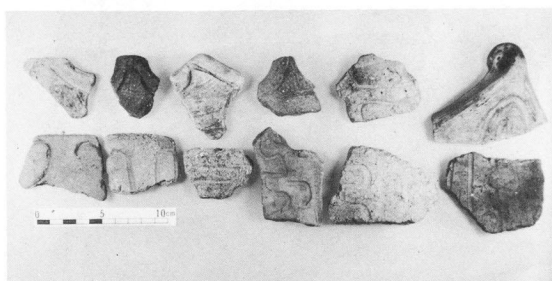




1 第IV群第7類 (条痕文系)



2 第IV群第7類 (凸帶文系)

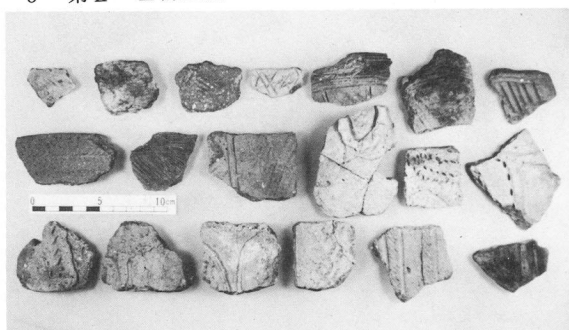


3 第IV群第7類 (蛇行沈線文系)

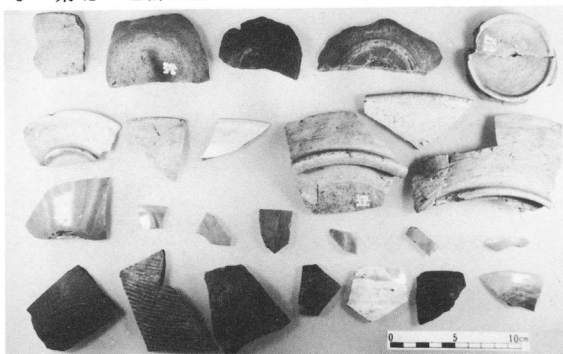


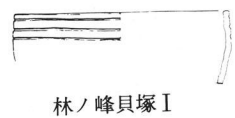
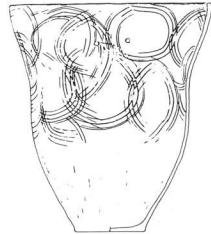
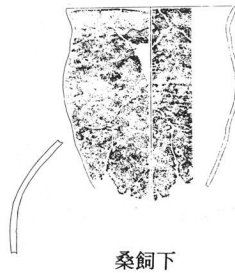
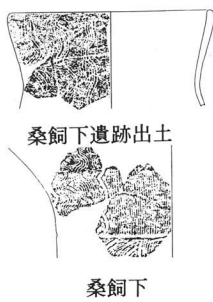
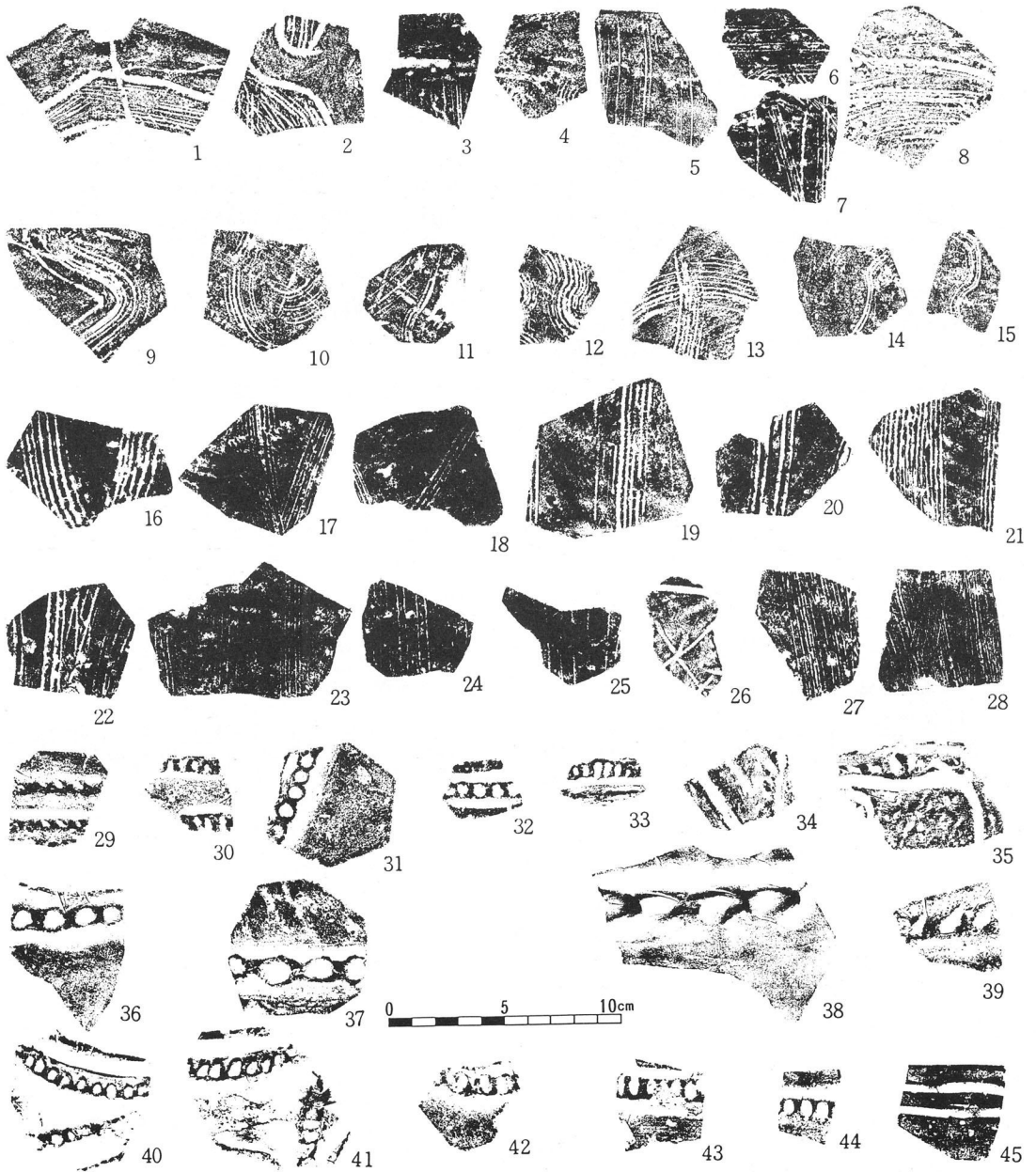
4 第IV群第7類 (平行沈線文系)

5 第II・III群土器

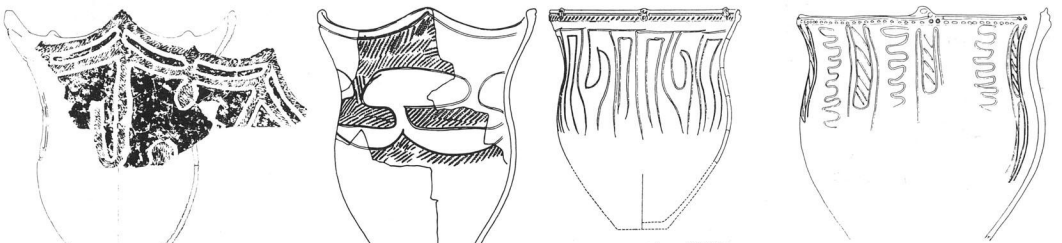
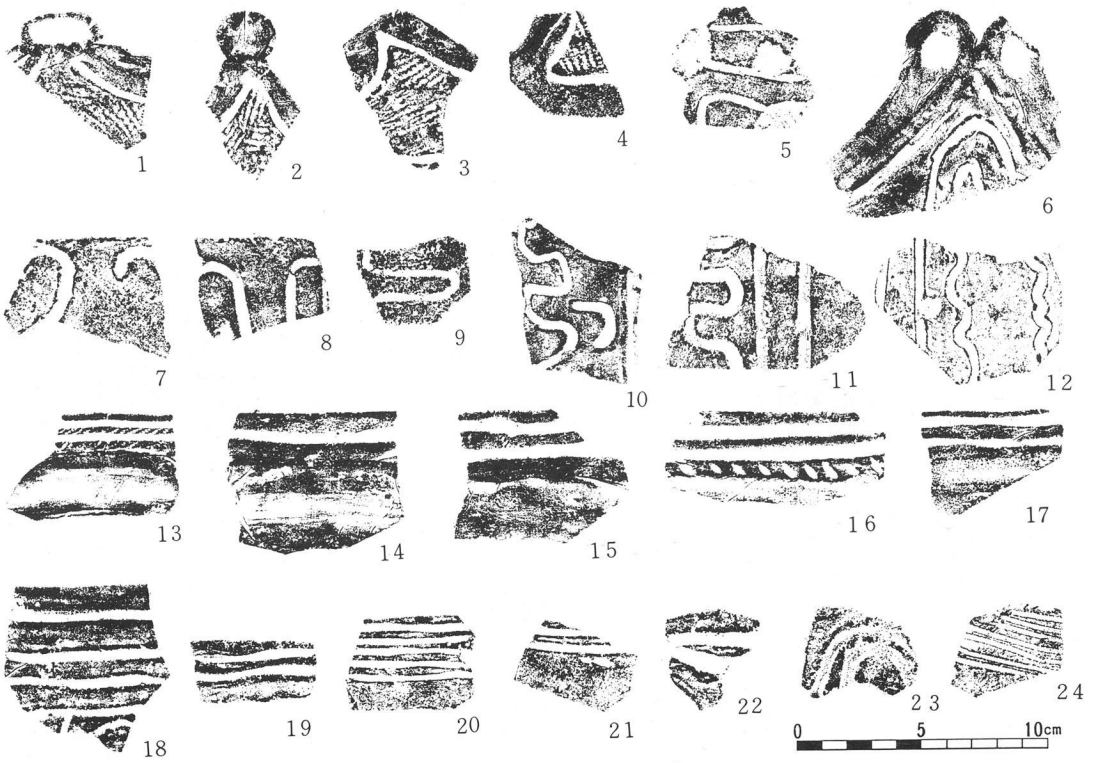


6 第VI・VII群土器





第50図 第IV群第7類A種土器拓影図 (S=1/3)

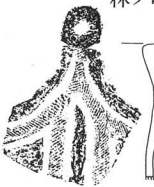


平尾第9遺跡

港北N.T荏田第5遺跡

林ノ峰貝塚I遺跡出土

林ノ峰貝塚I



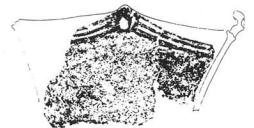
東正院遺跡



桑飼下遺跡

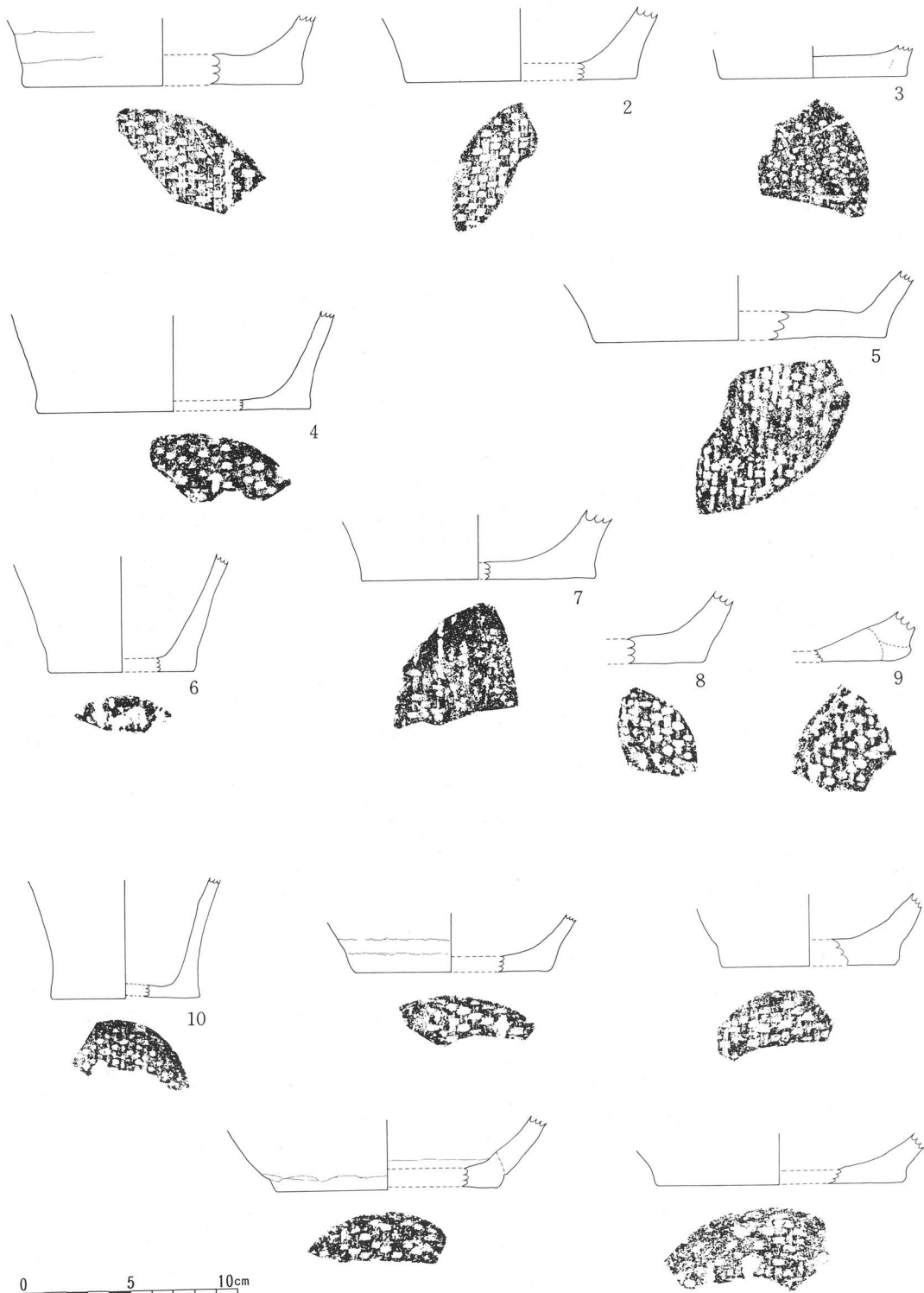


桑飼下

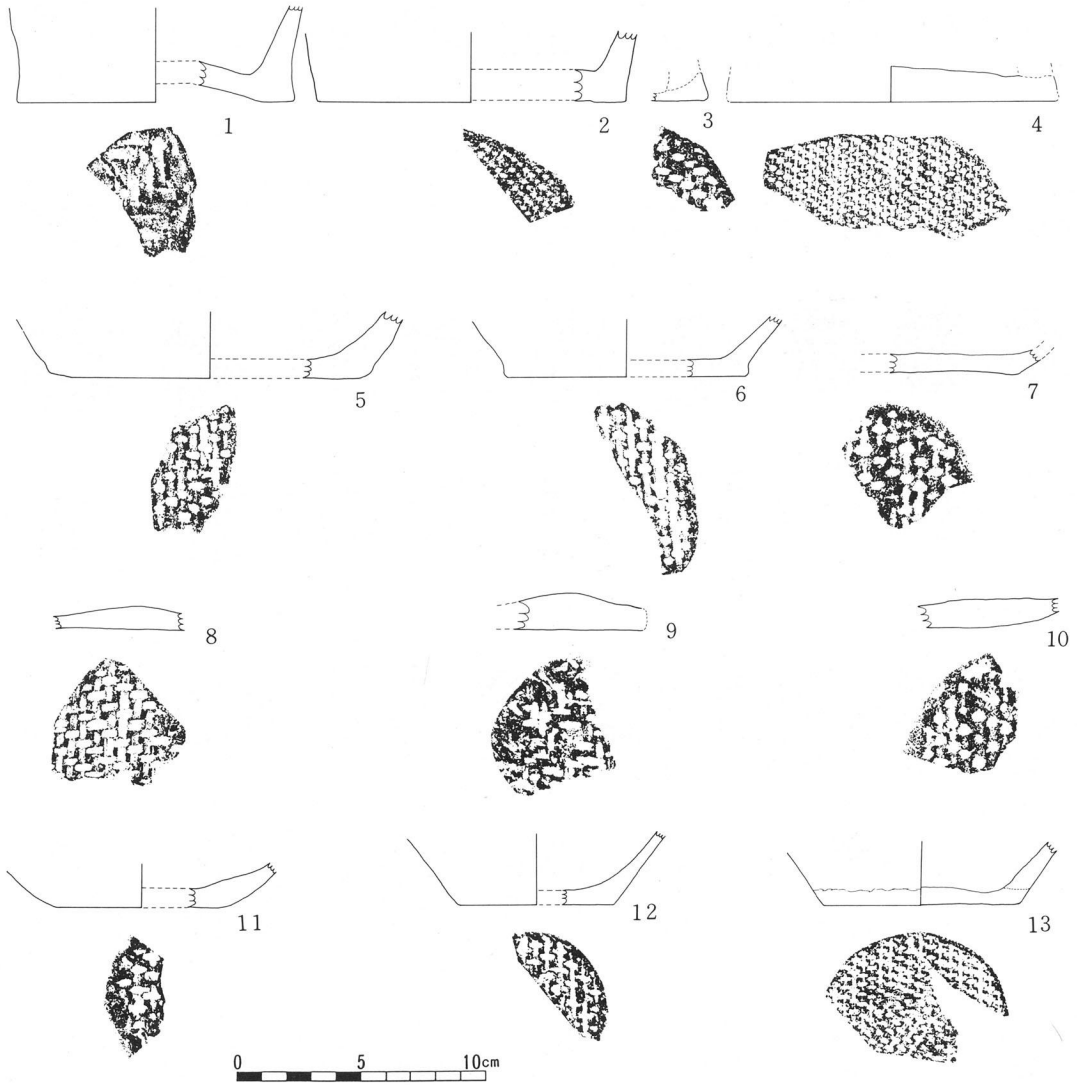


桑飼下

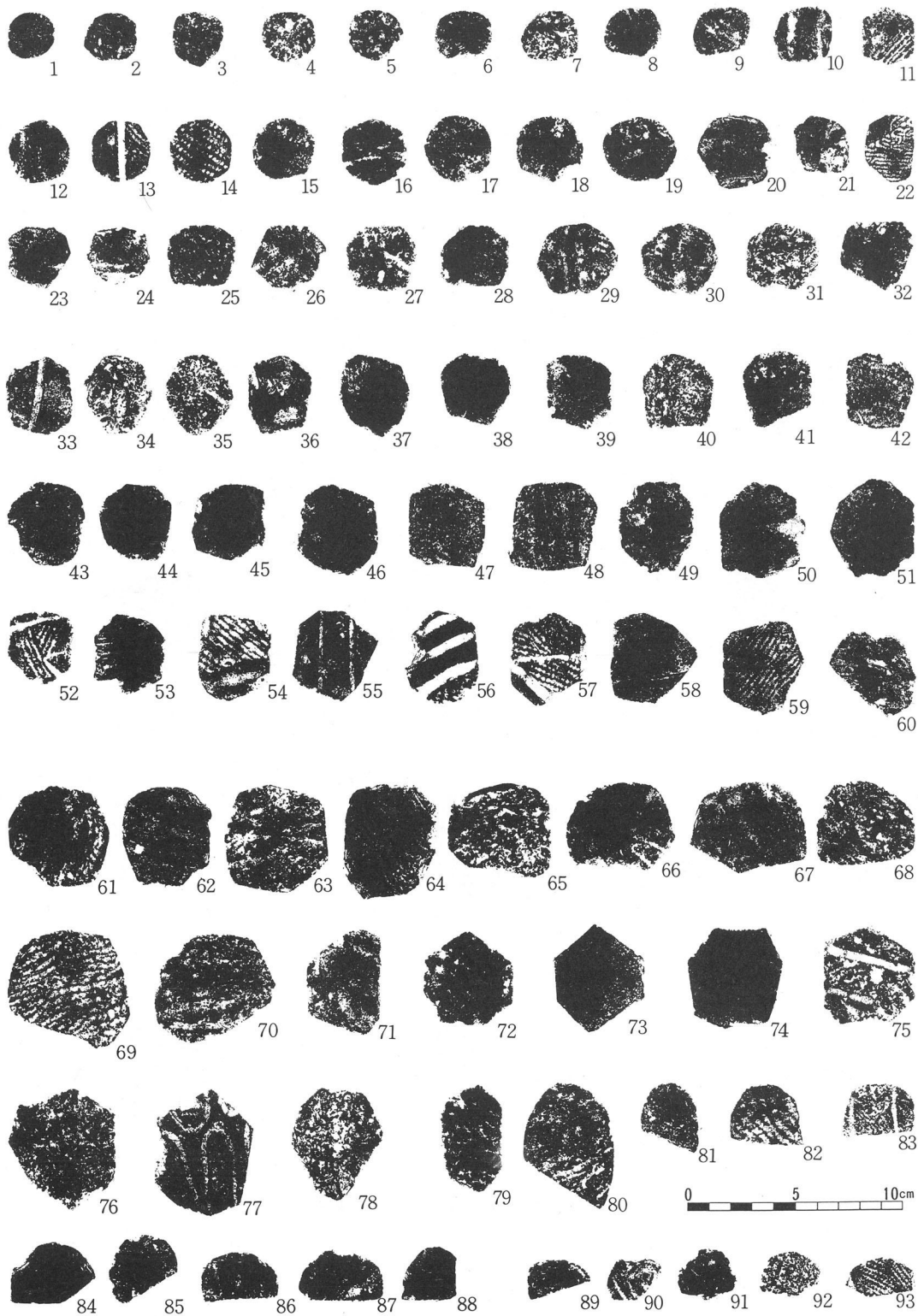
第51図 第IV群第7類A・B種土器拓影図 (S=1/3)



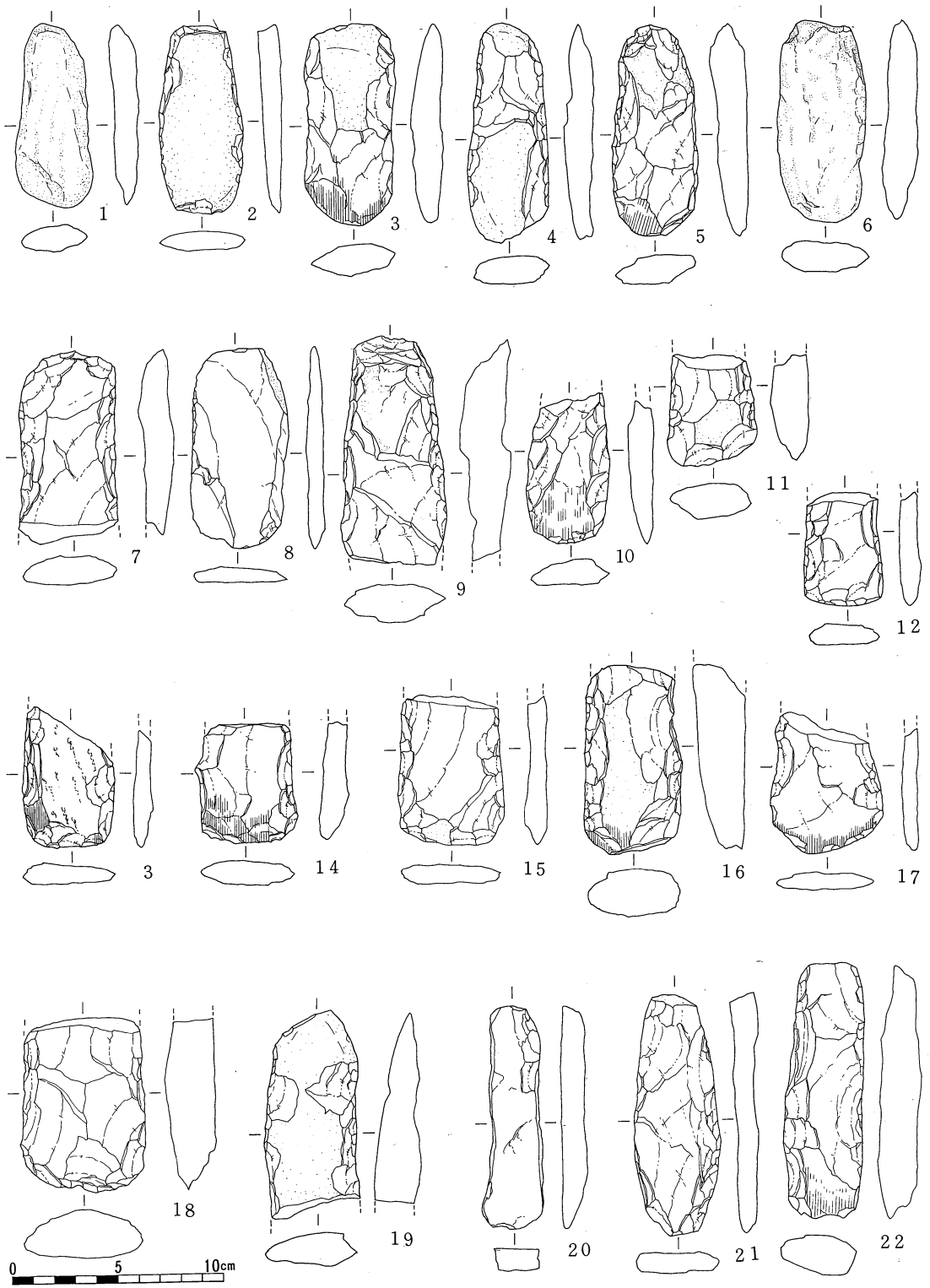
第52図 出土土器底部<第Ⅳ群第1・2・3類>実測図 (S=1/3)



第53図 出土土器底部<第IV群第4・5類>実測図 (S=1/3)



第54図 出土土製円版拓影図 (S=1/3)



第55图 出土打製石斧<小・中形>実測図 (S=1/3)

1 打製石斧<少・中形>



2 同上<大形>



3 磨製石器・石製品



写真 XXXIV 出土打製石斧及び磨製石器・石製品



第56図 出土打製石斧<大形>実測図 (S=1/3)

1 打製石錘<小・中形>



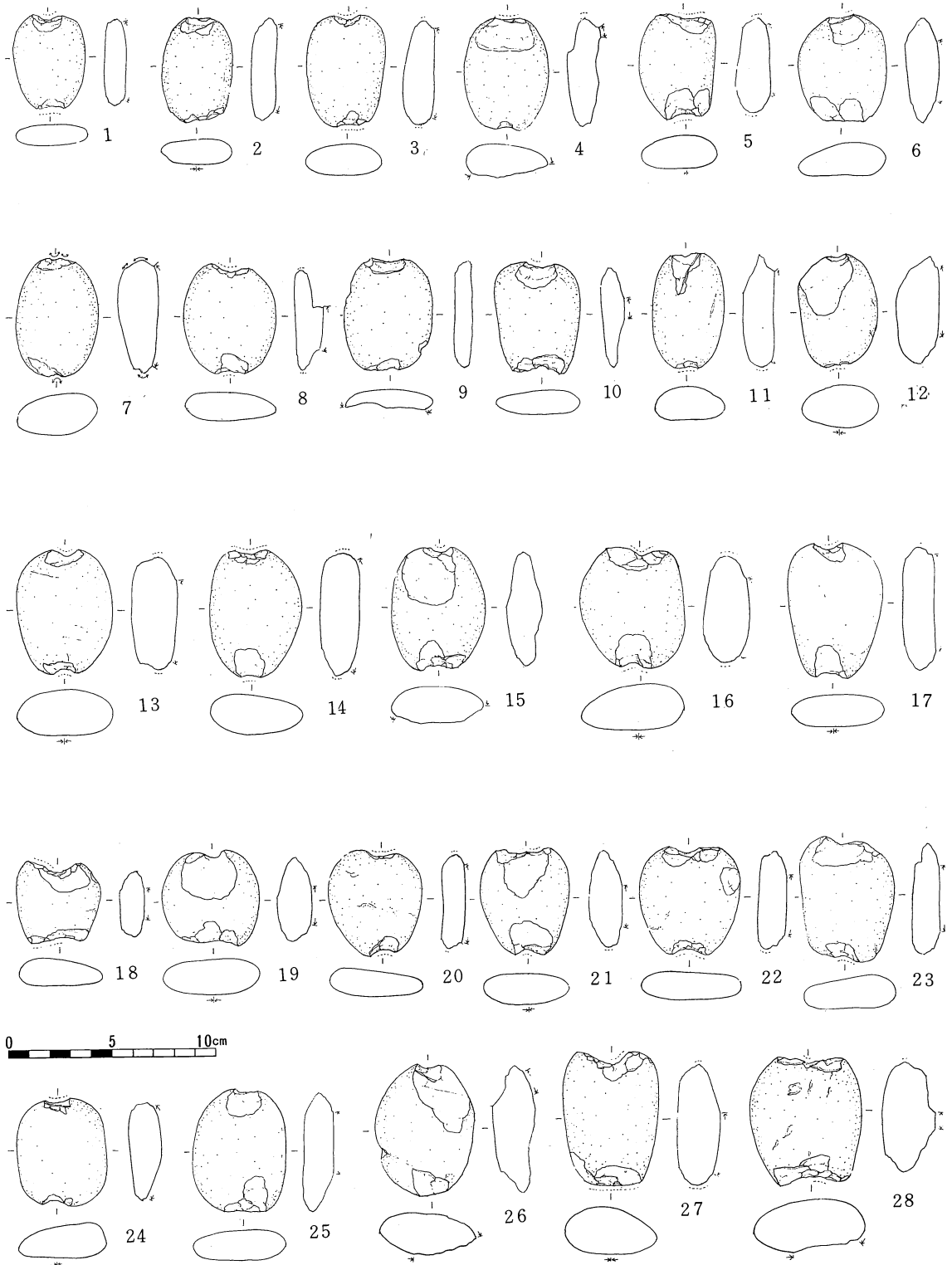
2 打製石錘<大形>



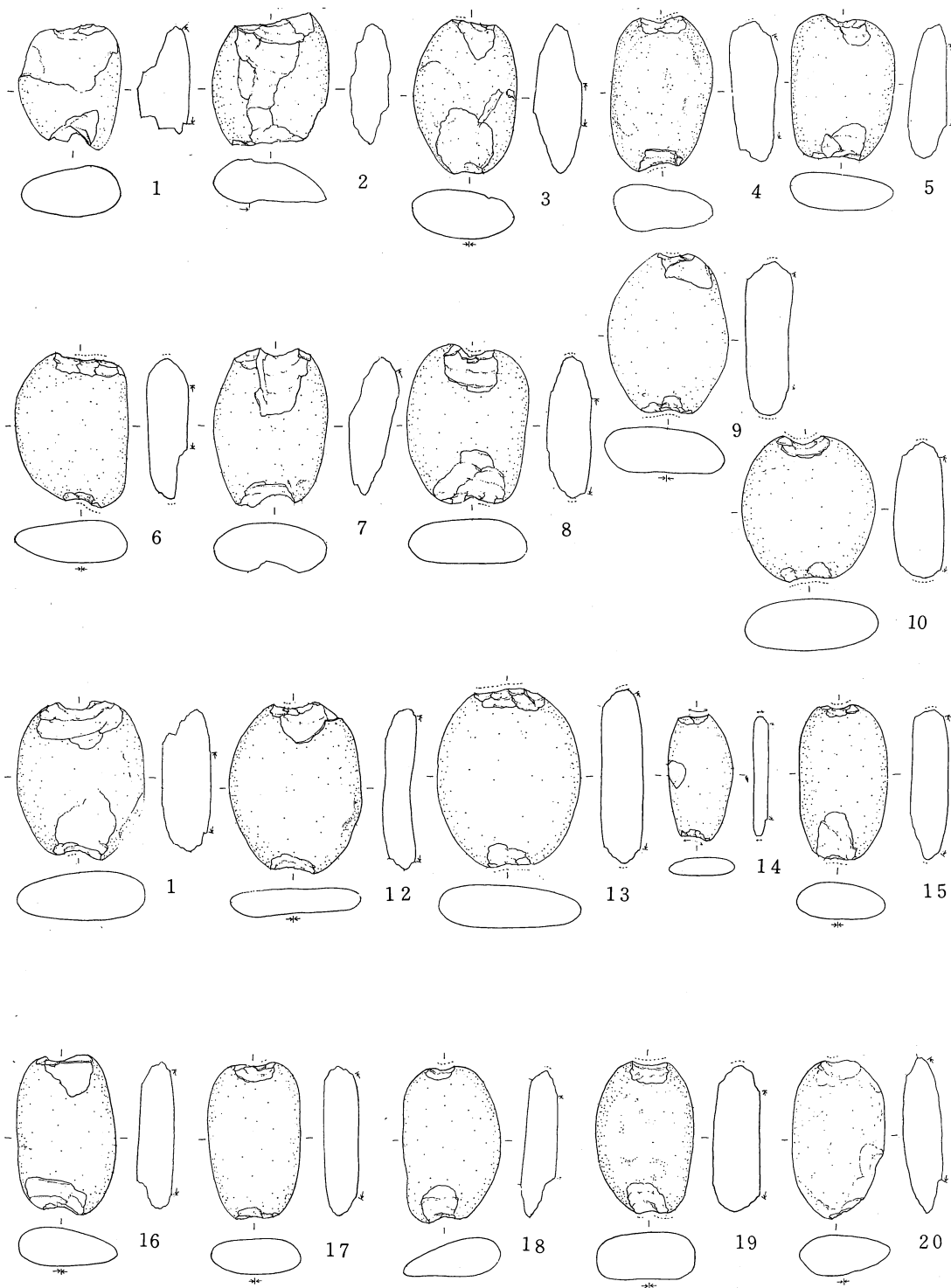
3 打製石錘<大形>切目石錘(下段)



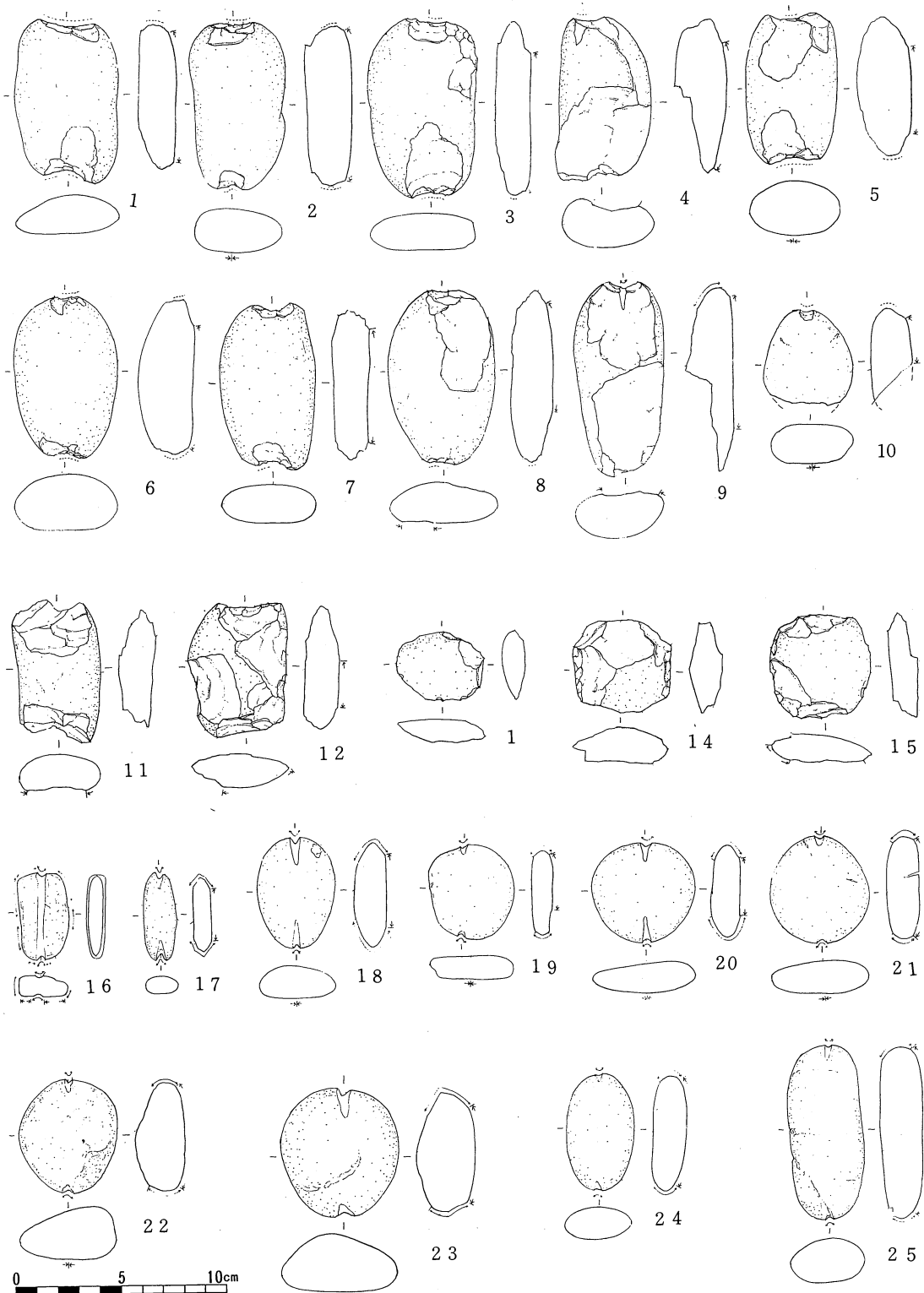
写真XXXV 出土石錘



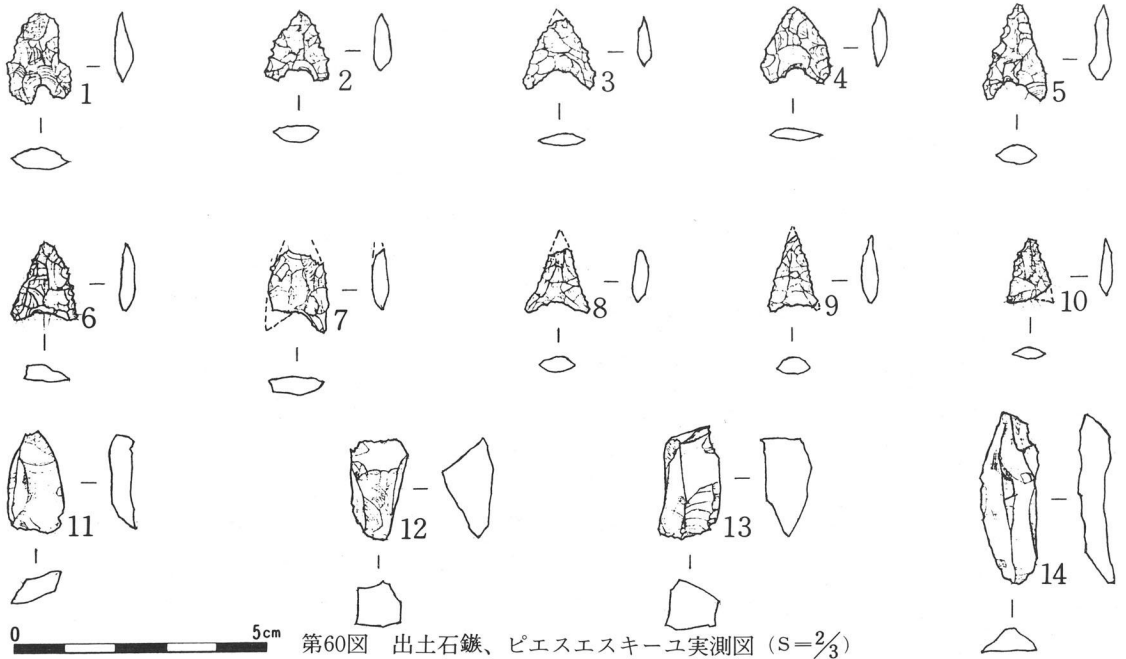
第57図 出土石錘<小・中形>実測図 (S=1/3)



第58図 出土石錘<大形>実測図 (S=1/3)



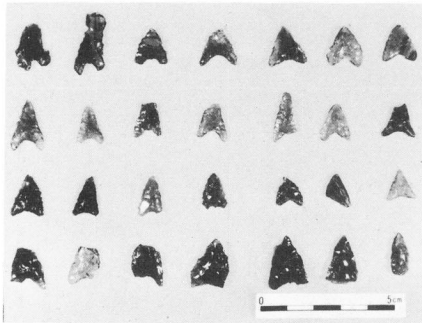
第59図 出土石錘<大形・切目>実測図 (S=1/3)



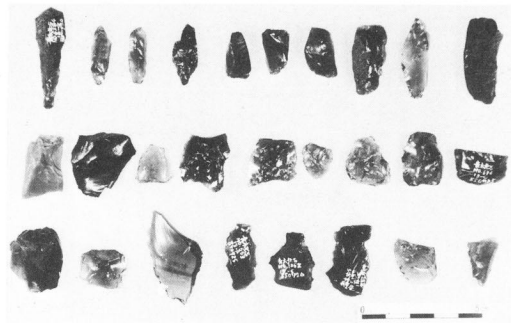
0 5cm 第60図 出土石鏃、ピエスエスキュー実測図 (S=2/3)

1 石鏃類

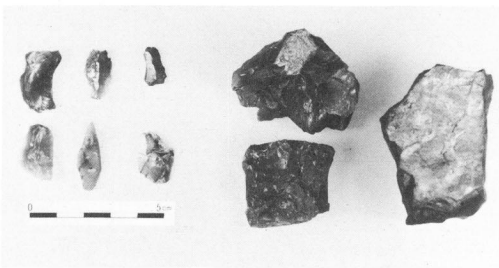
2 ピエスエスキュー (上段) スクレイパー (中・下段)



3 チャート片、塊



4 石槍



5 黒耀石片



写真XXXVI 出土石鏃、スクレイパー、ピエスエスキュー、石槍、チャート片、黒耀石片

第5節 土器底部の網代圧痕について

今回の調査により出土した土器底部は、総数287箇を数え、その大部分は、環状配石遺構の外帯にあたる一帯に多く散布状態で検出された。遺構としては、柱列址を伴う土壌群一帯が存在しこれに伴出した傾向が多く認められる。

この中から、底部に網代圧痕を有するものを摘出してみると82箇を数えた。殆どが底部のみで、破損または半欠品が多い。土器底部総数に対する網代底の比は28.6%を占めている。この数字は関東地方の後期遺構として知られる埼玉県平尾遺跡例の示す34%、同じく高井東遺跡では34%の比を示し本例もこれに近い。

本例82箇の土器底部はすべて縄文後期に属するものであるが、器壁の立ち上りも残存するものが少なく、上部の破片例からみて後期前半に属するものが大部分と思われ、胎土の面からも同様のことが看守される。

また、底部の胎土から見ると、粗製品が大部分で、精製品は僅かで、その研磨手法からみても加曽利B式に属するものと思われる。従って大部分が堀之内式に該当するものが多いと見做される。

網代圧痕の認められる82箇のうち、圧痕の状態や原体の識別可能なもの50個を選び、その観察点をまとめて一覧表に示した。この表から判明したことは次の通りである。

1 網代の編み方による類別 (61図)

網代の編み方については、経と緯の条による組み合わせであり、織り物と同じ原理によって作製されるものである。即ち経(たて糸)の条を密接に平行して固定しておき、緯(よこ糸)の条をこれに編みこんでいく工程である。従って、図版第61図に示したように経の条(白)に対する緯の条(黒)の編み方で分類されるのである。

本遺跡例50点の状況をまとめてみると次のようになる。経の条に対する緯の条で表す。

A	2本越え	1本潜り	1本送り	40点	80%	(第62図1~2)
B	2本越え	2本潜り	1本送り	2点	4%	(第62図23・24)
C	5本越え	5本潜り	5本送り	1点	2%	(第62図22)
D	3本越え	2本潜り	1本送り	1点	2%	(第62図29)
	2本越え	3本潜り				
E	4本越え	1本潜り	1本送り	4点	8%	(62図25~28)
	3本越え	2本潜り				
F	3本越え	3本潜り	1本送り	1点	2%	(第62図30)
G	4本越え	3本潜り	1本送り	1点	2%	(第62図31)

この他にも編み方の異ったものが若干存在するが、微少な破片や、器面の荒れが著しく、観察判別不可能なものが多い。

以上の観察の結果として本遺跡に於て最も多用されている編み形はA形、つまり「2本越え、

1本潜り、1本送り」である。他の編み方は、E形が8%、D形が4%を示し、C形、E形、F形、G形は各2%程度で極めて数は少い。この編み方の比率のうち、A形の占有率が高い遺跡とB形の占有率が高い遺跡とがあり、これが地域性を表明するものと指摘されている^(註)。この意味から本遺跡例の特性を把握するために著名な後期遺跡の諸例と対比してみたい。

まず、本遺跡と同地域の伊那谷において後期の配石址を出土した飯島町尾越遺跡においては、網代痕A形は49%を占め、また立石を伴う大規模な配石址を出土した伊那市百駄刈遺跡においては、同じく83%を占めている^(註)。北信千曲川水系においては、配石址及び組石石棺墓を出土した軽井沢町茂沢南石堂遺跡においては大部分の網代圧痕に、本遺跡例のA形が大部分を占めているという。以上の例からみても中部高地の後期遺跡にA形の占有率が高いと見做すことができよう。

関東地方の数例を参考にしよう。縄文後期の土器を各種出土した鎌倉市東正院遺跡においては同じくA形が82%を占め、また縄文後期前半の配石址を出土した神奈川県伊勢原市下北原遺跡においてもA形が82.65%を占め、東京都下稲城町平尾遺跡においても80%を占めていることが報告されている^(註)。

関西地方では縄文時代の自然堤防上の後期集落遺跡として著明な桑飼下遺跡出土土器の示す網代圧痕の形は、本遺跡のB形「2本越え、2本潜り、1本送り」が252個の内、129箇、即ち51.2%を占めている。これに対しA形は僅か17個で6.7%である。

以上のように、A形の占有率が高い遺跡が東日本に位置し、B形の占有率が高い遺跡が西日本に位置していることからみる本遺跡は東日本の地域的特性をもつものと考えてよいと思われる。中部高地や東海の後期遺跡の検討が詳細に行われねばならないが少なくともA形の編み方が当地域の基本的な網み方を示めすものと見てよいだろう。

2 網代の原体と編みかたについて

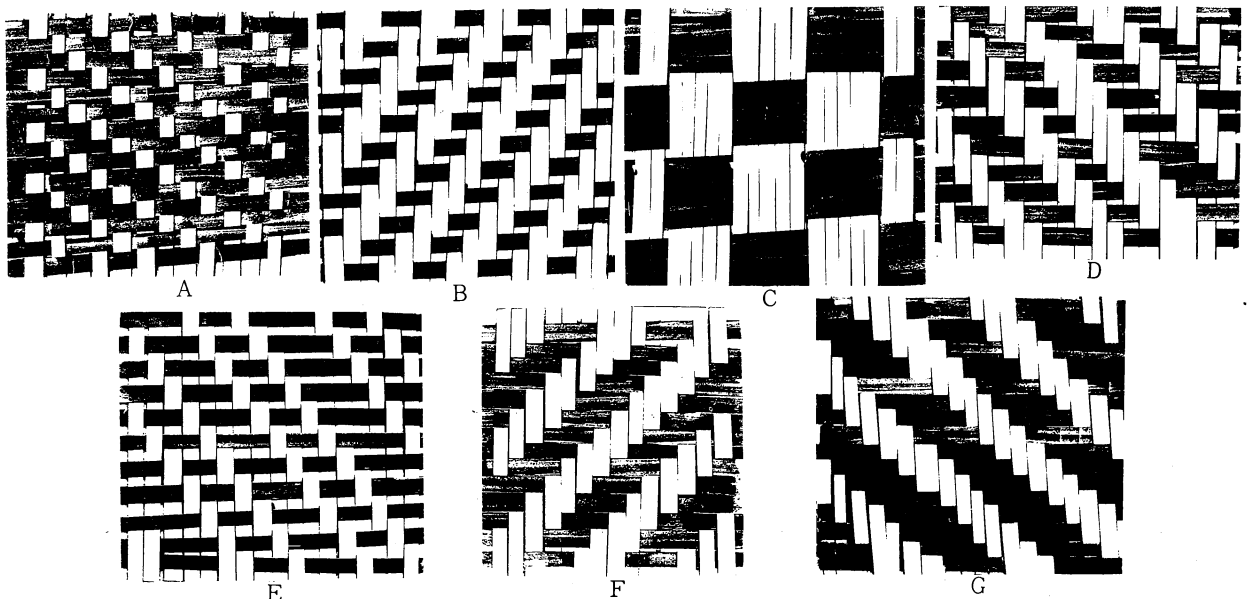
原体についてであるが、まず原体の条の巾は5種類ほどあり最大巾で0.5cm最小巾で0.1cmに至る5種類に分けられる。網代圧痕のある50例を巾で分類すると0.5cmのもの4例、0.4cmのもの12例、0.3cmのもの23例、0.2cmのもの7例、0.1cmのもの4例で巾0.3cmのものが約半数を占めている。経の条と緯の条は、組み合さっているものはほとんどが同じ巾である。

経の条と緯の条の大きな差違は、その断面形による場合に著しく認められる。経の条は平行して整然と並列しており、竹を薄く剥いで巾の一定した条を作出したものであるのに対し、緯の条は、ぶ厚い断面かまぼこ状を呈する弾力の強いものが用いられている。つまり緯の条は、断面円形のつくさを、半割して裂き、この半円形を正面に向けて、整えられた経の条に編みこんでゆくと、弾力の強い条が越える毎にもりあがり、正面は凹突が激しくなり、裏面は平板な網代ができる。これは土器製作の当初において底部が網代に固定される度が強くなり裏面は平で回転し易くなる目的をもって編みこまれたことを示すものと思われる。この例は条の巾の比較的広い網代に認められ第62図7、12、19、21、29、に示したように節が長方形にならず長楕円形を示すものは曲面をもつ弾力の強い原体であったことを示している。

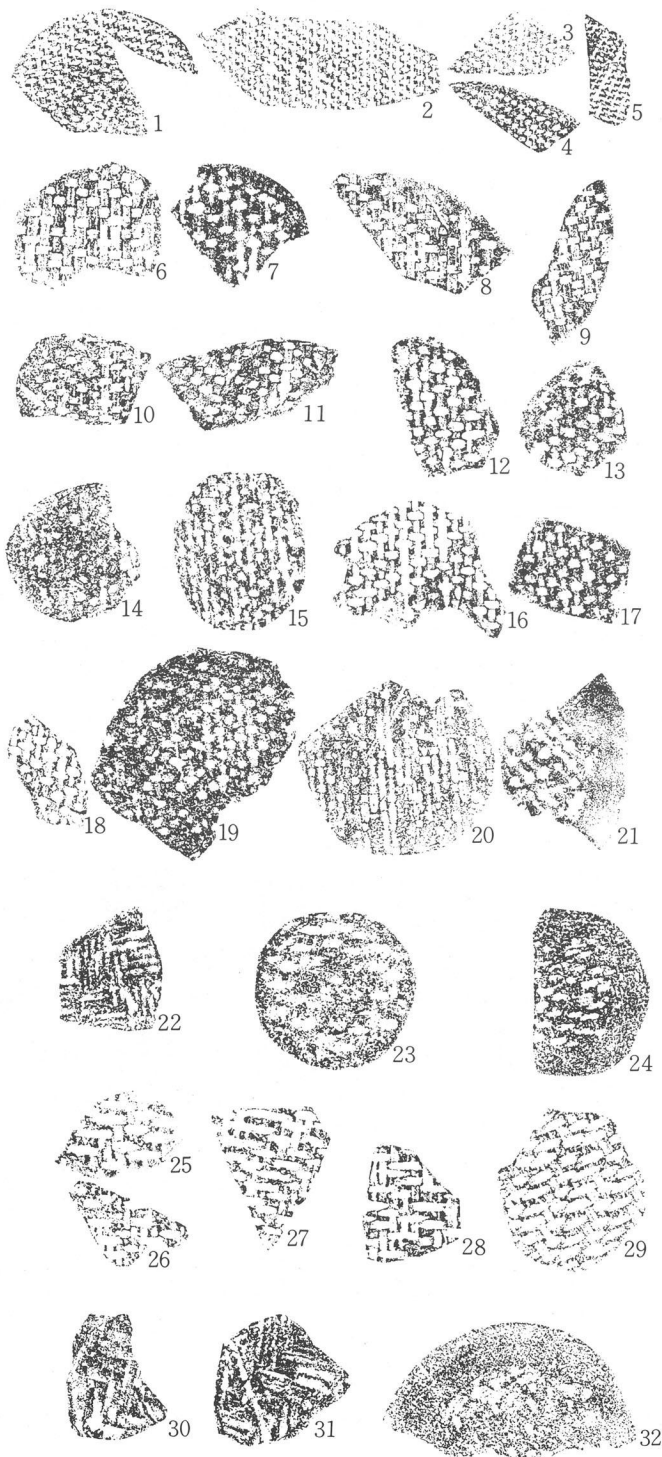
(林 茂樹)

出土土器底部網代圧痕文分類表

遺物番号	図示番号	緯の編み方				条の巾		形式名	調整度		備考	遺物番号	図示番号	緯の編み方				条の巾		形式名	調整度		備考
		越	潜	送	送方向	経	緯		粗	精				越	潜	送	送方向	経	緯		粗	精	
6316	1	1	2	1	L	3	3	A ₁		○		5550		2	1	1	L	4	5	A ₂		○	
4311	23	2	2	1	L	5	4	B		○		5382	20	1	2	1	R	3	3	A ₂		○	
3987	32	1	2	1	L	3	4	A ₁		○		3335	16	$\frac{4}{3}$	$\frac{1}{2}$	1	R	3	4	E		○	
5386		1	2	1	R	2	2	A ₁		○		1090		1	2	1	L	3	4	A ₁		○	
2729		1	2	1	L	1	1	A ₁		○		2880	13	1	2	1	L	4	5	A ₁		○	
5575	2	1	2	1	L	2	3	A ₁		○		5257	14	1	2	1	R	3	3	A ₁		○	
5677	8	1	2	1	L	4	4	A ₁		○		4763	12	1	2	1	L	3	4	A ₁		○	
5812	16	1	2	1	R	3	3	A ₂		○		5697		1	2	1	L	2	3	A ₁			
3728	19	1	2	1	R	3	4	A ₂		○		4688	7	1	2	1	L	3	4	A ₁			
4305	29	$\frac{3}{2}$	$\frac{2}{3}$	1	R	4	3	D		○		5443	5	1	2	1	L	3	3	A ₁			
5755	9	1	2	1	L	4	3	A ₁		○		5187	5	1	2	1	L	1.5	1	A ₁		○	
5362	11	1	2	1	L	3	4	A ₁		○		3128	26	$\frac{3}{2}$	$\frac{2}{3}$	1	R	3	5	E		○	
5595		1	2	1	R	2	3	A ₁		○		3155		2	1	1	L	3	4	A ₂		○	
3534	10	1	2	1	L	3	3	A ₁		○		5821		2	1	1	L	4	5	A ₂		○	
5871	22	5	5	5	L	3	3	C		○		5263		1	2	1	L	4	5	A ₁		○	
5601	28	$\frac{4}{3}$	$\frac{1}{2}$	1	R	3	3	E		○		5841		1	2	1	R	3	3	A ₁		○	
5363		1	2	1	R	4	4	A ₁		○		5085	17	1	2	1	L	5	5	A ₁		○	
5023	31	4	3	1	L	4	3	G		○		5645	3	1	2	1	L	2	3	A ₁		○	
103	30	3	3	1	L	5	5	F		○		5864	18	1	2	1	L	4	4	A ₁		○	
5197	21	2	1	1	L	3	3	A ₂		○		5820		1	2	1	L	4	4	A ₁		○	
1978	15	2	1	1	R	4	3	A ₂		○		3079		2	1	1	L	3	3	A ₂		○	
5847		1	2	1	R	4	3	A ₁		○		501	25	$\frac{4}{3}$	$\frac{1}{2}$	1	L	3	4	E		○	
5255	24	2	2	1	R	2	3	B		○		5571	4	1	2	1	L	1.5	1.5	A ₁		○	
4796		1	2	1	R	3	4	A ₁		○		5211		1	2	1	R	3	3	A ₁		○	
4882	6	1	2	1	R	4	4	A ₁		○		1	1	1	2	1	L	2	2	A ₁		○	



第61図 出土土器底部網代圧痕文の種類 (網代作成者、林茂樹)



第62図 出土土器底部網代压痕文拓影図

第Ⅳ章 総括

青木北遺跡は遺跡総面積で約60,000㎡と広範囲を占め、海拔標高690～720mの間の塩田川左岸段丘上に位置する。

今回の発掘調査により検証できた面積は約3,000㎡で、全体の5%に充たないが、数多くの遺構と遺物、さらには問題点と研究課題を提示してくれた。

遺構の中で特筆されるものは、先ず第一に第Ⅱ調査区北部分北端より検出された「環状配石址群」である。県営ほ場整備の対象地区外がさらに北の畑であった為、「環」状の弱の検出にとどまり、全体像は明確にできえなかったが、現状保存されているので、今後の調査等も充分可能である。検出された部分から、全体像を推定するならば、東西直径28～30m、南北直径26～30mのほぼ円形を構成するものであろう。「配石址群」として把握したのは、37基（内14～17は外側の土壇・ピット群へ包括される）の個々の配石址が環状をなして構成されているからである。

配石址の規模・形状・主軸方向・構造等について述べると、最小規模は配石址37で34cm×28cm、最大規模は配石址22で280cm×240cmで、総体的にはばらつきがあるが、長軸50～100cmのものが8基、長軸101～150cmのものが12基、長軸151～200cmのものが10基、長軸201cm以上のものが7基である。形状（平面形）は、円形—9基、楕円形—13基、長方形—7基、三角形—1基、ひし形—1基、半楕円形—1基、不整形円形—4基、不整形楕円形—1基となるが、円形・楕円形・長方形以外は、耕作等のうねが入り込み、後世で破壊をうけ配石の一部が欠けた為、現状では前記の三角～不整形楕円形として把握したものである。主軸方向は、N45°～90°W内のものが6基、N0°～44°W内のものが8基、N0°～44°E内のものが18基、N45°～90°E内のものが5基であり、北を一般的に指向している。構造のうち、掘り込みの有無については、配石を除去して調査を実施するまでに至らなかったことから基盤により判断し、配石址14～16は黒褐色土直上、配石址17～19、25～36、48は暗茶褐色土直上、配石址22・24は暗茶褐色土と砂礫黄褐色土（砂礫質ローム）の間直上、外は砂礫黄褐色土直上に構築されている。このことは、未調査区域（配石址群北側及び東側）の方が比較的高く、南側・西側が按部である為、黒褐色・暗茶褐色土の堆積以後に「配石址群」を構築した為、上記の差が表われているものである。出土遺物は、配石址に伴うものとしては比較的少ないが、配石址14からは石皿状磨り石が2点、配石址28北からは蜂ノ巣石が出土し、他かからは縄文時代後期土器片、石器片等が出土している。立石として明らかなものは、配石址24・25・28に伴い、他の配石址にも可能性の強い「柱状石」があるが、決め手を欠いていた為、断定はひかえた。

配石址の特徴は一覧表に詳細であるが、大別すると、「礫を長方形に密接に配したもの」「小礫を配したもの」「大礫を配したもの」「両端に大礫を配したもの」「中心部に大礫を配したもの」「片側に大礫を配したもの」「長軸に列に石を配したもの」「中心部に礫がないもの」に分けられ

細部に至ると統一性が薄くなるが、耕作時の破壊の影響も判断規準に受ける為、上記の大別に止めておきたい。

「環状配石址群」が、内帯・外帯・外側帯（土壙・ピット群等）により構成（セットとして）されることは、前述したが、その規模は、外側帯で、直径60mにも及ぶと推定できる。

外側帯の小竪穴・土壙・ピット群（柱穴址含む）の詳細については各一覧表を参照願いたい、特に、小竪穴1—2、土壙17—18、土壙19—20が、ほぼ北軸方向で列をなしている点は注目される。また、P20～P30は m × m のほぼ方形の柱穴址として把握できる。

これらの遺構の覆土上層から下層に至るまでに、数多くの遺物が出土している。一例として、第32図の土偶・注口土器（注口部）分布図や第39図の出土遺物分布図を参照していただきたい。

時代別では、縄文時代前期、同中期初頭～後半、後期初頭～中葉、奈良～平安時代、室町～安土桃山、近世にかけて出土している。出土量の99%が縄文時代後期初頭～中葉のものである。

縄文時代後期の土器の時期的・量的検討を記述すると、称名寺式（精・粗製深鉢形土器）一約6%、堀之内1～2式（精・粗製深鉢形土器・同鉢形・同浅鉢・注口土器）一約47%、加曾利B1（半精製・精製深鉢形土器・同鉢形・同浅鉢・注口土器）一約33%、加曾利B2（精製鉢形土器・注口土器・釣手土器）一約1%、東海・関西・北陸系（精・粗製深鉢形土器、同鉢形土器）一約13%と大別できる。特に東海一林ノ峰貝塚1遺跡、関西一桑飼下遺跡、北陸一井口遺跡三十稻場遺跡等の影響を受けた（逆に与えた）と考えられる土器片も多い点、また下北原遺跡出土の加曾利B1式の深鉢形土器（精製）と当遺跡出土のものが極似する点は注目される。

石器では、打製石斧の中で、小・中形に比して大形が多い点、石鏃・石錘が非常に多い点磨製石斧もセットで出土していることが挙げられる。

また、環状配石址群の南・東側から散在して出土している土偶は、破片で9点を数え、「仮面付土偶頭部」「同一個体の左・右腕（2対）」「肩張り腕部」「左足」「足部2」という内容である。

以上の様な概略であるが、「環状配石址群」についての研究・検討も全体的には過渡期的状況であり、前章（註）でも記したが、概念規定や分類把握に不十分さがあると言わざるを得ない。

今回調査した範囲は山砂を約180㎡埋め込み保存を最終的には実施してあるので、今後、「環状配石址群」等の調査研究資料の一助とはなろう。

上伊那地区内においても、当遺跡と同時期の遺跡が存在する可能性もあり、地域的な、時間的な把握や集大成がなされて行けば幸いと考える。

最後となりましたが、発掘現場へ遠路より御足労をいただきました慶応義塾大学名誉教授江坂輝弥先生、遺物の鑑定に御指導をいただきました（財）長野県埋蔵文化財センター百瀬長秀主任、平林彰主任、文献指導と御教示をいただきました辰野町郷土美術館学芸員赤羽義洋氏をはじめ、多くの方々の御理解と御協力により無事、所期の目的が達成できました。ここに記して感謝の意を申し上げる次第です。本当にありがとうございました。（小原晃一）

青木北遺跡

— 緊急発掘調査報告 —

昭和61年3月20日 印刷
昭和61年3月25日 発行

編集 駒ヶ根市上穂南2番15号市立駒ヶ根博物館内
駒ヶ根市埋蔵文化財発掘調査会
(TEL) 0265-83-2719

発行 駒ヶ根市赤須町20番1号
駒ヶ根市教育委員会
南信土地改良事務所

印刷 長野市中越293番地
ほおずき書籍株式会社
